

---

# **とある都市の事象選択《オールセレクト》**

ITEM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある都市の事象選択オールセレクト

### 【NZコード】

N7279X

### 【作者名】

ITEM

### 【あらすじ】

学園都市にある少年がいた。学園都市第一位の垣根帝督、“幻想殺し” 上条当麻を親友に持つ彼はある問題を抱えていた・・・。それは彼が人知を超えた力を持っていること。この小説は中二病にご 都合主義、さらには主人公はほぼ無敵ときています。それでもOKという方はぜひお読みください。

## プロローグ（前書き）

祝初投稿です？なにとぞよろしくお願ひします？

## プロローグ

### 『窓のないビル』

その建物は高層ビルが多く建ち並ぶ学園都市第7区に建つていて。その名の通りにその建物には窓がない、それどころか中に入る入り口すら見られない。この異様な建物こそ学園都市のトップ、統括理事長アレイスター・クロウリーの根城である。

特殊な液体で満たされた培養器の中で逆さまに浮いており、大人にも子供にも男にも女にも見える容姿を持つ学園都市統括理事長の前に、一人の少年がズボンのポケットに入れながら立っていた。  
重苦しい空気を打破するかの様に少年が口を開いたことから物語は始まる。

## 第一話（前書き）

第一話完成したんで投稿します。(^\_ ^)o 早くも中一病満載ですね(^-^)

## 第一話

「いー加減人の夢の中に現れんのやめてくれねエ？寝起き悪いし寝不足になるし最悪なんだけど？」

黒をベースとしたパジャマに身を包み、左右違った色の瞳を持つ鮮やかな茶髪の少年 神鬼大和は悪態をつく。

「君の夢に現れたのは君に用があるからだ。」

「当たり前だボケ。用もねエのに出てきたらブツ殺すぞ。」

まアコイツが夢に現れるのはよくあることだし、もう慣れた。ハア～とため息を付くと大和はアレイスターに用件を聞く。

「で？何の用だ？どうせ仕事だろ？さつさと内容話して消えン。」

「仕事は仕事だか君が思っている様な内容ではないぞ。」

「あア？ビオゆう意味だそれ？いつもの掃除じやねエのか？」

掃除と言つのは学園都市の暗部用語の一つで殺しや破壊活動のことを指す。

「君には櫛川中学といつ学校に通つてもうつ。」

「・・・悪イもつかに言つてくれや。」

「何度も言おひ、君には櫛川中学といつ学校に・・・「消えろ力ス」

続きを聞きたくなかった大和はアレイスターの言葉の上に言葉を重ねる。

「酷いな。君がもう一度言えと言つから言つたの」・・・

「ふざけんじやねエぞコラ? 何でオレがんなことしなきやなんねエ  
んだよオ? 今更学校に通えだア? 小学校に通わせなかつたのはど  
のどいつだア?」

「説明は最後まで聞きたまえ。何も君に青春を謳歌してもうつ訳で  
はない。」

「ますます意味わかんねエよ。そここの学校の先コーでも殺すのかア  
?」

「その学校に近々一人の少年が入学していく。名前は垣根帝督、上  
条当麻だ。」

「それがどオした?」

「彼らはいづれ私のプランに大きく影響する者たちだ。頭の回転が  
早い君ならもうわかつてもらつたと思うのだが?」

「オーケーオーケー理解したよ。つまりアレだなアソイツらと同じ  
学校に通いつつ護衛と監視の両方やれつてことだなア?」

「理解が早くて助かるよ。」

なるほど護衛と監視か。それなら学校に通えといつのも何とか納得  
できる。だが、ここで一つ疑問が生まれる。アレイスターに質問  
しようかと思ったがどうせプラン関連の質問には答えてくれないと  
思つたのでやめておいた。

「因みに垣根帝督は近い将来、学園都市の第一位となる者だ。君の  
手に負えるかな?」

アレイスターは嫌味にも聞くこえる質問をしてくる。だが大和はそん  
なこと気にすることもなく吐き捨てる。

「誰に言つてんだア? 未来永劫オレに勝てるヤツは存在しねエよ。」

## 第一話（前書き）

第一話でやめました。(^\_ ^)o 駄文ですみません( ^\_ ^)

## 第一話

突然言い渡された学校通学命令という最悪の夢から目覚めた大和はポリポリと頭を搔く。

アレイスターが言つには入学式は一日後、入学に必要な手続きや入学後の教科書などはこちらで用意することだ。

と言つてもすでに学園都市最高クラスの頭脳を持つ大和には必要なものなのだが、形だけでも揃えておかなければ不審に思われるかもしれない。

(とりあえず今何時だ?)

時間を確認するため大和は枕元にあつた携帯電話を開ける。

現在時間 AM 8：48。

普通に学校に通つてる者なら遅刻確定の時間だが学校に通つていな大和からすればかなり早い時間だ。

(一度寝つて気分でもねエしなア・・・ちイとばつか早エけど起きるかア)

ベッドから身を起こすと顔を洗うために洗面所へと向かう。大和の自宅でもある学生寮は学園都市の中で一、二を争う大きさを持つ。アレイスターからプレゼントなのだが、一人で住むには広過ぎるため大和からすれば普通の学生寮の方が良かつたのだ。

顔を洗い、歯を磨き終わると大和はコンタクトレンズを付け始める。別に大和の視力が悪いのではなく、ある理由からコンタクトレンズを付けているのだ。

(腹減つたなア・・・自分で作んのもメンドオだしファミレスでも

行くか・・・

ファミレスで朝食を摂ることにした大和は素早く服を着替え、身支度を整えると学生寮を後にする。

学校の登校時間が過ぎたこともあつてか歩く人の数は少ない。本来ならこの時間に学生が出歩いていることがおかしいのだが、そんなことどこ吹く風と言わんばかりの堂々とした態度で大和は歩く。いつも通りに近道として使っている路地裏を通つていると何やら人らしきものがうずくまっていた。

(何だこりや？人か？)

近くで見てみると、それは小さな女の子だった。見たところ髪も乱れているし、着ている服もボロボロだ。出来れば面倒事は避けたい大和だったがほつとく訳にもいかないのでとりあえず声を掛けてみた。

「おい？ 大丈夫かア？ 生きてるかア？」  
「・・・ん、此処は・・・？」

意識はある、どうやらまだ生きてはいるみたいだ。

「お前、いくら夏だからってそんなカツコで寝てたら風邪引くぜ  
「・・・超ほつといてください、あなたには関係ないことです」

せっかく声掛けたのにこれがよ。普段ならこのままほつておくのだが今日ばかりは何故かそんな気にならなかつた。

「まあ そう邪険にすんなよ お前朝メシは食つたかア？」

「いえ・・・まだですけど・・・」

「じゃ丁度いいや～今から朝メシ食いに行くからお前も一緒に来い」  
そう言つと大和は少女の腕を掴み半ば強引に引っ張つて行つた。

「えつ？ ちょっとー！ 何処連れて行くんですか！？」

「いらっしゃいませ！ 何名様ですか？」

ウェイトレスの元気な挨拶が一人を出迎える。若干少女のカツコを見て顔をしかめたがすぐにいつもの営業スマイルへと戻す。

「二人 できれば奥の席を頼む」

あまり人の目に付く席は好きではない大和はいつも通り奥の席を指定する。それに少女のこともあるのでなおさら奥の方が好都合だ。時間が時間なだけに店の中にはほとんど客はおらず、希望通りに奥の席へと案内された。

「ほらよ、メニューだ 好きなもん頼め オレが奢つてやるよ」

少女にメニューを渡しながら大和は言つ。少女はまだどこか警戒している様だが、小さな声でありがとうございますと言つとメニューを受け取る。

少女にメニューを渡したところ改めて大和は少女を見つめた。

(歳は・・・大体小学生高学年ぐれエか？ 見たところ学校に通つて

る感じはしねエな にしても「コイツ・・・」

間違いない、コイツは裏の人間だ。大和は同じ裏の人間としての直感でそう推定した。長年学園都市の暗部として活動していたためか、表の人間か裏の人間かは直感でわかる様になっていた。あまり嬉しいものではないが・・・。

「あなたは決まりましたか?」

少女が大和の顔を覗き込む様に尋ねてくる。大和がファミレスで朝食を摂る時は決まってサンドウィッチを注文する。

「あア 大丈夫だ とりあえず注文すっか すみませ~ん」

一通り注文し終わると大和は本題を切り出す。

「お前何があつた? ただあそこで寝てた訳じゃねエだろ?  
「あなたには超関係ないことです」

やつぱりこいつきたか・・・まア仕方ねエかア

「お前裏の人間だろ?」

その言葉に少女は手に持っていたコップを落としそうになる。

「どうしてそのことを!?」

「ダメだなア そんなに動搖しちまつたらバレんだろう? まア そんな

ボロボロじやせいぜい下つ端だろオがな

まるで自分も裏の人間ですと言わんばかりに話す大和。事実大和はアレイスターの右腕として暗部に君臨している。

「まあいい、まだ名前聞いていなかつたなア お前名前は？」

「絹旗・・・絹旗最愛です」

「じゃ絹旗、何があつたんだア？ そのカツコじやかなり過激な仕事だつたみてエだなア」

再度尋ねてみるが絹旗黙り込む、やはりまだ警戒しているのだろうか中々話そとしない。

（つたくメンドくせエヤツだなア・・・まアでも一度乗つちまた船だ、最後まで面倒見てやるかア）

「絹旗、警戒してんなら安心しろ オレもお前と同じ裏の人間だそれもお前なんかよりもずっと深いところにいるな」

絹旗の顔に驚きの色が浮かぶ。それもそのはずだ。いきなり声を掛けってきた少年が自分も同じ裏の人間ですと言つのだから。

「だから安心して話せ 少なくともオレはお前の思つてている様な裏の人間とは違エから」

その言葉に安心したのか、それとも緊張の糸が切れたためか何時の中にか絹旗の目には涙が浮かんでいた。別に泣かすつもりはなかったのだが・・・。

「そうですね あなたなら話しても大丈夫みたいですね。」

そう言って縄旗が話し始めようとした時だ、ファミレスにはおおよそ似合わない全身黒尽くめの男が数人、二人の席の前に立っていた。

## 第三話（前書き）

第三話完成！相変わらずの駄文

## 第二話

全身黒死ぐめに見るからに屈強そうな体格と、ファミレスにはおおよそ似合わない数人の男が大和と絹旗が居る席の前に立つ。

「何だテメエら？朝メシの邪魔なんだよ セツセツと消える」

「君に名乗る必要はない 朝食の邪魔をしたなら謝りつ 用が済めばすぐに消える」

そう言つと男は大和の前に座つて絹旗を睨みつける。

「こんなところに居たのか被検体E-57、戻るぞ まだスケジュールが詰まつている」

男は絹旗の腕を掴むと無理矢理連れて行こうとする。だが、絹旗も必死に抵抗している。それな身体も小刻みに震えている。

(あアなるほどなア そオゆうことか・・・)

一連のやり取りを見て大和は絹旗に何があつたか理解した。おそらく絹旗は置き去り（チャイルドエラー）か何かでコイツらに無理矢理裏の仕事をやらせられていた。それに絹旗のことを名前ではなく、被検体と呼んだ。どうせ訳のわからない実験も強要されたのだろう。

(仕方ねエ、助けてやっかア)

「オイ、オレは今「イイツとメシ食つてんだよ 朝メシの邪魔して申し訳ねエと思つてんだつたらさつさと消えてくんねエかなア？」

「あアー？テメエ誰に口聞いてやがるー？」

男の言葉が先程までの丁寧なものから一転して乱暴なものに変わる。だが、大和は臆することなく言葉を続ける。

「テメエに言つてんだよクソ野郎 それとも何か? 言葉が理解できねエのかア? 脳ミソまで筋肉で出来てんのかア?」

ヘラヘラと笑いながら大和は男をバカにする。さすがに男も我慢の限界が来たのか、その屈強な腕で大和の胸倉を掴むとそのまま持ち上げてしまう。

「！」のクソガキ！ 調子に乗りやがって！』

腕を大きく振りかぶると大和の顔を殴りつける。男の拳は綺麗に大和の顔に入った。中学生が大人に本気で殴られたら普通は泣く、泣かなくとも痛がるはずだ。

「おーおー中々いいパンチだなア 是非ともボクサーへの転職をオススメするぜ」

殴られたはずの大和は泣くどころか、痛がる素振りすらも微塵も見せない。まるで何事もなかつたかの様にケロつとしている。その光景に殴つた男はもちろん、その様子を間近で見ていた絹旗や他の客、店の従業員も驚いていた。

「てつテメエ・・・何でくらつてねエんだよー?」

「あア? 簡單だ、今テメエがオレを殴つたっていう“事象”を“拒絶”しただけだ つまりオレがテメエから殴られたっていう事実は存在しなくなる」

そう言うと大和は自分の胸倉を掴んでいる男の手を握るとグッと力を入れる。

バキッと骨が折れる様なイヤな音が絹旗の耳に聞こえた。

「グワアアアアアアアア！……!? ? ? ?」

「あつ悪イ悪イ、折るだけのつもりだったんだけど粉々にしちまつたわア（笑）力加減が出来ねエもんでねエ！！」

大和はそのまま痛みに悶える男をつり切り蹴飛ばす。中学生の蹴りとは思えない速さの蹴りを受けた男はマンガの様にテーブルや壁をブチ破ると、何処へ飛んで行ってしまった。

「ちイとばっかヤリ過ぎたかア？まあ死んじまつても問題ねエだろ」

大和はクルリと向きを変えるとポカンとしている男の仲間を睨みつける。すると、男の仲間はまるで何事もなかつたかの様に回れ右をするそのままファミレスから出て行ってしまった。

ふウ〜と一息吐くと大和はズボンのポケットから財布を取り出すと中からカードを取り出し近くに居たウェイトレスに投げつける。

「朝メシ代と店の修理代だ 五千万ぐらいは入ってるから足りるだろ 行くぞ絹旗」

ウェイトレスにそう告げると大和は出口へと向かう。後ろから超待つて下さいよ！～と言いながら絹旗もそれに続く。

店に残った他の客と従業員はただそれも見つめるしかなかった。

「あなた・・・能力者なのですか・・・？」

大和の隣を歩きながら絹旗は尋ねる。さつきの光景を見る限り大和は明らかに能力者、それもレベル4以上の大能力者クラスの・・・。

「その“あなた”ってのやめてくんない？気持ち悪くてかなわねエ んだけど」

「私はあなたの名前を知りません」

「あれ？まだ言ってなかつたかア？神鬼、神鬼大和 大和つて呼んでくれや」

「では改めまして大和さん 大和さんは能力者なのですか？」

出来れば能力を使わずに追い払えば良かつたのだが思わず能力を使つてしまつたので、もう言い逃れはできない。仕方ないと思つて大和は自分の能力を絹旗に説明することにした。

「お前の言う通りオレは能力者だ 神鬼大和、レベル5の『事象選択』（オールセレクト）だ」

「れつレベル5なのですか！？」

「ハア～だから言いたくなかったんだよオ・・・レベル5つて言つたら騒がれるから・・・」

「普通騒がれますよ！と言うか騒がない人なんていませんよ！」

「同じレベル5なら騒がないんじやねエ？」

「そつそれはあり得ますね・・・」

『レベル5』 それはこの街に住む学生にとって憧れの、同時に恐怖の対象となる存在。一人で軍隊相手にケンカを売れるレベル5は自然に多くの憧れを生む。だが、それだけでは済まないのがレベル5だ。憧れは同時に嫉妬の感情を生む、強過ぎるその力は恐怖の対象ともなる。

『化け物』

大和も幾度となく、そう呼ばれた。

そう揶揄されても仕方がないのは大和自身が一番良く理解している。

「大和さん！ 聞いてますか！？」

どうやら思考の渦にはまつていたようだ。絹旗が自分に向かつて何やら避けんでいる。

「悪い悪い、ちいと考え事してたわ で？ 何だ？」

「大和さんのその・・・『事象選択』ってどんな能力なのですか？」  
「オレの能力はこの世の全ての“事象”、簡単に言えば起こった出来事に対して選択できる力だ」

「うーん・・・よくわかりません」

「例えば・・・さつきオレが殴れた時、ケロつとしてただろ？ あれは『殴られた』って事象を『殴られなかつた』っていう事象に変えただけだ」

「とんでもない能力ですね・・・」

「それは自覚してる でも無敵って訳じやねエからなア」

「あの最後の蹴りも能力によるものですか？」

「あれは・・・また別のもんだ、あれに関しても深くは聞くな

大和はこれ以上の散策に釘を打つ。それ以上は学園都市の闇に繋がると思ったからだ。絹旗も裏の人間だが、まだ表に近い闇だ。大和のいる世界は一寸先も見えないぐらいの深い闇、関係のない者を巻き込む訳にはいけない。

「お前、これから行く当てもあるのか？」

話題を変えるために大和はふと思い付いた質問をする。

「いえ・・・私は置き去りですから行く当てなどありません・・・」「なら、暫くオレの家に来い 知り合ったのも何かの縁だ、面倒みてやるよ」

絹旗はポカンとした顔している、理解が追いついていないのだろうか。だが直ぐに我を取り戻すと困惑した表情を見せる。

「いいのですか・・・？」  
「別に構わねエゼ 丁度広過ぎるから困つてたんだよ」  
「では、お世話になります・・・」

こつして、少年と少女の奇妙な同棲生活が始まったのだった。

## 第四話（前書き）

話しが全く進まない（^—^；）

絹旗とも同棲生活が決まった日の夜、大和はアレイスターに呼び出されていた。どうせ今朝のことだらうと、大和はこれから聞くことになるだらうアレイスター統括理事長様のお説教にげんなりしていた。

因みに、絹旗は家に着くと直ぐに寝てしまった。大和としては彼女の衣類や下着を買いに行くつもりだつたのだが無理に起こすのも気が引けたので、そのまま寝かすることにした。

(アレイスターの野郎も一々細けエヤツだなア あれぐらい見逃しきてくれてもいいじやねエか・・・)

そんなことを考へてゐる内に『恋のないビル』に辿り着く。それを見計らつたかの様に案内人が現れる。

「また何かやらかしたのですか？大和君」

「ちいとばつか能力使つて暴れただけだ、別段騒ぐことでもねエよ」「君の場合ちよつとでは済まないでしょう・・・」

「つるせエな、さつさと中に入れろや こつちは今から聞くお説教にテンション最悪なんだよ」

さつさと終わらせて家に帰りたい大和は案内人に中に入れるよう急かす、案内人にも早くしたいのかこれ以上は何も言わず大和を中心へと案内する。

中に入ると直ぐにアレイスターの前に立つ。表情をほとんど見せないアレイスターだが、その顔が呆れた表情を見せている気がするのは気のせいだらうか。

「あれ程往来で力を使うなと言つているのに・・・どうやら馬の耳に念佛のようだな君は」

やつぱり怒つてゐる。いや、呆れているのかもしれない。いずれにせを大和にとつて面倒な状況であることには変わりないのだが。

「仕方ねエだろ? 能力使わなきやオレがＫＯされちまつてたよ」「私が言つてゐるのは能力の使用についてではない・・・“聖人”的力を使用したことについてだ」

“聖人”という単語に大和はピクリと反応する。・・・やつぱりバレたか、恐れいるよアレイスター様。

「聖人は本来なら魔術側の所有物だ、なのに君は能力者でありながら聖人の力をも持つ これが魔術側に漏れれば何かしら問題へと発展する 君とて厄介事は避けたいだろ?」  
「・・・・・」

「その上君の場合はそれだけでは収まらない 君の持つ力は科学と魔術を根底から覆してしまうものだ」  
「アレイスター」

そこまで言うとようやく大和が口を開く。大和がアレイスターを見る目には明らかな敵意の色が浮かんでいた。

「オレは確かにお前の右腕だ、だが犬にまで成り下がつた覚えはない お前の憂いを晴らすためにオレは存在する、お前はオレの起こした問題を解決するために存在する、違うか?」

目だけではなく、その言葉にも敵意が含まれている。元々大和は人の言ふ事を素直に聞く人間ではない、それが統括理事長であつても

だ。

「つまり協力はする、だが命令は聞かない、そういうことか？」

「そオ ゆうこつた、あの時から何一つ変わらねエスタンスだ 科学  
てか魔術とかがどオなるうが知つたこつちやねエ オレの障壁にな  
るんだつたらブツ潰すだけだ」

最後に大和は何か言おうとしたが何も言わなかつた。だがアレイス  
ターには大和が何を言おうとしたかはすぐにわかつた。

邪魔するならお前も容赦はしない、と。

「もオいいだろ? セツセツと家に帰らせろ、365日24時間逆戻りで  
浮いてるだけのお前と違つて疲れてんだよ」

大和は回れ右をして案内人を呼び出そうとする。

「では最後に一つだけ聞かせてくれ」

「なんだよ?」

「君は自宅に少女を連れ込んでいるようだが、まさか君はそつこつ  
た趣向の持ち主なのか?」

「紛らわしい言い方してんじやねエ! ! ! ! ! 誰かに勘違いされ  
んだろオガア! ! ! ! ! あとオレはロコロンじゃねエ! ! ! ! !  
！」

「君がお望みと重なるもつとその気になる環境を提供するが・・・

「人の話しを聞けエヘヘヘ! ! ! ! その気になるつてどんな環境な  
んだよオオオオオオ! ?」

先程までのシリアスな雰囲気をブチ壊すかの如く、大和の怒声が窓

のないビル内に響いた。

「やれやれ、彼を怒らせてしまつたつもりですか？本氣で怒らせれば一番困るのは貴方でしょう」

大和を外へと送り、戻つて来た案内人は上司であるアレイスターにため息を吐く。

「彼が暴走しても君なら彼を止めることができんだろう？」

「冗談言わないでください。彼とともにヤリあつてタダで済む訳ないでしょ？」

案内人は今日何度目になるかわからないため息を吐く。こんなことが毎回毎回続いていたら、胃が保たない。そろそろ本氣で転職を考えそうにもなる。

「よろしいのですか？彼をほつておいて、あの様子では“聖人”的力だけでは済みませんよ？」

「それだけの利用価値が彼にはあるということだ」

アレイスターはニヤリと微笑む。一見優し気な微笑みに見えるが、アレイスターという人物を知る者が見れば邪悪な微笑みと感じるだらう。

「彼の起こす問題など利用価値に比べれば微々たるものだ、例え魔術側と戦争になろうとも彼に勝る者など存在しない」

「まあそれは言えますね、魔神クラスの魔術師でも引っ張つて来なければ話すにすらなりませんしね」

アレイスターとしても戦争というのは最後の手段だ。仮に科学と魔術の間で戦争が勃発すれば学園都市もタダでは済まない。当然大きな被害も出るだろう。だがどんなに大きな被害が出ようが、学園都市の敗北はあり得ない。これだけはアレイスターは確信している。彼がいる限り、神鬼大和という名の最終兵器ファイナルウェポンがこの街に存在する限り……。

「プランはこれまで通り継続する」

「・・・彼の邪魔に入るかもしれませんよ？」

「何も問題はない。彼の妨害もプランの一部なのだから・・・」

だが、アレイスターはまだ知らない。彼がそのプランを叩き潰そうとしていることを。

そして、彼は知らない。自分自身がそのプランであることを・・・。

## 第五話（前書き）

次話からかなり時間が飛びます（汗）  
れです

後先考えなかつた結果がこ

## 第五話

「ふわア～眠みイ こりやア明日も寝不足確定コースだな」

窓のないビルから脱出（？）した大和は一人学園都市の夜道を歩いている。普段ならこのまま自宅へ帰るのだが、一つやり残したことがあるので、自宅のフカフカベッドへダイブはまだお預けだ。大和はポケットから紙を取り出す。その紙にはとある研究所への地図が書かれていた。

（さてと、帰る前に一仕事すつか・・・）

地図に書かれている場所を確認すると、大和はニヤリと顔を歪ませる。

「“ミニ掃除”といくかア クソ野郎共」

「何イ！？取り逃がしだと！？貴様らはガキ一人連れ戻すことすら満足にできんのか！？」  
「申し訳ございません・・・」

白髪の老人が屈強な男数人に怒鳴りつける。老人は白衣を着ているのでおそらくは科学者だろう。  
傍から見ればかなりシユールな光景だが、この研究所の所長と部下という設定を加えれば納得もできる。

「しかし所長！邪魔が入ったのです！仲間も一人そいつにヤられて・  
・」

必死に男は弁明をするが、老人はさらに怒鳴りつける。

「聞けばその邪魔とやらもガキだつたそりじゃないか！ 大の大人  
がガキに負けるとはどうなつておるのだ！？」

「いいやジイさん、そいつらは悪くねエゼ 相手がオレじや仕方ね  
エよ」

何処からともなく声が聞こえたかと思つと、突然凄まじい轟音がな  
り後ろのドアが破壊される。

破壊されたドアから誰かが中に入つてくる。

「二んばんは～お前ら全員殺しに来たぜ」

緊迫した空氣には似合わない明るい子供の声が聞こえたかと思つと、  
その声の主である神鬼大和が堂々と部屋の中に入つてくる。

「貴様何者だ！？どうやつて研究所に入つて来た！？」

老人が鬼の形相で尋ねるの対し、大和はハニカミながら答える。

「そんなの正面突破に決まつてんだろ？ わざわざコソコソと侵入  
する必要なんざねエからなア あつ因みに他のヤツらは既にご臨終  
だア あとはテメエらだけだから」

「所長！…こいつです！…こいつが今朝オレたちの邪魔をしたヤツ  
です！！」

「ん？ テメエら今朝のクソ野郎の残りカスかア？ あー残念だけどテ

メヒラのお仲間はくたばつてたわアー一応急所は外したんだけど即死だつたみてエだわ 安心しろ、死体はちゃんとゴミ箱に捨てたから」

何が可笑しいのか大和はグラグラと笑いながら田の前の標的にゅっくりと近づいて行く。

その目は獲物を狙わんとする野獣のそれだ。ただの野獣ならまだよかつたのだが、彼らの前に居るのは学園都市最強の野獣だ。

「さアて今から三秒だけやつからその間に神サマにでもお祈りするんだなア テメヒラみてエなゴミでも最期ぐれエは應えてくれるかもしんねエぞ？」

「随分と勝手な事を言つてくれるな小僧、此処は科学の街だ 神頼みをするなどナンセンスだ それに・・・死ぬは貴様だ小僧！！！」

！」

叫んだのと同時に老人は一気に奥のドアへと走る。

「お前たち時間を稼げ！！私はアレの準備をする！！」

(時間稼ぎ、あのジジイ何かする気だな それに去つ際に言つたアレってのも気になる・・・)

大和としては直ぐにでも後を追いかけたいが、アレイスターからは皆殺しにするようにと指示を受けている。大和は最初から皆殺しにする予定だったので問題はない。とりあえず目の前にある障壁から片付ける事にする。

「オレ相手に時間稼ぎつたア面白ヒ 果たして何秒立つてられつかなア？」

悪魔の様な笑みを浮かべて学園都市最強の怪物が今狩りを再開する。

「何なのだあの小僧は！？一体どうなつている！？」

ある物の準備をしながら白髪の研究者は叫び続ける。少なくとも此処に来るまで30人は居たはずだ。それをあの小僧は皆殺しにしたと言つた。あり得ない、高々中学生ぐらいの子供がそんなことできるなど。

だが、こちら側には切り札がある。まだ試作段階だがその威力は置き去りを使った実験で確認済みだ。

勝てる、絶対に。

そう確信した時だった。

「よオジジイ、準備とやらは終わつたかア？」

先程の様にドアを破壊する事なく大和が絶望と共にゅくつと入って来る。意地悪そうな笑みを浮かべながら。

「貴様・・・先程のヤツらはどうした？」

「あアあんなヤツらで時間稼ぎ出来るとでも思つてんのかア？舐めてんじやねエぞコラ」

首を「キ」キと鳴らしながらとんでもない事をサラリと呟つてのける。見たところ傷どころか汚れ一つない。

一体この小僧は何者なのだ？

ますます疑問が生まれる。

「随分と強い者のような だが貴様もここまでだ」

白髪の研究者は白衣から何かを取り出す。それは何かのスイッチのようだ、アレというのはこれの事だろうか。

「何だとそらや？爆弾でも爆発せんのかア？無駄だから止めとけ、テメエだけ吹き飛ぶぞ？」

「ふん、科学者たる私が爆弾なんぞ物騒なもの使うと思つか？爆弾なんかよりも強力なものじや」

そう言つと白髪の研究者はスイッチを押す。

キイイイイイイイイイと甲高い音が鳴つたかと思つと突然の頭痛が大和を襲つ。

「テメエ・・・何しやがつた？」

「こいつはキヤパシティダウンといつて能力者に反応する装置だその様子を見る限り貴様は高能力者のようだな」

「・・・・・」

「どうした小僧？さつきまでの虚勢は？あまりの苦痛に言葉もでんのか？」

白髪の研究者は自分に酔つたかの様に言葉を続ける。

「アハ、アハハハハハハハハハハハハ！－！－！－！－！－！－！」

何かが切れた様に大和は突然大声で笑い出す。何かに操れているかの様に、いつまでもいつまでも。

「何故だ・・・? 何故キヤパシティダウンが効いていない! ?」「バカだろテメエ? そんなもんで勝てるとでも思つてたのかよオ? 抱きしめたくなるぐれエ 哀れだぜテメエ」

ようやく笑い終えたのか大和はゆっくりと話し始める。

「何で効かねエのか？簡単だ、そのキバシティダウンとやらの音を聞いたつづう事象を拒絶しただけだ」

「事象を拒絶しただと・・・そんなこと出来る訳が・・・ー?」

ジジイが何かに気付いたのか、その顔がみるみる内に青ざめていく。

「まさか貴様、  
“事象選択”か！？」

「ようやく気付いてくれたかよ、気付いてくれたお礼に最高にキツ

「死をアレヤントロギー

そう吐き捨てる大和は、やつくりと白髪の研究者に近く。研究者は逃げようとするが素早く前に回り込むと、動けない様に両足を骨を砕く。

激痛のあまりジジイは大声で悲鳴をあげる。痛みからか、それとも恐怖からその目には若干涙らしきものが見える。

「待ってくれ！――わしを殺してみろ、貴様統括理事会から睨まれるぞ！――」

Non-!-!

「あア？ ビオ いう意味だそれ？」

「キヤパシティダウンを製造するように頼んだのは他でもない、統括理事会だ！－！」

「！？・・・・なるほどなア」

「わかつたか？わかつたなら早くわしを・・・」

それ以上言葉が続くことはなかつた。何故なら大和がさつきの男から奪つた銃で頭をブチ抜いたからだ。

さつきのジジイの言葉で大和はこの仕事の本当の目的を理解した。

（最初から妙だと思つたんだ こんなクソみてエな簡単な仕事何でオレにやらせたのか・・・）

今回の仕事はただの研究所の破壊と研究員の皆殺し、規模の大きい研究所ならまだしも、大して大きくもないこんな研究所の掃除に学園都市最強の戦力を使うこと自体がおかしいのだ。

（アレイスターのヤツ・・・オレを実験台に新兵器<sup>キャパシティダウン</sup>の性能を試しやがつたな！！）

あの研究者は最期にキャパシティダウンは統括理事会の命令で製造したと言つた。統括理事会が下した命令をそのトップであるアレイスターが知らない訳がない。

つまりアレイスターは対能力者用の新兵器があるのをわかつて大和に仕事を命じたのだ。

（事前情報がいやに少なかつたのも、オレを実験台にするためと考えりや合点がいく 絹旗のことに関してもとやこや言わなかつたのも全てはこれに繋げるためか・・・）

クソつたのが

大和は歯軋りをし、怒りを露わにする。

利用されたことに怒りを感じている訳ではない。今に始まつたことではない。元々大和とアレイスターはお互いを利用し合う関係でしかないのだから。

大和が気に食わないのはこんな安い仕事、新兵器の性能の確認という仕事に学園都市最強の存在である自分が使われたことだ。

（面白Hじやねエかアレイスター テメエがその気なら）つちも利用させてもらうぜ 今にテメエのそのツラ真っ青にしてやつから覚悟しろよ…）

そう決意すると大和は研究所を後にした。獰猛な笑みを浮かべながら・・・。

「理事長、大和君からの報告です 研究所は完全に破壊、関係者は全員始末したことです」

報告を聞くとアレイスターは満足そうな笑みを浮かべた。

「よひしかつたのですか理事長？ あのような内容の仕事を彼にやらせて 隨分と御立腹でしたよ」

「今回の件は彼でなければならなかつたのだよ その辺の雑魚を使つたところで新兵器の性能を確かめられなかつたのでね」

「満足のいく結果は得られたのですか？」

「もちろんだ、お陰で素晴らしいデータが採取出来たよ」

理事長は何か得たものがあつたのだろうか？ 案内人からみれば対能力者というのが売りの新兵器が能力者の大和に簡単に突破されたと

いう欠陥しか見出だせなかつたのだが。

「・・・新兵器は見事に大和君に突破されましたが？」

「彼があの程度の物で屈するはずがないだろう？私が見たかつたのは新兵器の性能もだが、あの環境下で彼がどの位闘えるかが見たかったのだ」

「・・・それ彼が知つたら間違いなく殺されますよ理事長？」

「その心配はないよ 私が死ねば一番困るのは彼自身だ」

「・・・」

全く理事長には恐れ入る。殺されることは絶対ないとわかっているからこそ、ここまで彼を利用出来るのだ。

仮に大和が理事長に牙を剥いても何かしらの策が有るのだろう。一体彼と理事長の駆け引きにいつまで付き合わされるのだろうか・・・。

## 新たな始まり（前書き）

宣言通り、時間がかなり飛びます（汗）  
本格的に飛ぶのは次話からですが（汗）  
何卒ご勘弁お願いします

## 新たな始まり

### 学園都市

東京の西部を切り崩して開発された街であり、学園の名が示す通り総人口230万人中8割が学生というまさに学生のための街。「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開發」を行なつており、それに伴つてか科学技術もブツ飛んでおり、『外』の技術とは約20年程の差があると言われている。

そんな学園都市だが朝は『外』と同じ様に訪れる。

「学校だるいなア」とか「今日サボっちゃおうかなア」と学生が思う考えるのも、同じく学園都市も変わらない。どの世界について基本的に朝はダルい、憂鬱なのである。。。

「大和さん！！超起きてください！！朝ですよーー！」

そんなモヤモヤを吹き飛ばすかの如く、元気な声が学園都市のところに炸裂した。

## 主人公設定（前書き）

タイトルの通りです　途中ちょっととした変更があるかもしれません  
(汗)

## 主人公設定

名前 : 神鬼 大和（かみき やまと）

性別 : 男

年齢 : 13歳

人物 : 年齢的に本来は中学3年だが上条当麻、垣根帝督の護衛、監視のために統括理事会の権限で彼らと同じ高校に通っている。アレイスターをも驚愕させる力を持つことから学園都市の“最終兵器”（ファイナルウェポン）と呼ばれている。

容姿 : 髪の色は茶髪。髪型は鏡音レンの様な感じ。

身長はあまり高くなく、寧ろ低い方に分類される。

肌の色はアクセラレータ程ではないがかなり白く、右目が赤、左目が青と左右色の違う瞳を持つ。

服装は垣根とよく似たものを着るが、とにかく目立つものが多い。統括理事会級の権限を使って学校でも私服が着用できる様にしている。

性格 : 超がつく程の攻撃的な性格で破壊志向が非常に強い。だが無意味な戦闘は好まない。

暗部の人間ながら喜怒哀楽が激しく、感情も豊か。

基本的には親切なのが絹旗曰く、親切ではあるが優しくはないらしい。

生活 : 物心ついた時から学園都市に住んでおり、現在は絹旗と2人で学園都市でも1・2を争う巨大な学生寮に住んでいる。

基本的に自炊はしないが、プロの料理人顔負けの腕の持ち主。学園都市からの莫大な奨学金に加え、暗部での仕事料も貰つてるのでかなりの金持ち。

知能　： アクセラレータをも超える学園都市最高の頭脳の持ち主。

戦闘能力　： “事象選択”という能力に加え、“聖人”的力を持つなど、学園都市最強の戦闘能力の持ち主。

アレイスター曰く、これはまだ大和の本当の力の一部らしい。また鋭い観察力、状況を一瞬で把握する理解力、最適な選択を一瞬で下す判断力をも備え持つ。頭の回転も早く相手の裏を突くを能力も高い。

能力　： 事象選択オールセレクト

発生した事象に対して選択権を持つことができる。  
簡単に言えば、起こってしまった出来事をなかつたことにしたり、別の結果に変えたりすることができる。  
未来の事象に対して選択権を持つことはできない、またこの能力の使用者以外の人体に直接能力を作用させることはできない。  
一度に選択できる事象は3つまで（ただし大和はある方法で最大9つまで選択できる）

その他　： 頭脳明晰、容姿端麗という事もあってか“秀才美男”（クールメン）という通り名で学校中の女子の羨望を集めている。（本人は超がつく程嫌がっている）

自他共に認める超甘党で甘い物に対する情熱と執着心はし顔負けのレベルである。

## 呼び出し（複数形）

タイトルって考えるの難しいですね

## 呼び出し

少女はどじで緑の恐竜顔負けのヒップドロップが大和に炸裂する。傍から見れば仲の良い兄妹、朝から騒がしい光景に見える。

少女が能力を使用していなければの話だが・・・。

「グフツ！！？？絹旗テメエだから能力全開でそれすんなつていつも言つてんだろオガアアアア！！！」

「いつ迄たつても大和さんが起きないからじやないですか！？」

「もつと他に起こしてもらつたのに文句ですか・・・昔はこんなんじやなや確實に死んでんぞオ！！」

「はア起こしてもらつたのに文句ですか・・・昔はこんなんじやなかつたのに・・・」

「おいテメエ何遠い目してエんだ、ブチ殺すぞ」

朝早くから怒声をあげたのは神鬼大和、その外見からはわからないがこう見えて学園都市最強の能力者である。これから新しい1日が始まるというのにその顔は既に残業明けのオヤジの様な疲れ切った表情をしている。

学園都市最強に臆することなく強烈なヒップドロップ・・・改め殺人ドロップを炸裂させたのは絹旗最愛、大和の同居人だ。

絹旗はレベル4の窒素装甲オフ・エンスチーマーだ。身体の周りに窒素の膜を張る事で銃弾を防いだり、軽々と車を持ち上げたりすることができる。

そんな能力を全開にしたヒップドロップは本来なら地面にクレーターが出来かねない威力を誇る。

“聖人”である大和とはいえ直撃すれば流石に痛いのだ。痛いだけで済むだけでもおかしいのだが……。

絹旗と同居生活を始めてから早3年が経つ。最初は何処かぎこちなさがあつたが今では本当の兄妹の様に接してくる。先程のやり方も前までなかつたことだ。・・・殺人ドロップはやめて欲しいが。

「大和さん、今日は超どつしてこんなに早く起いすように頼んだのですか？」

朝食の食パンを口に運びながら絹旗は大和に尋ねる。

大和は学校ある時以外は基本遅寝遅起きの生活スタイルだ。今日は7月20日、夏休み初日だ。だから絹旗は大和が何故早起きをしたのかが気になつたのだ。

「学校の担任から呼び出し喰らつたんだよ 大和ちゃんは頭が超いいので先生のお手伝いをして下さい だとさ こんな事になるんだつたらテストでオールパークエクトなんざ取らなきゃよかつた・・・」

「

学園都市中の全ての学生を敵に回しかねない発言をする大和。

実年齢13歳の中学生なのに飛び級で高校に通つている時点で十分天才クラスなのだが、そこにオールパークエクトときたら連行されるのも無理はない。

(次は超手抜いてやるか・・・)

次のテストに向けて最悪な計画を練つてると、ピンポンと自宅のチャイムがなつた。

「はいはーい、超今行きますよー」

いつも通り絹旗がパタパタと玄関へ小走りで向かつた。

こんな朝っぱらから誰だ?と思いつながら大和は大和特製の超激甘力フェオレを飲む。

「大和さーん、超お客様ですよ」

「あア? オレにか?」

大和は椅子から立ち上ると玄関へと向う。こんな朝早くから自分に客が来るのは久しぶりだ。

「よオ 大和、おはようさん」

「帝督? こんな朝っぱら何か用か?」

玄関に立っていたのは服の襟ぐらいまで伸ばした長い金髪にホストを彷彿させる服装、さらには端正なルックスの持ち主、大和の親友である垣根帝督だ。

「その様子じやお前も小萌先生に呼び出されたみてえだな」

「お前もってこたア 帝督もか?」

「ああそつだぜ なんでもバカ共の補習の手伝いらしいぜ」

この垣根帝督も大和と同じくレベル5、学園都市の第一位の能力者だ。大和程ではないが当然頭もかなり良い。

高校に入学して最初のテストで2人揃つてオールパーフェクトを叩き出した時は学校中の噂になつた。

「当麻のヤツも補習のメンバーらしいぜ？」

「はつ、当然だろ アイツが補習メンバーじゃなきゃ誰が選ばれんだよ？」

今この場には居ないもう一人の親友、上条当麻をこれでもかとばかりにバカにする2人。

どうせ今頃不幸だーーーとか言って頭を抱えてるのだらう。

「それにしても最愛ちゃん相変わらず良い子だな ありや将来有望だぜ？」

「バカ言つてんじやねエよ あの野郎朝からオレ起こすのに能力全開でヒツプドロップだぜ？それのどこが将来有望なんだよ？」

「はあ羨ましいなあ大和は 僕何か毎日一人で起きてんだぜ？」

「それが普通なんだよバカ オレの場合はちょっと特殊なだけだ

「2人共、時間はいいんですか？超そろそろ時間ですよ？」

どうやら玄関で話している間に登校時間が近づいて来たようだ。絹旗が2人にその事を伝える。

「帝督悪いな オレ歯磨いたら直ぐ追いかけるから先に当麻のヤツ迎えに行つてくれねエか？」

絹旗から渡された歯ブラシ片手に大和は垣根に先に行くよつたえる。

「オーケーわかった ゆっくり歩ことから急がなくていいぜ アイツの寮ここからそんな遠くねえし」

そう言つと垣根は当麻を迎えて行くべく玄関から出て行つた。

垣根は急がなくともいいと言つたが、やはり友人を待たすのは気が引けるので大和は何時もよりスピードを上げて登校の準備をする。

「じゃあ絹旗いつくんぜ 出掛けんなうちゃんと鍵閉めろよ

「はいはい超わかりましたよ いつてらっしゃい」

自宅を出ると大和は垣根に追いつくために走り出した。

## 予想外（前書き）

かなり無理矢理な展開です（汗）

感想、ご意見お待ちしています

大和の寮から当麻の寮まではそれ程遠くなく歩いても10～15分ぐらいで到着する距離だ。時間的にもまだ少し余裕があるので垣根はのんびりと当麻の寮へと向う。

（補習の手伝いってなにするんだ？まさか小萌先生の隣に立つて教鞭を執るのか？）

これから補習の内容を考えながら垣根は歩く。夏休み初日から学校に行かなきゃなんねえとはついてねえな。

「おーい！…帝督ウー！」

声がした方向を見ると大和がこちらに向かつて走つて來た。先程までの真っ黒なパジャマではなく全身赤をベースとしたその格好はホストの様だ。

よくエセホストと呼ばれる垣根だが大和の方がよっぽどホストに近いだろうと垣根は思つてゐる。

「おー、随分と早えじゃねえか？」

「オレは人待たせんのが嫌いなんだよ 親友ときたら尚更だ」

長年暗部に身を置いてきたためか、大和は時間に関してはかなり気にする性格だ。特に人を待たすのを極端に嫌う。無論アレイスターは例外だが。

「なア垣根、補習メンバーって当麻以外に誰がいんのか知つてるか

？」

「いや俺も当麻しか知らねえ けど当麻がいるってことはあの2人も一緒に何せ三バカ（デルタフォース）だからな」

「そりや言えるなア つかアイツらに補習なんざ小萌先生も大変だねエ」

「わかるぜその気持ち 俺だつたら絶対投げ出すけどな」

そんな失礼千万な内容の会話をしている間に2人は当麻の学生寮に辿り着く。大和の住んでいいる学生寮と比べるとかなり小さい建物だ。もつとも大和の寮が大き過ぎるだけなのだが・・・。

当麻の部屋の前に到着すると垣根はインター ホンを鳴らす。何時もなら直ぐに出てくる筈の当麻だが今日にかぎっては中々出て来なかつた。

聞こえてねえのか?と弦くと垣根はもう一度インター ホンを鳴らす。だがそれでも当麻は出て来なかつた。

「おーい当麻!...お前補習だろ!...まだ寝てるのか?」

だが返事はない。折角の夏休み初日を見事に潰されたことでイライラしていた大和には我慢の限界だつた。

無言でドアの前に立ち、ドアノブを掴むと一気に引く。

聖人の力で引かれたドアは力ギ諸共破壊され、客人を中へと招き入れる。

「おい当麻、折角迎えに来てやつたのにガン無視つたア いい度胸だなア 誰の為に朝から来てやつたと思って・・・」

大和は途中で言葉を切らした、いや切れてしまったと言つべきか。ドアを潰して最初に目に飛び込んできたのは親友である上条当麻が銀髪の女の子に頭をかじられていた光景だった。それだけでも十分驚きの光景なのだが問題は親友の頭にかじりついている女の子は頭にフードらしきもの被っている以外は何も着ていない、つまり完全素っ裸だったことだ。

「おい大和どうした？何固まつてんだ？」

後ろから垣根が顔を出すが、目の前の衝撃的光景を見ると大和と同じく固まってしまった。

「・・・・・・・・・・・・

超がつく程の気まずい空気が流れる。

垣根はポケットから携帯を取り出すとどこかへ電話をかけ始めた。

「あーもしもしアンチスキルですか？今日の前で親友が女の子に淫らな行為強要してるんですけど・・・」

「ちょっと待て垣根えー！！！誤解だ誤解！！！」

学園都市の平和な朝に1人の少年の悲痛な叫びが響いた。

「理事長、“幻想殺し”が禁書目録と接触しました “未現物質”と大和君も一緒です」

「フフ、そうか・・・報告」苦労」

案内人からの報告を聞くとアレイスターは満足そうに微笑む。

「よろしいのですか？大和君はともかく、未現物質の接触は完全に予想外でしょ？」

「確かに予想外だがプランの進行に支障はない、寧ろ好都合といったところか・・・」

「何が好都合なのですか？大和君はともかく未現物質の接触は完全に予想外でしょ？」

学園都市の最深部に生きている上に、本来なら魔術側の所有物である聖人の力をも持つ大和なら遅かれ早かれ魔術側に接触するだろうと予想できた。しかし学園都市の第一位である未現物質の接触は完全に予想外だつた。

いくら大和の親友とはまさかこのタイミングで・・・。

そこで案内人は気付いた。アレイスターの狙いを。

「わざと未現物質を接触させたのですね・・・？」

「・・・何故そう思う？」

「簡単ですよ、あなたには『アンダーライン滞空回線』という絶対的な情報網がある、彼等の行動は逐一わかる、つまり彼等が禁書目録の居る幻想殺しの学生寮に向かっていることもわかつていた筈です」

「それで？」

「本来に未現物質と禁書目録の接触を避けたいのであれば一時的に彼等を別行動させる事もできたし貴方ならこれぐらいの事何の造作もないことだ だが貴方はあえてそうしなかった 最初から未現物質を禁書目録に接触させたかつた・・・違いますか？」

アレイスターはただ黙つて案内人の推理を聞いていた。何も言わずただ静かに。

数秒ぐらい沈黙が続いたらどうか、アレイスターがゆっくりと口を開き始めた。

「素晴らしい推理だ だが完全には正解ではないな」

「？」

「私は未現物質・・・垣根帝督と禁書目録を接触させたかつたのではない・・・彼を魔術と接触させたかつたのだよ」

「・・・は？」

言つている意味がわからなかつた。何故彼を？学園都市の第一位である彼を。魔術とは限りなく縁のない彼を何故？

「私が予想外と言つたのは彼が垣根帝督がまさかこれ程早く魔術に関わつた事にだ 未現物質はまだ私にも、そして彼にも完全には解析出来ていなというのに・・・」

「言つている事の意味がよくわからないのですが・・・

「“未現物質”とはどの様な能力だ？」

そんなのわかりきつている。未現物質とは『この世に存在しない物質』を作りだす能力だ。未現物質の前ではありとあらゆる物理現象、自然の法則すらも通らないまさしく未知なる物質だ。その能力の応用性の高さは第一位をも上回ると言われている。

「では何故『能力者』は魔術を使用出来ない？借りに使用すればどうなる？」

それもわかりきつている。才能無き者が異能の力を使用するために産み出したのが『魔術』と呼ばれるものだ。能力者、一度でも脳の『開発』を受けた者は脳の回路が常人とは異なるため魔術は使用出来ない。仮に無理に魔術を使用すれば人体に甚大な損傷が出てしまう。

そこで案内人はハツとなる。

「理事長・・・貴方まさか・・・」

「君の想像の通りだ　『魔術を使つても人体に影響が出ない』といふ未現物質を生成すればどうなるか・・・彼とて自分の体内で未現物質を生成したことはあるまい」

「そんなこと不可能です！出来る筈がない！」

「何故そう言い切れる？君の言つ通り未現物質は自然の摂理をもたら捻じ曲げることが出来る能力だ　決してあり得ない事ではあるまい」

「・・・・ツ」

「垣根帝督の性格だ 魔術に関わつていく内に必ず私と同じことを考える筈だ それは君も同感なのではないかな？」

その通りだ。学園都市最強の親友、神鬼大和をライバル視し、打倒アレイスターを掲げる彼なら目的を達成するために魔術を取得しようとするとするだろう。目的の為ならどんな危険も省みない・・・それが垣根帝督という人間なのだ。

「・・・何故彼に魔術を取得させようとするのです？貴方には大和君がいるでしょう・・・」

「使える兵士は多くいて困ることはない 彼が魔術を取得すればあちら側にとつて脅威になることは間違いない それだけ優位に立てる 平和的な交渉においても、戦争においてもね・・・」

「・・・ 戦争でも始めるつもりですか・・・？」

「フフ、まさか 私とて戦争は望まないよ 多くの労力と犠牲が伴うからね」

だが最後にアレイスターは今はまだね・・・と付け加えた・・・。

## 魔術（前書き）

お気に入り登録された方ありがとうございます。

「いやあー正直かなり焦つたぜ 僕たち3人の友情も此処でジ・エンドかと思つたぜ」

先程の衝撃的な光景を他人事の如くゲラゲラと笑う垣根。

「お前・・・絶対楽しんでるだろ・・・?」

朝だと呟つのにげんなりとした表情をしているのは今回の騒動の当事者である上条当麻。これから地獄の補習なのだが既に疲れ切ってしまつている。

「朝から大変だなア お前も 正直かなり同情するぜ」

そうは言つもの明らかに同情する氣のない笑いを浮かべているのは今回の騒動の第一発見者の大和。

「テメー明らかに同情する氣ねーだろーー??」

当麻の怒声を完全に無視した大和はぐるりと向きを変えると、安全ピンを何十本もギラギラと光らせている修道服を身につけている女の子を見る。

「で?テメエは魔術結社とやらに追われて逃げていると そんでもつて頭ん中に10万3千冊分の魔術の知識が詰まっている 素っ裸だったのは当麻の右手に触れたから そつだな?」

大和は先程当麻から聞いたことを女の子改めインデックスに確かめ

る。

インデックスがコクソと頷いたことから間違いないようだ。

「おい大和　お前にいつの間にか」と信じんのかよ？」

垣根が意味不明と言う表情で尋ねてくる。当麻も同感だと言わんばかりの表情をしている。信じるも何も聖人である大和にとつて今回の件は立派な身内事なのだ。

イギリス清教、インデックス禁書目論、魔術結社、そして10万3千冊の禁書・・・

・全てが大和にとつて全て知っている事だ。

（「イヤツら完全にオレの事疑つてやがるな・・・　聖人の事はバレると面倒だし上手く誤魔化すか・・・）

「別に信じてる訳じゃねエよ　ただ世界は広い　能力つてもんがあんなら魔術つてもんがあつても不思議じゃねエだろ？それに“完全記憶能力”つてのも実在する力だ　その“歩く教会”とかいう服だつて何かしら異能の力があつたから当麻の右手に反応したんだろう？」

大和の言葉を聞いて垣根と当麻はなるほどといつた表情をする。再び大和はインデックスを方に振り返ると言葉を続ける。

「テメエはこれからどうするつもりだ？」

「そうだよ、俺の家にいるか？何なら鍵渡しておくれ」

当麻も同じことを思ったのか大和に続いてインデックスに質問する。垣根も気になるのかインデックスの返事を待っている。

「ありがとう　でもいいよ　出てく」

そつと「インテックスは破壊された玄関に向かって歩いて行く。

「何でだ？ 追われてんだつたら此処でじつとしてりやいいじゃねえか それにお前『外』の人間だろ？ そんなカツコで出歩いてたらアソチスキルに捕まんぞ？」

垣根はインテックスに叫うが彼女は首を横に振る。そして自分の服を摑む。

「この歩く教会は魔力でできているの だから敵はこの服の魔力を探知して追つてくれるの・・・ その間に破壊されちゃつたけど」

「だったら問題ないじゃねーか 発信源ぶつ壊したんだから探知は出来ないだろ？」

「だとしても『歩く教会が破壊された』という情報は敵に伝わっちやうよ 簡単にいえばこの服は『要塞』並の防御力のある特殊な服なの 理由はどうあれ『要塞』が壊れたらとかしらの手は打つてくると思つ

「おこおこひよつと待てよ ジャ尚更放り出す訳にはいかねえじゃねえか 敵が追つて来るのわかつてんのに丸腰の奴放り出す程俺たちは鬼畜じやねえぜ？」

垣根の言葉を聞いたインテックスはきょとんとした顔をしたが、直ぐにヒヒヒヒと笑顔になると垣根と当麻に叫んだ。

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」と。

その言葉を聞いて2人は言葉を失う。

優しい言葉の筈なのにその言葉にはどこか厳しさを感じた。笑顔の筈なのにその目はとても悲しそうに感じた。

(地獄の底か・・・ 笑えねエなア・・・)

心中で大和は呟いた。幼い頃から学園都市の暗部に、それもこの街の最深部に限りなく近い暗部に身を置いてきた大和にはその言葉をどれほどの決意で、どれほどの思いで言つたのかよくわかる。大和は静かに立ち上ると2人に言つ。

「もオいいだる、コイツだつて大丈夫だつて言つてんだから放つて置きやいいんだよ ホラ学校行くぜ 早くしねエとマジで遅刻すっから」

大和の言葉を聞くと垣根もそうだな・・・と言つて立ち上がる。インデックスもありがとうとだけ言つと当麻の学生寮から出て行つてしまつた。

当麻が後を追いかけようとしたが大和は右手で当麻の肩を強く掴む。「お人好しも大概にしろよテメエ 仮にアイツが何かに追われてるとしてテメエに何が出来んだア?自分の世話一つ出来ねエヤツが一丁前にヒーロー面してんじゃねエよ」

インデックスの気持ちが痛い程よくわかるこそ大和はあえて当麻にキツく言つたのだ。このまま彼女を引き留めていれば十中八九、当麻に危険が及ぶ。彼女とてそんな事してまで引き留めては欲しくないだろう。

大和は彼女が忘れていつた帽子を拾うと当麻に渡しながら言つ。

「これはお前が持つてろ これはお前の起こした問題だからな」

当麻に帽子を渡すと大和は学校に向かうべく玄関へと向かう。

「玄関のドアは直しておいてやる オレと帝督は先に行くから遅れねエ ようにしろよ」

そう言うと大和は先に行ってしまった。後から垣根もそれに続く。時間的に急がないと遅刻する時間なのだが当麻は直ぐに立ち上がる事が出来なかつた・・・。

「理事長、彼をお連れしました」

「エ苦労、下がつてくれ」

アレイスターがそう言つと案内人は訪問者を残すとフツと何処かへ消えてしまった。残つたのはアレイスターと訪問者の2人だけ。

「既に知つていると思うが学園都市に魔術側の人間が侵入した 人數は3人 3人共君がよく知る人物だ」

「わかつてゐるなら何故直ぐに対処しない?遊んでいるのか・・・?  
?」

「予想外の事に侵入者の内の1人である禁書目録に“未現物質”、“幻想殺し”、そして“事象選択”的3人が接觸してしまつてね

対処しようにも出来ないのだよ

「予想外だと？ふざけるな 初めから貴様の手の内だらうが」

来訪者はあからさまに怒りを露わにする。対するアレイスターはただ笑みを浮かべるだけだ。

このままでは平行線を辿るだけだと判断した来訪者は話を次の段階へ進める事にした。

「オレにどうしろと言つのだアレイスター まさか身内同士で潰し合えども言つんじやないだらうな？」

「まさか、私とてあちら側のゴタゴタに巻き込まれるのは勘弁願いたいところだ しかしこの街で起つてしまつた問題である以上こちら側で対処しなければならない……」

「どうするつもりだ……？」

補習も終わり大和と垣根は自宅への帰路をとつていた。本来ならもう少し早く帰宅出来る予定だったのだが担任である円詠小萌と今後の打ち合わせなどをしている間に最終下校時刻を迎えてしまったのだ。

「何でお手伝いのオレたちがあのバカ共より帰るの遅くなるんだよオ！！」

折角の夏休みを潰された上に帰りまで遅くなつた事に不平不満をぶちまけていると垣根がなあ・・・と話しかけてきた。

「俺たちさああのガキ本当に放つて置いてよかつたのか・・・?」

大和ははアーとため息を吐くと呆れた様に垣根に言つ。

「いいに決まつてんだろ? オレたちがあのチンチクリン助ける必要もなけりや義理もねエ」

「そりゃそりだけどよお・・・」

「それにだ、お前だつて面倒事はたくさんだろ? 朝は魔術、昼は補習ときたらこっちの身が保たねエよ」

そこまで言つと大和はピクツと何かに反応した。一瞬頭の中でその正体を考えるも直ぐに答えを明らかにすると大和は垣根をチラッと見る。

垣根はまだ気付いてはいなによつだ・・・。そう判断した大和は垣根の方を振り向く。

「あー帝督、オレ用事思い出したからさア悪いけど先に帰つといでくんねエ? 明日の事はまた後で連絡すつから」

垣根は一瞬何かを考えていた様だが直ぐにわかつたとだけ言つと先に自宅へと帰つて行く。

垣根の姿が見えなくなるのを確認すると、大和は近くの路地裏へと入つて行く。最終下校時刻を迎えている事もあってか路地裏は目に見える以上に暗く感じる。

路地裏の真ん中ぐらいまで歩くと大和は立ち止まり先程から薄々感

付いて気配に話し掛ける。

「隠れてねエで出て来いよストーカー野郎 それともひつちから引  
つ張り出さねエと出てこれねエのか？」

「いや、その必要はないぜい大ちん<sup>チヤン</sup>」

大和の声に応えたのは聞き覚えのある声だった・・・。

～特別編～ 横中の三田（前書き）

今回は大和たちの中學時代の話しだす。過去編は不定期に投稿する予定です。

大和たちがインテックスと出会い一週間程前、垣根と当麻の2人は中学からの親友である神鬼大和の家に遊びに来ていた。リビングに大和と垣根と当麻、そして大和の同居人である絹旗最愛の計4人で世間話をしたり、直ぐ間近に迫っている夏休みの予定について話したりとおしゃべりに花を咲かせていた。

「そう言えば今日、中学の時の卒アル持つて来たんだぜ」

そう言うと何を思ったのか垣根は自分のカバンから表紙に金色の文字で「デカデカ」と「櫛川中学 卒業アルバム」と書かれた分厚い本を引っ張り出した。

「へーえ卒アルかー 懐かしいな ていうか何でそんなもの持つて来たんだ?」

「わかつてねえな当麻 こんな時こそ卒業アルバム見て昔を懐かしむんじやねえか!」

そんなものなのかと当麻は隣の大和に尋ねるが大和は知らんと簡潔に答えるだけだった。

「みんなの中学校時代のアルバムですか? 超興味がありますーー見てもいいですか?」

「どうぞどうぞ ていうか最愛ちゃん、大和の卒アル見た事ないの?」

「はい・・・ 大和さんはそういう話は超全く話しませんから」

「大和、お前ってヤツは！－何で最愛ちゃんに言わねえんだよ！－俺たち『柵中の三臣』の武勇伝を！－！」

「つるせH－急いでつけ声出すんじゃねH－何が『柵中の三臣』だ！－アレかなり恥ずかしかったんだぞ！－！」

2人はそのまま言い争いを始める。仲が良いんだか悪いんだか正直わからないなと当麻ははあとため息を吐く。

「でも『柵中の三臣』か・・・ 懐かしいな 確かオレたちそう呼ばれてたよな・・・」

「超何ですか？その・・・『柵中の三臣』つて」

何の事かさっぱりわからない絹旗は当麻に尋ねる。すると大和とい争いをしていた垣根はぐるりと絹旗の方を振り向くと説明し始める。

「俺たち3人の中学の総称、簡単に言えばあだ名みたいなものだ」

「超大層なあだ名ですね・・・」

絹旗はまさかただのあだ名だとは思っていなかつたのか半分拍子抜けの表情をしている。

「絹旗が言う通り今思えば随分大袈裟な名前だよなー あの時は何とも思つてなかつたけどオレ達結構いろんな事したよなー」

昔を懐かしむ様に当麻はしみじみと語り。

「そりや 言ってる 確かにちよつとやり過ぎたってのもあったよな  
あまあ楽しかったからいいけど」

当麻に続いて垣根も笑いながら言ひ。

「ケツくつだらね ん あんなもん今思えばただのバカじやねエか」  
「まあバカつてのは言てるな でもお前だつて結構楽しんでたじ  
やねえか」

垣根が茶化す様に大和に言つ。大和はブイと顔を背けたがまあ楽し  
かつたのは否定しねエと小ちへ呟いた。

「あの・・・3人は中学の時どんな感じで超過ごしてたのですか?..」

やはり気になるのか縄旗は身をのりだす様に尋ねる。

「聞きたい? 最愛ちゃん」

「はい! 超聞きたいです!..」

「聞いたといいで面白くも何ともねエぞ」

「いいじゃないか大和 たまには中学の事思い出すのも悪くないぜ  
!..」

「当麻・・・ テメエもかよ」

3対1。人数的にも場の雰囲気的にもこれ以上は無駄と判断した大和は勝手にしろ・・・と呟くとまたトイと顔を背けたしました。

「決まりだな」

垣根はニヤリと顔を弛ませると意氣揚々に話し始めた・・・。

『とある中学に3人の少年がいた。

1人は一度見たら忘れないツンツン頭に不幸体质、右手に特異な力を持ち

1人はホストを思わせる様な服装に端正な顔立ち、誰も見た事ない力を使い

1人はどう見ても中学生とは思えない童顔と身長に左右色の違う瞳を持つ、学園都市最強の能力者

人々は普通でない3人の事をこう呼んだ・・・

『柵中の三巨』と

土御門 元春（前書き）

誤字、脱字がありましたらお知らせください

土御門 元春

「まさかとは思つたがテメエだったとはな 土御門」  
物影から現れたのは大和のクラスメイトにして今朝の補習メンバーの1人、土御門元春だった。

「いつから気付いてたのかにゃー？ 大ちん」

「最初からだよ 学校出て直ぐ誰かが後付けてるのはわかつたが誰かまではわからなかつたけどなア」

「じゃあどうして付けてるのがオレだとわかつたんだ？」

「それは企業秘密だ 何でもかんでも教えるとでも思つてんのかア？」

「それは言えてるぜよ」

するとピリピリピリピリと携帯の音がなる。その着信音から自分の携帯ではないと大和は判断する。

携帯の音は土御門のもので彼は電話に出ると何も話さず最後にわかつたとだけ言うと直ぐに切つてしまつた。

「それで、オレに何の用だア？ くだらねエもんだったらブッ殺すぞ」

「そう慌てるもんじゃねえぜい大和 本題に入る前にいくつか聞きたい事あるんだけどいいかにゃー？」

「どオセダメつて言つても聞くんだろ? セリと話せ」

大和がそう言つと土御門はふうと息を吐くと大和に尋ね始めた。

「学園都市に3人程侵入者が入ったんだが大ちん知つてるかにやー?」

「あア? 知る訳ねエだろ」

「本當かにやー? 大ちんはその内の1人に会つている筈ゼよ」

「はア? テメエ何言つて・・・! -!」

そこまで言つと大和はハツとなる。

「その反応じや何か心当たりがあるみたいだにやー」

大有りだ。おそらくその3人の侵入者の内1人はインデックスを追つているという敵の事だ  
だろう。なら後の2人はインデックスを追つているという敵の事だ  
ろうか。

「あのチンチクリン・・・ やつぱり『外』から来たのかよ」

「じゃ2つ目の質問 大ちんが考えているのは多分禁書目録の事だ  
と思うが彼女以外に侵入者らしき人物と接触したかにやー?」

「してねエよ つーかオレもテメエに聞きてニ事あんだけどよオ」

「オレの質問が終わつたら聞いてやるぜい 最後の質問 もしその  
侵入者が大ちんの前に現れたらどうするぜよ?」

「どもしねエよ 面倒事に巻き込まれんのは御免だからな まア  
オレに向かつてくんなら話は別だがなア」

「そりか・・・ 手前取らせて悪かつたにやー それでは本題に入  
るけど・・・」

「ちょっと待て」

土御門が本題に入ろうとするのを大和が止める。大和も是非土御門  
に聞きたい事があるのだ。

「先にオレにも質問させろ 本題に入んのはその後だ」

「んー確かにオレばっかり話すのも悪いしにやー いいぜい 何が  
聞きたいのかにやー?」

「テメエ何もんだア?」

大和は端的に聞く。

コイツは明らかに普通のヤツじやねエ、暗部の直感でそう感じたの  
だ。後の付け方も明らかにプロの付け方だつた。今だつてそうだ。  
話している間でもまるで隙一つない。

「テメエのした質問の内容は明らかに統括理事会クラス、それも理  
事長に近けエヤツじやねエと知り得ない内容ばかりだ 侵入者の正  
確な人数、しかもその内一人の素性まで掴んでやがる そこら辺の  
下つ端じや わからねエ筈だ」

「・・・」

「それにだ、テメエはインデックスの事を『彼女』と呼んだ 何で  
アイツが女だつて知つてんだ?しかも何の違和感なく『禁書目録』  
つて言つた 普通そんな名前だつたら少しは疑うだろ」

「・・・・・」

「これらから考へだせる事は2つ 1つはテメエは裏の人間で理事  
長に近いところにいる もう1つはどの位かは知らねエがある程度  
は魔術に関して知つてゐる事だ 黙つてねエで何か言つたらビオだ  
?」

「・・・・驚いたぜい まさかたつたあれだけの情報でここまでわか  
るとはな・・・」

土御門は驚いているというよりも感心しているといった表情をして  
いる。まさかこの短時間でここまで推理されるとは思つてもみなか  
つただろう。

観念したかの様に両手を挙げると土御門は再び話し始めた。

「大ちん『必要悪の教会』<sup>ネセナリウス</sup> つて知つてるかにやー?」

「確かにイギリス清教の暗部みてエなもんだつけ?」

「随分とアバウトだか簡単に言えればそんなところぜよ オレは必要  
悪の教会と学園都市のスパイ、つまり二重スパイつてところなんだ  
ぜい」

なるほどなアと大和は納得する。必要悪の教会の一員なら当然魔術  
の事も禁書目録の事も知つてゐる筈だ。それに学園都市のスパイと

なれば統括理事会、特に理事長であるアレイスターとの距離も近くなる。

「そろそろ本題に入るぜい 侵入者の後の2人は魔術師、おそらく必要悪の教会の人間ぜよ 大和ちんにはその魔術師の撃退、そして禁書目録の保護をしてもらいたいんだにやー 後魔術師は殺したらダメだぜい」

「そんなところだと思つたぜ」

大和はやれやれといった表情をする。土御門は必要悪の教会の一員だからまず不可能、他の者を行かせるのも魔術の存在を知らないのでダメだ。そうなれば消去法で大和にその役が回ってくる。しかも好都合なことに能力者でありながら魔術の存在を知っている。

「どオセアレイスターの命令だろ? オーケー引き受けたよ ただしオレがヤンのは撃退までだ 保護の方は他を当たれ」

「わかつたぜい アレイスターにはオレからそう伝えておくぜよ」

するとまた土御門の携帯が鳴った。電話に出た土御門は一瞬目を見開いたかと思うと今度は無言で電話を切った。

「大ちん、早速お仕事ぜよ 魔術師の1人が戦闘を始めた しかも相手はカミやんだぜい」

「マジかよ・・・ アイツもことん不幸なヤツだなア」

親友が鬪っているというのによる驚かない大和。大和自身遅かれ早かれあるお人好しが魔術師とぶつかることは大体予想していたの

だ。

「仕事にはオレも同行させてもらつぜい アレイスターからそう言  
われてるものでにゃー」

「当麻にバレたら色々面倒じゃねエの?」

「そこいら辺は大丈夫だぜい」

何が大丈夫なのか大和にはわからなかつたが本人がそう言つなら大  
丈夫なのだろうと大和は判断する。

「さアてオレの親友に手エ出したクソ野郎にきつーいお灸据えてや  
つかなア」

ニヤリと二日月の様に口を歪ませると大和は戦場へと向かつた。

# ただの高校生（前書き）

初バトルです！！！  
お気に入り登録、ありがとうございます！！！

## ただの高校生

大和と別れた垣根は1人自宅へと帰っていた。途中コンビニにでも寄ろうかと思ったが最終下校時刻を迎えていることもあり風紀委員や警備員に見つかれば色々面倒なので真っ直ぐ帰ることにしたのだ。歩きながら垣根は先程の大和とのやり取りを思い返していた。

用事があるから先に帰ってくれ。

大和は垣根にそう言った。普段なら何も思わなかつただろう。だが今回は違つた。

去り際に見た大和の目。その目は明らかに自分ではなく別の何かを捉えていた。中学からの親友である垣根だからこそわかる事だが。

(大和のやつ また何か一人で抱えているな・・・)

別に何か確証がある訳ではない。親友としての直感でそう思ったのだ。

垣根はズボンのポケットから携帯を取り出すと何処かへ電話を掛け始めた。

「あーもしもし?俺だ、垣根だ 何?言われなくともわかるって?  
相変わらず可愛げのねえやつだなあ」

「実はよちょっと調べて欲しい事あんだけどよ、人目に付く場所じや話せねえから例の場所に来てくれ ああ?もちろん全員だ 今から1時間後に集合だ いいな?」

そつ言つと垣根は携帯を切る。そして再び歩き始めると心の中で呟く。

( それで『スクール』再始動といふかな・・・ )

大和と土御門が魔術師と当麻が闘つてゐるあたり当麻の学生寮に到着すると寮は炎に包まれており文字通り火の海の状態だった。

「 こゝの感じ・・・ ルーンの魔術か」

「 ルーンって事はスタイルのやつかにやー? 学園都市だといつのに隨分と派手な真似してるぜい というか大ちん、ビリしてルーンの魔術つてわかつたんだ? 」

「 後で説明してやるよ それよりもテメはこゝに居る 魔術師の野郎ブツ飛ばしていくからよ」

そう言つと大和は寮に更に近づいて行つた。

「 もう少し、じゃあ土御門さんは高みの見物と行くかにやー」

そつ言つと土御門は何事もなかつたかの様に移動を始めるのだった。

「さてと、どうやって上まで行こうかね？」

燃えさかる寮を見上げながら大和は魔術師に接近する方法を考えていると「ドーン！－！」と何が落ちて来た様な音が聞こえた。何だ？と思つて音のした方を見るとそこには痛つてえと言いながら腰を押さえている当麻がいた。

どこまで「イツに知られててもいいのかと大和は考えるがある程度は大丈夫だろうと勝手に判断すると大和は当麻に近づく。

「おい、大丈夫かよ当麻？」

「！？・・・何だ、大和か」

「人が折角心配してやつてんのに何だとは失礼なヤツだなア」

当麻は何か言おうとしたが上から突然ゴオー！－！と大きな音がした。何だ？と思って大和が上を見上げる。そこには炎で出来た巨人の様な物が2階の手すりを持ちながらこちらを見下ろしていた。

「魔女狩りの王か・・・・ 隨分と派手なもん使つてきやがったな」  
イノケンティウス

「ど、どうしてあれの名前を知つているんだ！？」

「説明は後だ 話せば長くなるからなア それよりインデックスは何処だ？どオセテメエの事だ、アイツが絡んでるから鬪つてんぢろ？」

大和の言葉を聞くと当麻は少し笑いながら言った。

「インデックスの事・・・助けてくれるのか？」

「勘違いすんじゃねエよ オレは親友に手エ出したヤツが許せねエ  
だけだ あのチンチクリン助ける訳じゃねエ」

「素直じゃないなお前も でも・・・ありがとよ」

当麻は大和に礼を言うと現在の状況を説明した。インデックスは当麻の家の玄関前に居て背中に重傷を負っている、そのため一人で動く事が出来ないと言つことだ。魔術師もそこにいるらしい。

「なるほどなア、オーケーわかっただぜ オレが魔術師とやりあつて  
る間にインデックス連れて逃げろ そんでもつてどつかで治療して  
もらえ」

当麻にそう指示すると大和はゆっくりと上に続く階段を登り始める。後ろから当麻が1人で大丈夫か?と言つのが聞こえたので大和は階段の真ん中ぐらいで止まると前を向いたまま答える。

「安心しろ オレに勝てるヤツなんざ未来永劫現れやしねエよ」

(やつが戻つて来ない・・・逃げ出したのか?)

タバコを吸いながらスタイルは学生寮を飛び出してから戻つて来ない当麻の事を考えていた。

魔女狩りの王に怯えて逃げたのだろうと考えたスタイルはインデック

インデックス

クスを回収すべく彼女に近付こうとしたその時だつた。

カーン、カーン、カーンとゆっくりと階段を登る音が聞こえてきたのだ。

（やつが戻つて来たのか？ならどうしてこんなにゆっくりと階段を登れるんだ？）

魔女狩りの王<sup>イノケンティウス</sup>は最新型の追尾式ミサイルのようなもので一度標的をロックすると殺すまで追い続ける。もし今階段を登つて来ているのがやつなら当然魔女狩りの王<sup>イノケンティウス</sup>に追われている筈、こんなにゆっくりと移動する余裕などない筈だ。

なら誰が？ 階段を登る音は徐々に近づいており最終的にスタイルの居る階で止まつた。

警戒心を強めているスタイルの前に現れたのは当麻ではなく鮮やかな茶髪に両手をスボンのポケットに突っ込んだ大和だつた。当麻ではない事に少しホッとしたしたスタイルは強めていた警戒心を緩め大和に言う。

「君は此処に住んでいる生徒かな？」

スタイルとしても無駄な争いは避けたかつたので魔術師としての顔は伏せておく事にした。しかしこの大和の一言でその言葉の意味をなくす。

「下手クソな演技してんじゃねエよ、魔術師」

その言葉を聞いた瞬間、スタイルは緩めていた警戒心を再び最大にまで戻す。

「そうカリカリすんなよ イギリス清教必要悪の教会の魔術師、ス<sup>ネセサリウス</sup>

「スタイル＝マヌグスさんよオ」

その言葉にスタイルは目を見張る。自分の正体を知られている。それでもスタイルは出来るだけ表情に出さず冷静さを保とうとした。しかし・・・

「魔女狩りの王イノケンティウスか・・・ こんな目立つ魔術、学園都市なんかで使うもんじゃねエゼ」

今度は驚きの表情を隠す事が出来なった。自分の素性を知っているばかりか、魔女狩りの王イノケンティウスの事まで知っていたのだから。

スタイルはインケンティウスと呟くと大和に尋ねる。

「君は魔術側の人間なのかい・・・？」

「まあ正確に言えばハズレだけどなア 魔術に関しては知っているもちろんテメエ等の事もインテックスの事もな」

「なら尚の事生かして帰す訳にはいかないな」

そう言うとスタイルは炎の巨人に命令する。  
殺せ、と。

主人の命令を聞き付けた巨人はそれに従いターゲット（大和）に迫る。

対する大和は何の抵抗もせず両手をポケットに入れたまま直ぐ目の前に迫つてくる魔女狩りの王イノケンティウスを眺めているだけだった。

スタイルは一緒呆気にとられたが魔女狩りの王イノケンティウスはそのまま大和を3000度の炎で包み込んだ。

（一般人相手に少しやり過ぎちゃったかな まあいい、これでやつ

もお終いだ）

スタイルが勝利を確信したその時だった。3000度の炎で焼かれている筈の大和が何事もなかつたかの様にこちらに向かつて歩いて来たのだ。

「残念でしたア こんなショボい魔術じやあ当麻のヤツは殺せてもオレは殺せねエよ」

スタイルは言葉を失つた。3000度の炎に包まれた筈なのに大和は火傷一つ、汗一つかいていなかつたのだ。

「貴様！！何故生きてられる！？」

「あア？簡単だ、オレが魔女狩りの王（イノケンティウス）に呑まれたつていう事象を拒絶したんだよ 流石に魔術に直接干渉すんのは難しいがオレの身体自体に起こつた事象なら魔術だろうが何だろうが関係ねエよ」

事象を拒絶？

スタイルは訳がわからなかつた。そんな力聞いた事もないし、仮に存在するとしたら最早人間の域を超えている。

「い、魔女狩りの王（イノケンティウス）！」

スタイルが叫ぶと魔女狩りの王（イノケンティウス）は再び大和に突進する。

大和は目を閉じる。そしてゆっくりと目を開いたかと思うと、魔女狩りの王（イノケンティウス）は大和の目の前で動きを止めた。そして見えない何か引っ張られるかの様に魔女狩りの王（イノケンティウス）は空間に引きずり込まれてしまった。

「なつ、魔女狩りの王（イノケンティウス）！」

スタイルが叫ぶが何も起こらない。その様子を見て大和はニヤリと笑うと静かに言った。

「無駄だつての、テメエがいくら叫んだとこりで魔女狩りの王イノケンティウスは戻イノケンティウスつて来ねエよ」

「どういう意味だ！？」

「魔女狩りの王イノケンティウスは空間イノケンティウス」と別次元に飛ばした つまり今アレはオレ達の知らねエ別世界に存在してゐるつて事だ イクラ呼んでも反応する訳ねエだろ」

スタイルは呪文を唱え炎剣を作ろうとするが大和は聖人の脚力をを使い一気にスタイルとの距離を零にする。

「貴様は一体何者なんだ！！！」

スタイルの質問に大和は右手で握り拳を作りながら答える。

「なんの変哲もねエただの高校生だよ」

大和の右ストレートがスタイルの顔面に突き刺さり、向こうの壁まで吹き飛ぶとそのままスタイルの意識が途絶えた。

もちろん手加減はした。聖人の力を全開にした状態で顔面を殴れば間違いなく顔の原形がなくなるか最悪の場合首から上が吹き飛ぶ。大和はこのままスタイルを殺したかったのだが土御門から殺すなど指示が出ていたので放つて置く事にした。

大和とスタイルの戦闘の一部始終を見ていた土御門は啞然としていた。

魔術イノケンティウスに関してやたら詳しいかと思えば見た事もない力で魔女狩りの王を退け、おまけに聖人の力までを見せたのだ。

（何かあるやつだとは思っていたが・・・まさかここまでのものとは）

土御門が一番驚いたのは大和が聖人の力を完璧に使いこなしていた事だ。

世界に20人と居ないと言われている聖人はその強過ぎる力のあまり使いこなすのが難しいとされている。力を全開にするのはもちろん、先程の大和の様に手加減するのも非常に難しい。それを科学側の人間である筈の大和が、魔術側の力である聖人の力を完璧に使いこなしていたのだ。

「神鬼大和・・・ お前は一体何者なんだ？」

土御門の謎はさらに深まったのだった・・・。

空腹の余り・・・（前書き）

超電磁砲組、初登場ですーー！

## 空腹の余り・・・

魔術師、スタイル＝マヌグスを撃退し結果的にインデックスを救出した大和は当てもなくブラブラと学園都市を歩いていた。朝早くから当麻から電話があり、インデックスは無事で今は担任の小萌先生の家に居候しているとの事だ。

（腹減つたなア・・・）

思えば昨日の夜から何も食べていない事に大和は気付く。こんな日有限つて炊事係りである絹旗は昨日の夜から出掛けたままだ。自炊する氣にもならなかつたので家に居ても仕方ないと判断した大和は出掛ける事にして現在に至る。

とりあえずファミレスでも行こうかと思つたその時だつた。  
ドカーン！と凄まじい爆発音がした。何事だ？と思ひ大和は音のした方を向くと銀行のシャッターが破壊され中から顔に布を巻いて目だけが見えている3人の男が出てきた。

（銀行強盗か？また随分と派手な登場ときたもんだ 今時こんな強盗マンガでもいやしねエゼ）

興味をなくした大和はそのままファミレスに向かうことにする。

「そ、そこの茶髪の子！…ど、どこに行くんですか！…」

後ろから突然大声で呼ばれたのであア？と言ひながら振り返ると、頭に色取り取りの花々を装備した少女が大和に向かつて叫んでいた。大和は最初花瓶が歩いているかと思ったがそれ以上に彼女が着ている制服に見覚えがあつた。

(こいつは・・・『柵川中』の制服か、つて事はオレの後輩か・・・)

そして次に目に入ったのは左腕に巻いている緑と白の腕章。

『風紀委員』(ジャッジメント)

『警備員』(アンチスキル)と並ぶ学園都市の治安維持機関の一つで学園都市の教師で構成されている警備員アンチスキルと対照的に主に学生により構成されている。

構成員の多くが何らかの能力者だが能力者でなければ入隊出来ないといった事はなく学生であれば一定の訓練をこなし、入隊試験に合格さえすれば誰でも入隊出来る。

風紀委員の腕章を巻いているのでどうやらこの花飾りの少女は風紀委員ジャッジメントのようだ。

「危ないので早く避難して・・・って聞いていますか！？」

花飾りの少女は大和の前に立つと進路を塞ぐ。彼女としては風紀委員ジャッジメントとして避難誘導の職務を全うしようとしているのだろう。だが大和にとってあの程度の爆発や強盗など何の脅威でもなく一刻も早くファミレスで朝食を摂りたいのだ。

「邪魔だ退け 前に立たれたら進めねエだろオガ

「前に進もうとしないで下さいよ！ 危ないですから！」

花飾りの少女も頑として退こうとしない。

大和ははアと溜息を吐くとそれだけで人を殺せそうな目で花飾りの少女を睨み付けながら言つ。

「あア？ 退けつて言つてんのがわからねエのかア？ それとも実力行使でもしねエといけねエかア！」

後輩、しかもジャッジメント風紀委員相手に脅しに掛かるのは若干気が引けたが大和としても空腹の限界が近づいてきてるので余裕がなかつた。  
大和に睨まれた花飾りの少女は今にも泣きそうな顔をしている。  
少しやり過ぎたか？と大和がそう思つた時だつた。

「初春さん！ 大丈夫！？」

向こうから誰かが大声でそう言いながら大和達がところへ走つて來た。

誰だ？ と思い顔を上げると見覚えのある制服を着るこれまた見覚えのある少女が見えた。

常盤台中学校。

学園都市でも5本の指に入ると言われている名門校で世界有数のお嬢様学校である。しかも生徒の全員がレベル3以上というまさにエリート集団だ。

そんな名門校の制服を身に纏う少女の名は御坂美琴。

学園都市に7人（大和を含めれば8人だが）しかいないレベル5の第三位、『常盤台の超電磁砲』の異名を持つ最強の電氣使い（エレクトロマスター）だ。

レベル5は音信不通の第六位を除けば全員の顔と名前は知つてゐる。だがこうして顔を会わすのは第一位である垣根以外では初めてだ。美琴は初春の隣に並ぶと大和に食つて掛かる。

「ちょっとアンタ！ 初春さんが離れろつて言つてるんだからさつさと離れなさいよ！」

いつもの大和ならもう少し冷静に対処しだろう。だが空腹から来

るイライラで気が立つていた大和にそんな冷静さはなく同じ様に美琴に言い返す。

「いきなり現れて何言つてんだテメエ　つーかテメエも一般人じゃねエか」

見たところ美琴は風紀委員の腕章は巻いない。つまり美琴も大和と同じく一般人という事になる。美琴は私は事件の当事者だからいいのよ！と訳のわからない言い訳をしている。

このままでは埒が明ないと考えた大和は2人にある提案をする。

「じゃあこうしよオや、今からオレがあの強盗どつ捕まえてやるそうすりやあ事件解決、危険ナシになんだろ？」

美琴と初春はポカーンとした表情をしている。それもその筈、自分達と歳が変わらないような少年が強盗を捕まえると言つているのだ。直ぐに我を取り戻し大和に何か言おうとしたが既に大和の姿はなかつた。まさかと思い後ろを振り返ると強盗に向かつて突っ込んでいる大和の姿があった。

「ちょっとアンタ！待ちなさいよ！」

「だから危ないですって！」

美琴と初春がひきりなしに叫ぶが大和は完全に無視をする。だが途中で立ち止まると後ろを振り返りニヤリと笑うと2人に言った。

「余計な心配してんじゃねエよ　オレに勝てるヤツなんざ未来永劫現れやしねエよ」

ジャッジメント

風紀委員の一人、白井黒子は強盗に向かい合っていた。対する強盗は右手にサッカーボールぐらいの大きさの炎の玉を作り出していた。炎の大きさから見て恐らくレベル3クラスの発火能力者だろう。レベル4の空間移動の能力者である黒子からすればこの程度の相手なら何の問題もなく対処出来る。それでも何もアクションを起こさないのには理由がある。

一つは強盗の正確な人数がわからないため。確認出来た強盗の人数は3人、だがこれは黒子の目で確認出来た人数であり正確な人数であるという確証はない。正確な人数がわからない状況でアクションを起こすのは危険が伴う。

二つ目は相手が能力者であるため。目の前の強盗は少なくともレベル3はある。下手に動いて一般人にでも能力を発動されたら命の保証は出来ない。

3つ目は一つ目と関連するのだが残りの強盗が能力者であるかもしないため。仮に強盗があと1人だけだとしても能力者、しかも自分よりレベルが高い者ならばかなり厄介な事になる。更に人数がいるなら尚更だ。

「どうした？ 来ないのか？ なら「ツチからいくぜ！！」

痺れを切らした強盗が炎の玉を黒子に投げようとする。黒子はテレポートで後ろに回り込もうとしたがもの凄いスピードで何が黒子を横切った。

「おつと危ねエなア そんなもん投げちゃあ 火遊びはいけません

つて先生に習わなかつたのかア？」

大和はそう言うと強盗の後ろに回り込み炎の玉を投げようとしている右手を掴むと、そのまま腕力だけで強盗を投げ倒す。そして投げ倒した強盗の背中に乗ると左手で頭を押さえ、左膝で背中を押さえながら強盗の右肘の関節を捻り上げる。

「イテテテテテテ！！！ テメエ何しやがる！！！」

「悪いな、オレの朝メシ掛かってんだ 大人しく捕まつてくれや」

強盗を押さえながら大和は言う。そしてポカーンとした表情でその光景を見ている黒子に手錠を要求する。

「おい、何ボケエとしてやがる サツサと手錠寄越せ それぐらい持つてんだろ」

大和の声で我を取り戻した黒子は手錠を手渡す。黒子から手錠を受け取った大和はそれを強盗に掛けると残る強盗を探すべく周りを見回す。

「確かアイツ等は3匹だつたな もう1匹何処行きやがった」

横で黒子が何か言つているが大和の耳には入らない。強盗を探すのに必死な大和は中々見つからない事にかなりイラライラしているようだ。

「ちょっと貴方！！ 聞いていますの！？」

先程から何度も呼び掛けているのに完全無視されている事にしびれを

切らした黒子は大和の耳元で大声で叫ぶ。

ようやく気付いたのか大和はゆっくりと黒子の方を向く。だがその顔には明らかに怒りの色が浮かんでおり黒子を睨み付けるその目は今まで見てきたどの犯罪者より鋭く、恐ろしかった。

「聞こえてんだよクソ野郎が 耳元で叫んでじゃねエぞ 死にてエのか」

その言葉の一言一言に背筋が凍りそうな感じをする黒子。足がガクガクと震えており、額から出る汗が止まらない。しかし次の瞬間その恐怖心は一気に吹き飛ぶ事になる。

「動くんじやねえ！…このガキがどうなつてもいいのか！…」

声のした方向に大和と黒子が振り向くと強盗の1人であるつ男が男の子を腕に抱き、頭に銃を突き付けていた。

つまり人質、逃げられないと判断したからだろう。しまったと黒子は思う。人質を取られてしまつた以上下手に動く事は出来ない。もし動けば最悪人質が殺されるかもしれない。完全に手詰まりとなつた。

「チツ、人質かよ 面倒くさい事しやがつて」

深刻な顔をする黒子とは対照的に緊張感がないのか大和は頭を搔きながら舌打ちをする。

「どうしてくれますの！貴方の責で人質を取られてしまいましたの！」

先程の恐怖心は何處に行つたのか黒子は大和に小声で文句を言う。

大和はどうしてオレの責になるんだ?と思つたが無駄な体力は使いたくなかったので聞き流した。

「ちょっと聞いてますの! !」

「あーうるせエうるせエ わかつたよ あの野郎とつ捕まえて人質助けりや文句ねエだろ?」

「そう言う事を言つてはありますんの!それに貴方は一般人!これ以上勝手な事は許しませんの!」

「そんな事言つてる場合かア?強盗が逃げちまうぜ それとも風紀委員のヤツはみんな融通の効ぬエアホバッカリなのか?」

黒子は何か言い返そうとしたが言われてみれば大和の言う通りだ。人質を救出するのに身分など関係ない。それに悔しいが自分一人ではこの状況を開拓出来ない。先程の逮捕劇を見るかぎり大和はかなり手練れである事はわかつた。

不本意ではあるが黒子は大和に協力を求める事にした。

「ですがどうするつもりなんですか?人質がいる以上、下手には動けませんわよ」

「んな事テメエに言われなくてもわかつてるつての まア見てな」

何か策でもあるのだろうか大和は強盗に向かって歩き始める。

「おいお前! !動くなつて言つてるだろ! !」

強盗は大和に叫ぶ。銃を使うのに慣れていないのか心なしか手が震

えている。

(ありやあ素人だな 手が震えてやがる サッセとしねエと関係ね  
エヤツまで撃つちまうかもしけねエ・・・)

「動くんじゃねえ!—」のガキ殺すぞ!—」

人質となっている男の子は目についてぱいの涙を溜めている。肉体的にも精神的にももう限界だらう。そう判断した大和は行動を起こす事にした。

「待て待て、オレはテメエを捕まえるつもりなんざ微塵もねエ」

「お前風紀委員じゃねえのか!—」

「違げエよ 誰があんな面倒くさいとに入るかつての」

そう言うと大和はポケットから何か取り出す。それに強盗が気付き、銃口を男の子から大和へと向ける。

「お前!—ポケットから何出しやがった!—?」

「あア? 鏡だよ鏡 オレさアコンタクト付けてんだけじょつとズレちまつて何にも見えねエんだ だから直させてくれよ」

大和は取り出した鏡を強盗に見せる。取り出された物が本当に鏡だった事を確認すると強盗は再び銃口を大和から男の子に向ける。確かに大和はコンタクトを付けているがそれは目が悪いからではなく別の理由からだ。故にいくらコンタクトがズれたところで目が見えなくなる事などなく、もちろんコンタクトがズれたというのも嘘

で鏡を取り出す為の口実に過ぎない。

大和はズレたコンタクトを直すフリをして上目で太陽の位置を確認する。

(オーケー完璧だ いくぜー)

「あんがとよ おかげで直つたぜ」

大和は鏡をポケットに直そうとすると強盗が待て！…と大和に言つ。

「何だよ？」

「その鏡、ポケットに直さないでこっちに投げろ」

狙い通りだ、大和は心の中でそつ吐く。だが気付かれないと出来るだけ面倒くさそうに強盗に尋ねる。

「あア？ 何でだよ？」

「次は何か武器になる物出すかもしけねえだろ！…だからもう両手はポケットに入れさせねえ！…両手を上げて後ろで頭に付ける！…」

「あアなるほどね アンタ頭いいじゃねエか だけどよオ両手挙げちまつたら鏡投げれねエゼ？」

大和は右手に鏡を持ちながら両手を挙げ強盗を小バカにするよつこ言つ。

その態度が気に食わなかつたのか強盗は先程よりも強い口調で大和に命令する。

「じゃあさつさと鏡をこっちに投げろ！……お前ブチ殺せれたいのか！！！」

「はいはい、仰せのままに」

そう言うと大和は下手投げで強盗に鏡を投げる。だが大和は右手を下ろす間に閉じた鏡を開けるとガラスの面を上にして投たのだ。鏡のガラスの面に太陽の光が反射しそのまま強盗の目に突き刺さる。急に光が目に入つて来たので強盗は思わず顔を背ける、同時に男子の頭に突き付けていた銃口が地面へと向いた。

その瞬間を見逃さなかつた大和は走り出すと凄まじいスピードで一気に強盗との間合いを詰める。強盗が気付いた時には既に遅く、大和は左手で銃を持つ強盗の右手の手首を捻り銃を奪うとそのまま右肘で強盗の鳩尾を突く。

鳩尾を突かれた強盗は声を出す事が出来ずそのまま地面に膝を付ける。だが大和の追撃は終わらず今度は近くにあつたガラス片を拾うと走れなくする為に強盗の太腿に突き刺す。

「グギヤアアア！！！」

今度は声に出して痛みを訴える強盗、それを尻目に大和は人質となつていた男の子を連れて黒子の元へ戻つて来た。

「ほらよ 強盗も人質も確保 事件解決」

そう言うと大和は男の子を黒子に預けると意気揚々とファミレスへと歩き始めた。しかし黒子がそれを許す筈がなく案の定、大和は男子に呼び止められた。

「ちょっと待つてください！明らかにやり過ぎですの！」

「まだ何か文句あんのかよ あんなもんやり過ぎでも何でもねエ ジ  
やねエ カ」

「いいえ明らかにやり過ぎですの！最後のアレは必要なかつたでし  
ょう！」

「最後のつてガラスブツ刺したヤツか？また逃げられてもしたら面  
倒じやねエ カ だから走れねエ ようにしたんだよ」

「何でもいいですわ 貴方には事件の関係者として支部まで来ても  
らいます 『同行願います』」

黒子は大和の手を掴むと支部まで連行しようとする。

「冗談じゃない、何でそんな事までしなけりやなんねエ んだ。 大和は  
黒子の手を振り解こうとするが体に力が入らない。足に力が入らず、  
頭もフラフラしてきた。何だ！？と思つた瞬間大和は前へと倒れ  
黒子に持たれ掛かつてしまつた。

急に背中に重みが掛かつたので何事かと思い黒子は首だけを横に向  
けると自分の背中に大和が倒れていた。

「ちょ、ちょっと貴方！－大丈夫ですの！？」

「・・・大丈夫じゃねエ 腹減つて死ぬウ・・・」

今にも消えそうな弱々しい声で大和は空腹を訴える。  
学園都市最強の能力者も空腹という大敵には勝てなかつた・・・。



## レベル5 vs 自称レベル0

「いやア助かつた！危うく死ぬところだつたぜ！」

右手にミルクティーの入ったコップを持ちながら頭を軽く下げているのは神鬼大和。彼は今風紀委員ジャッジメインの第十七支部にいる。

「アンタ・・・どんだけ食べるのよ」

呆れた表情で大和に呟くのは御坂美琴。

名門常盤台中学に通う学園都市の第三位の能力者だ。

美琴と同じく常盤台の制服に見に纏い大和に向かい合いつゝに椅子に座る少女は白井黒子。

彼女はここ第十七支部に所属する風紀委員ジャッジメインだ。

その黒子の後ろでビクビクしながら大和を見つめているのは頭に色とりどりの草花を付けていたりの少女は初春飾利。彼女も黒子と同じく第十七支部所属の風紀委員ジャッジメインだ。

大和が何故こんな所にいるのかと先程の強盗事件の関係者として事情聴取を受ける為だ。大和としては面倒くさい事この上なかつたが抵抗すれば色々と面倒な事になりそうだったので素直に従う事にしたのだ。

「では最初にお聞きしますが貴方の名前と年齢を教えてくださいな

「神鬼大和、歳は13」

別に嘘を言つ必要もないでの素直に大和は答える。アレイスターのヤツ、この光景も見てんのかア？と思うと笑いが込み上げて来る。

「・・・何を笑っていますの？」

「いやいやこっちの事だ もうと次いこつぜ」

早く終わらせたかった大和は黒子に次の質問を急がず。

「そうですね では次に参りますの 貴方は何処の中学校所属ですか？」

「残念でしたア オレは中学生じゃなくて高校生だっての」

恐らく年齢と外見からさう判断したのだらう。だが大和は特例ではあるが立派な高校生である。そんな事情を知らない黒子は信じる筈もなく・・・

「下手な嘘偽りないで下さい！」

案の定、疑われた。

「本当だつての 信じらんねえなら調べてみろよ

大和がそう言うと黒子は後ろにいる初春に書庫パンクでの照明を指示した。初春は近くのデスクパソコンの前に座るとカタカタとキーボードを叩き書庫パンクにアクセスし始めた。

「ありました！神鬼大和さん、確かに高校生です！」

黒子と美琴は信じられないといった表情で大和を見る。対する大和はほら見ろと言わん表情をしている。

書庫に載っている以上大和の言っている事は紛れもない事実だ。だがまだ黒子と美琴は納得のいかない顔をしている。

「書庫<sup>パンク</sup>に載つてゐる以上本当の事なのでしょう ですが年齢と合わないの何故ですか?」

「あアその事かア・・・」

ミルクティーを一口飲むと大和は面倒くさそうに説明し始める。  
「色々訳あつて飛び級で高校通つてんだよ 訳は聞くなよ 説明するの面倒だから」

黒子はまだ釈然としないようだがこれ以上は聞くのも野暮なので事情聴取を再開しようとした時だった。

「え、大和さんつて柵川中学の卒業生なんですか!?」

「言つてなかつたか? そつだぜ テメエは柵中の生徒だろ? その制服見て直ぐにわかつたよ」

「すごい偶然ですね! びっくりしましたよ!」

先程までビクついた態度はどこやら初春は目をキラキラさせている。そんな初春とは対照的に事情聴取の再開を見事に邪魔された黒子は心なしかイライラしている様に見える。

初春は次から次へと質問を大和にぶつけていくが埒が明かないと判断した大和は無理矢理質問タイムを切り上げ、何やらドス黒いオーラを出して大和と初春は睨み付けている黒子に声を掛ける。

「悪いな そう怒るなっての 折角のかわいい面が台無しだぜ」

突然顔を褒められたので黒子は少し赤くなっているた。そんなつもりで言つた訳ではないのだが。

「「ホン、では再開しますの 貴方の能力名とレベルの高さを教えて下さいまし」

やつぱりきたか・・・

大和は心中で呟く。正直この質問が一番厄介なのだ。  
アレイスターからは自分がレベル5、それも学園都市最強であると  
いう事はぐれぐれも漏らすなと言われている。ましてや風紀委員相  
手ならなおのことだ。余計な散策でもされたら厄介だし最悪この3  
人を始末しなくてはならなくなる。

「オレは能力なんぞ持つてねエゼ レベル0、立派な落ちこぼれだ  
よ」

大和は出来るだけ普通に答えた。確かに書庫パンクにはそう記載されていた  
筈だ。

黒子は視線だけ初春に指示を送ると初春は大和の証言を書庫パンクのデータと照らし合わせる。

「確かに大和さんはレベル0、無能力者と記載されています」

「そうですね・・・ わかりましたの」

黒子は何かモヤモヤとしたものが残ったが無理矢理納得する事にした。そこで黒子はふとある疑問が浮かんだ。

「事情聴取はこれで終了ですの・・・ あの大和さん、一つお聞きしてもよろしいですか?」

「何だよ？答える範囲で頼むぜ」

「大和さんは何か武術の心得でもありますの？」

答えてもらえるかわからなかつたが黒子は大和にぶつけてみた。

「あ、それも私も気になつてたのよ！」

「わ、私も・・・」

黒子の質問に続いて美琴と初春も興味津々と言わんばかりに身を乗り出す。

「何でそつ思うんだよ？」

「わたくしこう見えても風紀委員ジャッジメントとして多少は武術の心得がありますの さつきのあの動き・・・どう見ても素人のものではありますでしたの 動きに全く無駄がありませんでしたし限りなく達人の動きでしたの、それに・・・」

「それに？」

「あの鏡を使った陽動も素人技ではありませんの あの状況で冷静にしかも正確にここまで出来るのは普通の人では無理ですの」

なるほどなア よく見てんじやねエか、大和は感心した。伊達に風紀委員ジャッジメントを名乗っている訳ではないようだ。これぐらいなら話しても丈夫だろ?と思つた大和は答える事にした。

「あア テメエの言つ通りオレは武術をマスターしている 武術つて呼べるもんは大体使えるぜ 正直そこら辺の能力者よりは闘えると思つぜ」

そこまで言つて大和は余計な事言つてしまつたと氣付いた。美琴が何やら好戦的な目でこちらを見ていたからだ。

黒子も美琴の周りの空気の変化に気付いたのか美琴に何か言おうとしたのだがそれよりも早く美琴が大和に言つ。

「アンタ腕に自信があるみたいね ジャあ私と勝負しなさい」

美琴も最初はレベル〇相手に決闘を申し込むのは若干気が引けたが大和が腕に自信があると言つたので間髪入れず申し込んだのだ。当然黒子は断わるだろうと思つていた。美琴はレベル5、レベル5相手に好き好んで闘おうとするのは同じレベル5かよっぽどのバ力かのどちらかだ。

だが大和の返事は黒子が予想したものと大きく違つた。

「いいぜ別に オレもレベル5相手にどれくらいやれんのか知りたかつたんだよ」

あろうことか大和は美琴の決闘を受諾したのだ。レベル5相手に正面からぶつかれば最悪の場合死者が出る。レベル〇が相手なら尚更だ。

「ちょっと大和さん！お姉様はレベル5、学園都市の第三位ですよーわかってますの！？」

もちろんわかつていて。自分も同じレベル5、それも学園都市最強なのだから。だが大和は第三位程度なら能力など使用せずとも勝て

る確信があつたのだ。

「わかつてゐるつての　いい機会じやねエかレベル〇（落ちこぼれ）がレベル5（天才）相手にどこまでやれんのか、テメエらだつて少しほは見たいだろ？」

美琴はやる氣満々だし大和も全く引くつもりはないようだ。はあと溜め息を吐くと空氣は大和にビシッと指を刺しながら忠告する。

「今日は特別に許可しますの　だだし！危険と判断したら直ぐにやめてもらいますのよ！」

「あー了解了解　そちら辺の判断はテメエに任せるとわ

大和は最後の一 口のミルクティーを飲み干す。ではわたくしに着いて来て下さいのと言うと黒子と美琴は先に行つてしまつた。大和も後に続こうとする以後からあの・・・と声が聞こえた。振り返ると初春が心配そうな顔でこちらを見ていた。

「何だよその面は　オレがまるで戦争にでも行くみてエな感じじゃねエか」

「大和さん・・・大丈夫なんですか？今からでもやめた方が・・・」

心配する初春の頭にポンと手を置くと大和は笑いながら言つ。

「心配すんな、さつきも言つたろ？未来永劫オレに勝てるヤツなんざ現れやしねヒよ」

場所は変わりここは風紀委員の模擬対戦用の闘技場。<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員専用の施設だが今から模擬戦（決闘）を開始しようとしている2人は風紀委員ではない。

軽くジャンプしたり手首の柔軟をするなどやる気満々の美琴に対し大和はズボンのポケットに手を突っ込んだまま欠伸をするなど緊張感の欠片もない。本当に今からレベル5相手と決闘するのかと聞きたくなるぐらいだ。

『それでは今から開始しますの 危険と判断したら直ぐに中止して下さいな』

上の閲覧室から黒子がアナウンスする。

美琴は既にバチバチと微弱な電気を発生させていた。大和何もアクション起こさない、それどころか閲覧室をジッと眺めているだけだった。

『それでは開始して下さい』

そのアナウンスが合図となり美琴は大和に向かつて電撃を飛ばす。だが大和は躲そうとはしない。

（アイツ何で避けないの！？）

美琴は大和の予想外の行動に疑問が浮かんだが直ぐにその答えは出る事になる。

電撃が当たるか当たらないかぐらいのギリギリの距離で大和はクル

りと体を半回転する。電撃は大和に当たる事なく大和の後ろの壁に直撃する。

美琴は啞然とした。最初は電撃の速さに体が反応出来なかつたと思った。大和は反応出来なかつたのではなくギリギリまで反応しなかつたのだ。大和は電撃を躱すのにかかる労力を最小限にする為に��てギリギリで躱したのだ。

美琴はレベル5としての直感でわかつた。  
こいつただの無能力者じやない。

黒子の言う通りあんな事とても素人ができる代物ではない。

「何固まつてんだ？ 来ねエならこっちから行くぜ・・・！」

大和は走り出すと美琴との距離を詰める。聖人の力は一割程度も使つていながそれでも十分速い。

大和が動き出した事で我を取り戻した美琴は再び電撃を放つ。大和はそれを躱すと決闘前に黒子から借りた木刀を背中から引き抜く。美琴の横に到達すると大和は一気に木刀を振り抜いた。

(はつ、つまんねエなア 第三位も所詮この程度かよ)

大和は勝利を確信したがその確信は脆くも打ち崩される。パリッと電気が弾く音がしたのだ。その音を聞いた瞬間、大和は木刀を途中で止め直ぐに美琴の横から離れる。  
3メートル離れたところで大和は顔を上げた。

「へえーよく反応したわね あのまま打ち込んできたら木刀諸共黒コゲにしてあげたのに」

美琴はニヤリと笑いながら言つた。

「はーん、なるほどなア 最初からオレがテメエに接近すんのを狙つてた訳か」

「ええ、最初の電撃を避けたのを見て距離があるところから当てるのは難しいと思つたのよ だからアンタから接近してもひらりようこしたのよ」

そうは言つたものの美琴は内心焦つていた。最初の電撃にしてもまさかあんな避け方をされるとは思つていなかつたし大和の接近のスピードもかなり速かつた。普段ならこれしきの事で焦るような美琴ではないのだが今回は何か見えない力に縛め付けられている感じがするのだ。

(正面からの距離のある電撃は当たらない それなら・・・)

今度は動きながら電撃を放つ。直線ではなく四方八方からだ。逃げられるなら逃げられなくすればいい、美琴はそう考えたのだ。こうすれば必然的に逃げる場所は無くなるし、仮に逃げ切つたとしても無傷ではすまない。もちろん威力は調整してある。直撃しても悪くて氣絶する程度のものだ。

今度は美琴が勝利を確信した。

当然避けようとするだろう美琴は予想したが大和はした行動は全く別のものだった。

大和は避ける事なく少し遅れて美琴に突っ込んだのだ。

「残念でしたア～ テメエがそぐるのは予想済みなんだよオ！」

大和は美琴が次に四方を固めてくるだろうとあらかじめ予想していた。だからこそ3メートルぐらいという美琴にとつて遠過ぎず近過ぎない距離をとつたのだ。少し遅れて移動したのは四方を固める最

初の電撃が何処から来るか見る為だ。大体の予想は出来ていたがこればかりは大和も確信が持てなかつた。だから遅れて移動したのだ。完全に不意を突かれた美琴は身体のバランスを崩す。だがそれが功を奏して大和の木刀による突きは美琴の前髪を掠めるだけで済んだ。突きが外れたのを見て大和は再び美琴から距離をとつた。対する美琴はまだ地面に座り込んだままだ。

「アンタ、どうして……」

「何で四方八方から電撃がわかつたってかア～？闘いつてのはよオ常に相手の一一手三手先を読むのが基本だろオガ」

美琴は確信した、こいつには勝てないと。

いつもならまだまだ！と言つて決闘を続けるだろう。事実まだ攻め手は残つてゐるし通り名でもある超電磁砲（ヒューレット・ラング）も使つていない。手詰まりという訳ではないのだ。だが美琴は立ち上がる事が出来なかつた。自分と大和とは絶対的な差がある、実力も経験も全て。何時の間にか大和がレベル〇であるという事も忘れていた。

大和はゆっくりと美琴に近付く、ニヤリと口を歪ませながら。美琴は足が竦んで動く事が出来なかつた。大和は美琴の前まで来るとゆっくりと木刀を持つ右手を挙げた。

『大和さん！決闘は終了しましたの！直ぐに木刀を離して下さい！』

上で黒子が叫んでいるが大和は完全に無視する。そして挙げられた右手を一気に振り下ろした。

やられる！美琴は目をぎゅっと瞑つて木刀の一撃を待つた。しかし今まで経つても木刀が美琴に当たる事はなかつた。恐る恐る目を開けると振り下ろされた大和に右手に木刀はなく代わりに自分の直ぐ横に木刀が落ちていた。

大和はしゃがみ込むと美琴の頭にポンと手を置くと静かに言った。

「テメエはまだまだ強くなれる レベル5がゴールだなんて思うんじゃないエぞ」

そう言い残すと大和は闘技場を後にした。

黒子と初春は下に降りて来ると真っ先に美琴の元に駆け寄った。黒子は信じられなかつた。

美琴が負けた、それもレベル〇に。

レベル5に勝てるのは同じレベル5だけ、これは学園都市の一種の法則の様なものだ。レベル4の黒子でさえ美琴と正面からぶつかればまず勝てない、不意を突いても恐らく敗北するだろう。レベル5というのはこの学園都市においては絶対的存在なのだ。  
だが美琴はレベル〇にそれも圧倒的な敗北を喫した。

「お姉様…… 大丈夫ですか？」

黒子は恐る恐る美琴の顔を覗き込みながら言つ。美琴は人一倍負けず嫌いな性格だ。黒子が知る人物の中では誰よりも負けを嫌い、誰よりも諦めを知らない。その美琴が自ら敗北を認めたのだ。もしかしたら顔が涙でぐしゃぐしゃになつているかもしれない、敗北への悔しさと怒りで我を見失っているかもしれない、黒子はそう思った。だが覗き込んだ美琴の顔はそのどちらでもなく黒子の予想外のものだつた。

負けたといつにその顔は清々しく本当に負けたのかと聞きたくな  
る程だった。しかも若干ではあるが笑っている。

「お、お姉様……？」

「み、御坂さん……？」

美琴はようやく2人に気付いたのか2人の方を向くとニコッと笑い  
ながら言つ。

「黒子、初春さん心配やけてごめんね でも大丈夫よ

それを聞いて初春はホッとした表情をしたが黒子はポカーンといつ  
た表情をしている。

「黒子、どうしたのよ？ そんな顔して」

「いえ・・・ お姉様が負けたといつに一 つも悔じがる素振りを  
見せないもので・・・」

「ああ、なるほどね」

美琴は出口の方に顔を向けるとその理由を説明し始めた。

「もちろん悔しいわよ、だつて負けたんだもん でも何か違うの  
自分でもよくわからないんだけどね・・・ 悔しいのに悔しさが湧  
いてこないというか・・・ とにかく違うのよ それに・・・」

そこまできつと美琴は言葉を切った。そして清々しくいつに言つた。

「新しい目標もできたしね」

美琴は笑顔でそう言うと出口に向かって歩き始めた。黒子はまだよくわからないといった顔をしているが慌てて美琴の後を追つた。初春もそれに続く。

出口に向かいながら美琴はある事を考えていた。大和が最後に言ったあの言葉・・・。美琴にはあれが自分もレベル5だと言っているようを感じたのだ。

(神鬼大和・・・ 一体何者なの?)

新しい目標と疑問の一つを抱えながら美琴は闘技場を後にすることになった。

## お知らせとお願い

先日、感想で原作の設定と矛盾しているといつニコアンスの「指摘を頂きました。今後は極力原作の設定（能力や魔術の仕組み等）に合わせるつもりですが進行上原作の設定を勝手に変更する事も多々あるかもしれませんのがご理解お願ひします。

時系列については基本的には原作と全く違うものもあれば原作通りの部分もあるかと思ひます。「理解お願ひします。

文章の構成がいまいちな部分が多いかと思いますが初投稿という事で暖かい目で見てくれば幸いです。

本作に対するご意見やご指摘、質問や改善点は感想にしてお願ひします。作者としてもより良い作品にしたいので遠慮なくお願ひします。

最後になりましたがこんな駄作をここまで読んで下さってありがとうございます。作者としてもより良い作品にしていくよつて努力していくきますので今後ともどうかよろしくお願ひします。

## 垣根の友達

学園都市にそびえ立つとある高層ビルの屋上からスタイルは双眼鏡で闘技場から出てきた大和を観察していた。

「禁書目録に同伴していた少年の身元を探りました・・・彼女は？」

後ろから聞こえてきた女性の声に振り返る事なくスタイルは答える。「生きているよ 誰が治療したのかはわからないけどね・・・」

女性は終始無言だったがその顔は誰も死ななかつた事に安堵しているようだ。

「それで、神裂。アレは一体何だ？」

「それですか、少年の情報は特に集まつてはいません。少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、という事になるでしょう」

「それはあの奇妙な右手のアレかい？それとも僕を殴り飛ばした方が？」

「・・・両方ともです。」

「ハッ、何だ？もしかしてアレ等がダダの普通の少年だとでも言つのかい？」

スタイルは口に咥えていたタバコを吐き捨てる。

「やめてくれよ。僕はこれでも自分の魔術にそれなりの自信を持っている。それを訳のわからない力で木つ端微塵にしたヤツがダダの普通の少年？冗談としたらかなりタチが悪いよ。」

神裂は何も言えなかつた。

最初に対峙した当麻もかなり特殊な右手を持っていたがそれ以外は素人。何か右手以外に特殊な力を持つている訳でも、魔術の知識がある訳でもない。普通の高校生だ。

しかし、2人目の少年、大和は違つた。

3000度の炎に焼かれても何事もなかつたかの様にあしらい、何やら特殊な力で魔女狩りの王インケンティウスを撃破し、スタイルを殴り飛ばした。それ以上に一人が驚いていたのは学園都市の人間でありながら魔術の存在を知つていた事だ。それもちょっと知つてている程度のものではない。

二人が警戒しているのは当麻ではなく大和の方だった。

「神裂、あの男は本当にどこの組織の者ではないのか？」

「ええ、それは間違いないと思います。何よりあれ程の魔術師なら必ず何か情報がある筈です。」

神裂の言葉を聞くとスタイルは呟く様に神裂に聞く。

「神裂・・・君はアレが魔術師だと思つか？」

「私も同じ事を考えていました。魔女狩りの王インケンティウスを消したあの力・・・私には魔術には感じませんでした。」

「僕も同意見だよ。もしもアレが魔術なら一人とも気付く筈だ。だ

が、二人とも魔術とは感じなかつた。」

「やはり彼は魔術師ではないと……？」

「それはまだわからないよ。単に魔術を使わなかつただけかもしない。もしそうならばかなり異常な存在だけね。」

この街の人間ならば魔術師ではない。本来なら何の疑いもなくそう結論づける筈だ。だが彼は魔術の存在を知つてゐる。その事実が本來ない可能性を浮上させる。

スタイルが双眼鏡を覗くと大和がこちらをジッと見ていた、ニヤリと口元を歪ませながら。

「ツー？・・・こたらに気付いている。」

「スタイル、場所を変えましょ！」

神裂がそう言つと二人はビルの屋上から移動する。

（なあ～んか視線を感じると思つたら昨日のヤツか・・・）

隣に見られない女がいたが大和は気にする事なく再び歩き始めるのであつた。

「ああ～？それはどうこう事だ！！」

『スクール』のアジトで電話に向かつて怒鳴り散らしているのはそのスクールのリーダーである垣根帝督。

『スクール』とは学園都市の暗部の一つ。上層部から様々な仕事を請け負つており、その内容は要人の護衛や機密情報の管理、さらには破壊活動や殺しといった過激なものなど多岐にわたる。

「言つた通りだ。これ以上『神鬼大和』のことを調べるな」

電話越しに垣根にそう言つるのは通称『電話の男』

顔も名前も知らず仕事の際に電話で内容だけを伝える事からそう呼んでいる。

「ふざけんじやねえぞ！誰がそんな事・・・」

「これは私からではなく統括理事会からの命令だ。」

「統括理事会からだと・・・？」

統括理事会が動いたという事は学園都市の機密に触れる可能性があるからだ。それもスクールのリーダーである垣根ですら触れる事が許されない程の。

「これ以上動けば君とはいえダダでは済まなくなるぞ

「ハツ、笑わせやがる。俺は学園都市の第一位だ。統括理事会の連中が何しようと俺には通用しねえよ」

「そうだな、君には通用しないかもれない。だが君の周りの人間はどうなる？」「

「ああ？」

「君を始末しようとするならそれこそ第一位でも連れて来ないと無理だ。だが君の周りの人間、友人や知人、スクールの他の構成員はどうだ？学園都市の巨大な闇を相手にして勝つ事ができる者ばかりか？」

垣根は答える事が出来なかつた。答えなど決まつてゐる。否、勝てる筈がない。全員が全員と言う訳ではないだらうが大半が殺されてしまつだらう。

「統括理事会の連中だつて馬鹿ではない。君と正面からぶつかる事が如何に無謀な事かぐらいわかつてゐる。ならば君の周りから削つていくに決まつてゐる。」

まさしくその通りだ。連中は目的のためなら手段を選ばない。それは暗部に所属してゐる垣根もよくわかつてゐる。関係のない人の命を奪う事など何の抵抗もないだらう。

「垣根帝督、君は確かに神鬼大和とは親友の関係だつたな？」

言葉が出ない垣根に『電話の男』が尋ねた。

「そうだ・・・。あいつは俺のかけがえのない親友の一人だ」

「・・・もし君がどうしても彼の事が知りたいと思うのなら今夜0時に第十七学区の操車場に来るがいい」

『電話の男』はそう言つと一方的に電話を切つてしまつた。携帯を

ポケットに仕舞うと垣根はゆっくりとソファーに座る。

今夜0時に第十七学区の操車場。人が寝静まつてゐるであろう時間に人通りの少ない場所・・・如何にも罷ですと言わん感じだ。だが垣根は罷だろうが何だろうが何でもよかつた。少しでも大和の、親友の事が知れる可能性があるならそれに賭けてみようと思つたからだ。

(最悪その場で戦闘になるかもしれねえな・・・)

学園都市の第一位である垣根相手にまともに戦闘をするなら第一位でも連れて来なければ話にならない。同じレベル5でも第三位以下とは絶対的な差があるので。だが相手は良くも悪くも頭の切れる統括理事会、連中も最初から垣根相手に正面からぶつかる事など考えていいだろ?。どんな卑劣な手を使ってくるかわかつたもんじやない。

(誰か人質に取るかもしれねえな・・・。そうなると流石に俺一人じやきついな)

垣根は携帯を取り出すと誰かに電話を掛け始めた。

(あいつを巻き込むのは正直気が引けるが・・・。いつも時に頼りになるのはあいつしかいねえからな)

しばらくすると電話の向こうから応答があつた。

「俺だ、垣根だ。今大丈夫か?」

『言われなくてもアンタだつてのはわかってるよ。で、どうしたの?』

声からして女性だろう。後ろから誰かの声が聞こえる。誰かと一緒にいるのだろうか。垣根は話を続ける。

「今誰かと一緒にいるのか?」

『今はあいつ等とファミレスにいるんだけど』

「ファミレスって事は会議中か?」

『まあそんな感じ。用件は何?一応会議中だから早くして欲しいんだけど』

『お前にちいと頼みがある。電話じゃあ話せねえ内容だから今から俺もそっちに行つていいか?』

『別に構わないわよ。あんたなら大歓迎よ』

「嬉しい事言つてくれんじゃねえか。じゃあ今から向かう」と垣根は電話を切り、玄関へと向かつた。

(能力もそうだが・・・やっぱり持つべきものは友だな)

靴を履きながらニヤリと笑うと垣根はファミレスへと向かつた。

垣根の自宅から田的池のファミレスまではかなり近い。歩いても5分ぐらいの距離だ。基本的に自炊をしない垣根は朝晩三食とも外食で済ます事が多い。今住んでいる家もファミレスに近いからとう理由で選んだのだ。

目的地に到着するといつも通りに店のドアを開く。垣根の来店に気付いたウェイトレスがこちらに近づいて来た。

「いらっしゃいませ・・・あつ、垣根さん！」

「よお、相変わらず元気な挨拶だな」

「」の常連客である垣根は店の店員全員に顔が知られている。垣根自身も店員全員の顔と名前は把握しているし客と店員の枠を越えてかなり仲のいい関係だ。店側としても売り上げに貢献してくれる大切な常連客以上の存在になっている。余談ではあるがその端正な顔立ちと第一位としてのネームバリューからこの隠れたマスコットになっている。

「あいつ等はいつもの席か？」

「はい、彼女たちなりいつもこの席にいますよ。垣根さんの席も用意しますのでー！」

「相変わらず気の利く店だなあ。サンキュー」

ウエイトレスに礼を言つと垣根は通称『垣根シート』と呼ばれる席に向かう。

『垣根シート』と呼ばれている席はファミレスには珍しい完全個室の席の事だ。暗部の会議やプライベートの約束などによく垣根が利用する事だ。

用しており、店側も垣根が常連客という事もあって半ば垣根専用といった感じにしている。

個室のドアの前に立つと垣根はドアを開く。中には既に4人の先客がいた。

ファミレスだといふのにどこから持ち込んだのかシャケ弁を豪快に開けているのは麦野沈利、こう見ても垣根と同じレベル5で序列は第四位。その麦野の隣で缶詰め相手に絶賛格闘中なのは頭に被つたベレー帽が印象的な少女、フレンダ。起きているのか寝ているのかわからない虚ろな目で垣根を見つめているピンクのジャージの少女は滝壺理后。滝壺の隣に座る金髪にピアスと如何にもチンピラらしい格好をしている少年は浜面仕上。

ファミレスという場に明らかに似つかわしくない雰囲気を醸し出している4人はみな垣根が所属するスクールと同じ学園都市の暗部『アイテム』の構成員だ。

「あら、早いのね垣根。もう少し掛かると思つてたんだけど」

「家がすぐそこだからな。つーか相変わらずファミレスでシャケ弁に缶詰めかよ・・・迷惑な密この上ねえな」

半ば呆れながら垣根は呟つ。

「店の料理だつてちゃんと頼んでんだから問題ないでしょ。」

「そういう問題じゃねえだろ・・・」

この一人の持ち込みは今に始まつた事ではない。これ以上は無駄と判断した垣根はとりあえずドリンクバーを頼んだ。

「で、頼みつて何？垣根」

シャケ弁を食べる手を止めて麦野は本題へと切り出す。それに運動するかの様にフレンダも缶詰めとの格闘を中断し、窓の外を見ていた浜面も垣根の方を向く。滝壺は寝ているのだろうか完全に頭が机にひれ伏していた。滝壺がこの状態なのはいつもの事だ、それを知っている垣根は気にする事なく話を切り出す。

「単刀直入に言つと裏関連の頼みだ。それを承知で聞いてくれ」

「垣根が裏の話を持ち込んで来るなんて珍しいな」

「結局、浜面の言つ通りって訳よ。大概は私たちが協力して貰っているのに」

「確かにあんたが私たちに協力を扇ぐだなんて珍しいわね。かなりヤバい仕事なのかしら？」

滝壺を除く三人が言う通りプライベート関連はともかく、裏の仕事に関して垣根が他人に協力を扇ぐ事は滅多にない、と言うよりも協力を扇ぐ必要がないのだ。学園都市の第一位である垣根は殆どの仕事を一人でこなしてしまった。もちろん垣根個人ではなくスクールとして仕事を請け負っているのだが他のメンバーは準備や下調べといった仕事がメインで直接仕事を完遂しているのは垣根一人である事が殆どだ。そんな垣根がアイテムに協力してくれと言つているのだ。麦野は垣根一人では手に負えない仕事なのかと麦野は思ったのだ。

「いや、そういう訳じゃねえよ。実は今夜〇時に第十七学区の操車場である人物と会う約束してんだよ。だけど相手の名前も顔も何

にも知らねえもんだからさあ罠だつて可能性があんだよ

「なるほどね、でもあんたならどんな罠でも関係ないんじやない？  
それにはあんた相手に罠仕掛けられるのなんて第一位ぐらいでしょ？」

垣根は第三位の様に学園都市の罠を知らないお子様でもなければ第七位の様に脳みそまで筋肉で出来るかもしない様な根性バカでもない。能力のレベルの高さが頭の良さに比例する学園都市において垣根はこの街で一番目にスペックの高い頭脳の持ち主だ。その垣根を罠に嵌めるとなれば垣根以上頭の切れる者を準備する必要がある。仮に罠に嵌めたとしても垣根なら無理矢理打開してしまうだろう。

「相手はおそらく統括理事会に関係するやつなんだよ。あいつ等ならどんな汚ねえ手を使つてくるわかんねえだろ？もしかしたら人質でも取るかもしれない。そうなればさすがに俺一人じゃきついんだよ」

「ああ、大まかに言えばそういう事だ」「俺たちがお前を援護する、こういう事か？」

浜面の質問に答えると垣根はメロンソーダーに手を伸ばす。フレンダと浜面は垣根の話に納得している様子だが麦野だけは下を向きながら眉をひそめていた。

「麦野のどうしたの？何か深刻な顔して」

気になつたフレンダが麦野を見ながら尋ねる。フレンダに声を掛け

られた麦野は顔を上げると垣根の顔を見ながら言つ。

「垣根・・・あんたまだ話すべき事があるだろ?」

「・・・・」

垣根は口を開けたまま何も言わない。

「おこ麦野、どうこう事だよ?」

麦野が何を言つてゐるのかイマイチわからない浜面は麦野に尋ねる。フレンダも浜面と同じくといった表情をしてゐる。

「あんたたち相手が垣根だから何も思わないんだろ? 何かおかしいと思わない?」

「結局どういづ説よ?」

「考へてもみなさいよ。どうして人に会うだけでこんなに警戒してゐるのよ? いくら統括理事会関係の人間でもそこまでする必要ないでしょ。それに人質の可能性まで考へて、どう見ても普通じゃないわ」

麦野はそこで一寸言葉を切る。そしてまたすぐ話し始める。

「垣根、あんたには山ほど借りがあるし私だってあなたの頼みは断りたくない。でも私はアイテムのリーダーで仲間を守る義務がある。だからちゃんと全部話してくれないとあなたの頼みを受ける事は出来ない」

通常、暗部には仲間意識など不要なものと言われている。暗部に必要なのは生温い仲間意識などではなく何があつても、たとえ仲間を殺す事があつても必ず仕事を完遂する使命感が必要だと言われているが麦野はそうは思っていない。

麦野にとつて大切なのは仲間の命だ。それを守るためなら仕事なんかすぐに捨てるし学園都市と対立する覚悟だつて出来ている。もちろん垣根も麦野のと同じ考え方の持ち主だ。彼もまた仕事の完遂よりも仲間の命に比重をおいている。だからこそ麦野の言つた事はよくわかっている。

「・・・そりだな。やっぱり全て話さねえとダメだよな」

そう言つと垣根はゆつくりと今回の件の詳細を話し始めた。

「お前等、『学園都市の最終兵器』ファイナルウエポン つて知つてるか?」

「何よそれ?フレンダ、浜面あんた達知つてる?」

聞いた事もない名称が垣根の口から出たので麦野は一人に尋ねた。だが二人共知らない様で首を横に振った。

「ある人物を調べている中で唯一掴んだ手掛けがこれだ。これ以外は何を調べてもヒットしねえんだ」

「第一位の垣根が調べても手掛けがこれだけだつたのか?」

浜面は驚いた。第二位、それも暗部ともなれば大概の事は調べられる筈だし学園都市の闇にもそれなりに深く潜れる筈だ。そんな垣根が調べても手掛けがたつた一つしか出ない人物つて一体誰何だ?と浜面は思う。

「その調べてる人物ってのは誰なの？裏の人間？」

「氣になつた麦野が垣根に尋ねる。

「神鬼大和つていつてな、俺の親友なんだよ」

「あんた自分の親友の事調べて何する氣よ？弱みでも握るつもりなの？」

麦野は若干引きながら垣根に尋ねるが垣根は間髪入れずにそれを否定する。

「違うに決まつてんだろ！話しさ最後まで聞け！…でそいつは一応書庫にはレベル〇つて載つてんだけど最近どうもそれが怪しく感じるんだよ」

「書庫パンクにそう載つているならレベル〇だ。わざわざ嘘載せる必要なんかないじやないか」

「俺も最初はそう思つてたんだけどな…。今になつて考えてみたらあいつがレベル〇とは思えねえんだよ」

「結局、何か疑う理由もあるの？」

「いくつかあるんだが一番気になるのはあいつの雰囲氣だ。レベル5としての俺の直感があいつから同じレベル5の感じがするんだ。それだけじゃねえ、俺と同じ裏の人間の匂いもする。それも俺以上に深い闇の匂いがな」

「でもそれはあんたの直感でしょ？確証がある訳でもないし勘違いつて可能性もある」

そうは言つたが麦野はあながち否定出来ない部分もある。暗部の人間というのは暗部関係の人間なら直感でわかる事も少くないからだ。麦野も例外ではない。

「確証ならあるぜ。さつき会う約束のやつから電話があつてな、そいつから統括理事会直々の警告があつたみてえだ」

「・・・なるほどね。確かにそれはかなり臭いわね。その大和つてやつには統括理事会が動く程何か秘密があるの確かね」

統括理事会が一個人のために動く事など滅多にない。彼等が動くという事は学園都市の機密に近い事に触れる可能性があるからだ。

「・・・それってかなりヤバい事じゃない？」

フレンダがポツリと呟いた。隣の浜面も同感だと言わんばかりに頷く。

「それで話す事は全部だ。相手は最悪統括理事会の連中、どうなるかわからねえ。だから麦野、断わるなら別に構わねえ。俺一人でなんとかする」

麦野は直ぐには返事を返さなかつた。もしかしたら統括理事会と対立する原因になつてゐる依頼だ、アイテムのリーダーとしても安請けは出来ないのである。しばらく重苦しい沈黙が続き、ようやく麦野が口を開く。

「水臭い事言つてんじゃないわよ垣根。言つたでしょ？あんたには山ほど借りがあるって、恩を仇で返す程私たちアイテムは根性曲がつてないわよ」

「・・・いいのか？最悪連中と対立するかもしけねえんだぞ？」

「大丈夫よ。理由は言えないけど連中は私たちには手は出せないのよ」

そう言つと麦野はフレンダと浜面を見る。

「そういう訳だ垣根。是非俺たちも協力をさせてくれよー！」

「結局や、垣根の頼みは断れない訳よ」

「その通りだよ、かきね」

何時の間に起きていたのか滝壺も麦野に同意する。全員の目には確かに決意と垣根を助けたいという想いが秘められていた。

「お前等・・・ありがとよ」

垣根は少し頭を下げて礼を言った。

やっぱり何よりも大切なのは友達だ、垣根は改めてそう思つのだつた。

## 特別編 2 置き去り

柵川中学の入学式を一日後に控えた日の朝、大和はある場所に来ていた。

置き去り（チャイルドエラー）保育施設

大和はここで育ち、学園都市最強の能力者となつた。

置き去り（チャイルドエラー）として育てられた大和だが本当は置き去り（チャイルドエラー）ではない。学園都市の外には自分を産み、育ててくれた両親はちゃんと存在している。大和が学園都市に来たのは四歳の時だ。生まれつき左右の瞳の色が違い、さらには聖人の力をも宿す大和を周りの人間は『化け物』と言つて彼を恐れた。だが大和の両親だけは彼を愛し、精一杯の愛情を注ぎ育てた。

だがそんな大和に転機が訪れる。偶々外に来ていた学園都市の研究者が大和の聖人の力を能力者としての才能と思い、大和に目を付けたのだ。

原石

『開発』を行なう事なく生まれつき能力を発現出来る者を学園都市ではそう呼んでいる。

研究者は大和の聖人の力を原石だと思ったのだ。

研究者は大和の両親に学園都市に大和を送り出すよう説得した。科学の頂点に君臨する学園都市なら大和の特異な能力や左右色の違う瞳の原因もわかるかもしれない。

だが大和の両親はそれに応じる事はなかつた。自分達の愛する息子をそんな不得体の知れない所なんかに送り出しあはなかつたのだ。

研究者は何度も何度も大和の両親を説得したが結果は何時も同じだった。

研究者は何としても大和を学園都市へと連れて行きたかつた。仮に大和が原石ならば原石の研究者として確固たる地位と名声を得る事が出来る。天然のダイヤモンドに近い原石はそれだけの魅力があつた。

た。

出世欲に目が眩んだ研究者は大和を誘拐した。欲に支配された研究者は善悪の区別が出来る程の理性はもうなかつた。学園都市にさえ入れてしまえばもう外からは手出し出来ない、研究者の思惑通りに事は運んだかに見えた。

だがその研究者以上に大和に注目している人物がいた。学園都市統括理事会理事長アレイスター＝クロウリーだ。彼は大和の聖人の力を見抜き、さらには能力者としての才能すらも見抜いていた。この時からアレイスターは大和を将来学園都市の頂点に君臨する者、自身の右腕とする事を計画していたのだ。

そのためには聖人の力を原石などと勘違いしている研究者の手から大和を引き離さなければならない、統括理事会の直轄として育てる必要があると考えた。

アレイスターは暗部に大和を学園都市に誘拐してきた研究者を研究所諸共始末した。目的のためなら手段を選ばない、それがアレイスターという生物なのだ。

（今思えばオレは誘拐されてここに来たんだったよな・・・）

大和は昔を思い出しながら施設の前に立つ。今日ここに来たのは仕事とは言えど中学に入学する事になつたので世話になつたここの中育士に一応挨拶をしこうと思つたからだ。

門をくぐるため歩こうとしたが大和は直ぐに足を止めた。中から子供達の楽しそうな笑い声が聞こえてきたからだ。

大和は裏の人間だ、それもそこの頂点に君臨する。殺した人の数も何人かわからない、多分軽く三桁は越えているだろう。そんな自分が今更どんな顔をして挨拶でもしようというのか。会わせる顔などある筈がない。

（ハツ、何柄でもねエ事やつてんだか。入学つていつても所詮は仕事だからじやねエかよ）

そう思つた大和は自宅に帰るため後ろを向いて歩き始めた。

「もしかして・・・大和君？」

後ろから自分の名前を呼ぶ声が聞こえたので大和は再び門の方を向く。

「やっぱり大和君だ！私の事覚えてる？」

もちろん覚えている、忘れる筈がない。大和を自分の子供の様に愛情を持つて育てくれた。大和が学園都市で信用する数少ない存在、九条 静音がそこにはいた。

「すごいなあ～大和君は。飛び級で中学に進学するなんて！」

大和は門の前で偶々会つた保育士、九条静音と二人で施設のとある一室にいた。自宅に帰ろうとしていた大和を半ば無理矢理に中に入れたのだ。

「それにしてもほんと久しぶりね！しばらく見ない内に随分と大きくなつたわね！」

「三年もありやあテカくもなるつての。アンタはちつとも変わつてねエなア」

九条は大和がこの施設にいた時、大和の担当だつた保育士だ。身長170センチ越えと女性としては高く、スタイルもよくモデル体型の彼女はとても保育士には見えない。九条と会うのはかれこれ三年振りだがその美は全く変わらない。寧ろさらに美人になつた印象すら受けれる。

「大和君今日はどうしてここに来たの？」

「明日が入学式だからな、一応挨拶だけでもしようと思ったんだよ」

「なるほどね」

「先生こそ何でスーツなんぞ着てんだ？ 何時からここにはスーツ着用になつたんだよ」

「ああこれね。実は私、今日でここ辞めるの」

「あア？ 辞める？ そいつはまた急だなア。何かあつたのかよ？」

何時もの大和ならこんな事は聞かないだろう。基本的に他人が何をしようがどうなろうが自分に害が及ばないなら気にしないのが大和だ。だがそんな大和でも恩師である九条の事はやはり気になつた。

「常盤台の寮監補佐になるの。駄目もとで応募してみたら受かっちゃつた」

満面笑みで九条は答えた。九条の夢も確かに常盤台の寮監になる事だつたような気がする。理由までは知らないが。

「常盤台の寮監か・・・。クソ面倒くせHんじやねエの？」

「確かに大変みたいだけどそれだけやりがいのある仕事だと私は思うの」

まっすぐな目で大和を見つめながら九条は言つ。

変わらねエな・・・この目も。

大和は九条の目を見て思つた。自分には決して出来ない目だ。これだけ人をまっすぐに見る事など。

「・・・大和君、この三年間何があつたの?」

九条は突然暗い顔をして大和に尋ねる。急な質問に大和も若干狼狽える。

「あア?..どういう意味だそりや?」

「何か大和君雰囲気が変わつたし私の目から背けてるといつか逃げてる感じがするの」

大和は九条の言葉の意味が理解出来なかつた。  
逃げてる? オレが? どうして逃げる必要などある?

「あつ」めん、気にしないで! ちょっと気になつただけだから

九条が慌てて言つた。

「つたく意味わかんねエ事言つてんじやねエよ」

出来るだけ平素を装い大和は言つ。そして椅子から立ち上ると部

屋の出口に向かつた。

「オレそろそろ帰るわ。挨拶しよオと思つたけどみんな忙しいみて  
エだしな」

そう言い残すと大和は部屋着から出て行つてしまつた。

九条は大和に何か言おうとしたが何も言えなかつた。部屋を出る大和の背中がまるで自分を拒絶しているかの様に見えたからだ。

「大和君・・・」

九条はただそう呟く事しか出来なかつた。

自宅への帰路の途中、大和は先程九条に言われた事を思い出していた。

(逃げてゐるいるか・・・。確かにそうかもしけねエな)

実際大和は九条から逃げていた。別に自分は暗部の人間だから表の住人である九条に関わる訳にはいかないといったたいそれた理由だからではない。単に怖いのだ、自分が九条の様な光に憧れを持つ事が。大和の様な裏の人間は一度でも表に憧れを持てばそれで終わりだ。例えその憧れを消したとしてもまた直ぐに蘇る。だからこそ大和は九条から逃げた。

(結局オレはまだまだ弱エのかもな・・・)

一人そう思つ大和であつた。

大和は昔を思い出しながら施設の前に立つ。今日ここに来たのは仕事とは言え、中学生になつたので世話になつたこの保育士に一応挨拶をしこうと思つたからだ。

門をくぐるため歩こうとしたが大和は直ぐに足を止めた。中から子供達の楽しそうな笑い声が聞こえてきたからだ。

大和は裏の人間だ、それもその頂点に君臨する。殺した人の数も何人かわからない、多分軽く三桁は越えているだろう。そんな自分が今更どんな顔をして挨拶でもしようというのか。会わせる顔などある筈がない。

(ハツ、何柄でもねエ事やつてんだか。入学つていっても所詮は仕事だからじやねエかよ)

そう思つた大和は自宅に帰るために後ろを向いて歩き始めた。

「もしかして・・・大和君?」

後ろから自分の名前を呼ぶ声が聞こえたので大和は再び門の方を向く。

「やつぱり大和君だ!私の事覚えてる?」

もちろん覚えている、忘れる筈がない。大和を自分の子供の様に愛情を持つて育ってくれた。大和が学園都市で信用する数少ない存在、  
九条 静音がそこにはいた。

「すごいなあ～大和君は。飛び級で中学に進学するなんて！」

大和は門の前で偶々会つた保育士、九条静音と一人で施設のとある一室にいた。自宅に帰ろうとしていた大和を半ば無理矢理に中に入れたのだ。

「それにしてもほんと久しぶりね！しばらく見ない内に随分と大きくなつたわね！」

「三年もありやあテカくもなるつての。アンタはちつとも変わつてねエなア」

九条は大和がこの施設にいた時、大和の担当だつた保育士だ。身長170センチ越えと女性としては高く、スタイルもよくモデル体型の彼女はとても保育士には見えない。九条と会うのはかれこれ三年振りだがその美は全く変わらない。寧ろさらに美人になつた印象すら受ける。

「大和君今日はどうしてここに来たの？」

「明日が入学式だからな、一応挨拶だけでもしようと思つたんだよ

「なるほどね」

「先生こそ何でスーツなんぞ着てんだ？何時からこりにはスーツ着用

になつたんだよ」

「ああこれね。実は私、今日でここ辞めるの」

「あア？ 辞める？ そいつはまた急だなア。何かあつたのかよ？」

何時もの大和ならこんな事は聞かないだろう。基本的に他人が何をしようがどうなるうが自分に害が及ばないなら気にしないのが大和だ。だがそんな大和でも恩師である九条の事はやはり気になつた。

「常盤台の寮監補佐になるの。駄目もとで応募してみたら受かつちやつた」

満面笑みで九条は答えた。九条の夢も確かに常盤台の寮監になる事だつたような気がする。理由までは知らないが。

「常盤台の寮監か・・・。クソ面倒くせエんじやねエの？」

「確かに大変みたいだけどそれだけやりがいのある仕事だと私は思うの」

まつすぐな目で大和を見つめながら九条は言つ。

変わらねエな・・・この目も。

大和は九条の目を見て思つた。自分には決して出来ない目だ。これだけ人をまつすぐに見る事など。

「・・・大和君、この三年間何があつたの？」

九条は突然暗い顔をして大和に尋ねる。急な質問に大和も若干狼狽える。

「あア？…どういう意味だそりや？」

「何か大和君雰囲気が変わったし私の目から背けてるというか逃げてる感じがするの」

大和は九条の言葉の意味が理解出来なかつた。

逃げてる？オレが？どうして逃げる必要などある？

「あつごめん、気にしないで！ちょっとと氣になつただけだから」

九条が慌てて言つた。

「つたく意味わかんねエ事言つてんじやねエよ」

出来るだけ平素を装い大和は言つ。そして椅子から立ち上ると部屋の出口に向かつた。

「オレそろそろ帰るわ。挨拶しよオと思つたけどみんな忙しいみてエだしな」

そう言い残すと大和は部屋着から出て行つてしまつた。

九条は大和に何か言おうとしたが何も言えなかつた。部屋を出る大和の背中がまるで自分を拒絶しているかの様に見えたからだ。

「大和君・・・」

九条はただそう呟く事しか出来なかつた。

自宅への帰路の途中、大和は先程九条に言われた事を思い出していた。

(逃げてゐるいるか・・・。確かにそうかもしけねエな)

実際大和は九条から逃げていた。別に自分は暗部の人間だから表の住人である九条に関わる訳にはいかないといったたいその理由だからではない。単に怖いのだ、自分が九条の様な光に憧れを持つ事が。大和の様な裏の人間は一度でも表に憧れを持てばそれで終わりだ。例えその憧れを消したとしてもまた直ぐに蘇る。だからこそ大和は九条から逃げた。

(結局オレはまだまだ弱エのかもな・・・)

一人そう思う大和であつた。

## 午前〇時の対談

学園都市といえど夜は寝る時間という事は『外』と変わらない。特に人口のほとんどが学生である学園都市は『外』以上にそれが顕著に表れる。

現在の時間、午後1時55分。多くの学生は就寝しているであろう時間に人気のない操車場に一人の青年が立っていた。学園都市の第二位、『未元物質』（ダークマター）を操る垣根帝督だ。彼はここである人物と会う約束をしている。約束の〇時まで後5分と迫った垣根は服の下にある隠しマイクのスイッチを入れた。

「俺だ。聞こえてるか？」

『あー大丈夫、ちゃんと聞こえてるよ』

垣根の声に応答したのは学園都市の暗部の一つ『アイテム』のリーダー麦野沈利。もしもの場合に備えて『アイテム』のメンバーには今垣根がいる場所から少し離れたところで待機してもらっている。

「俺が指示するまで待機しててくれ。出来るだけ面倒事は避けたい」

『りょーかい』

麦野からの応答を聞いた垣根は隠しマイクのスイッチを切り替えた。これでこちら側からしか音声の送信出来なくなり麦野たちの声が届く事はない。

(さてと、これで準備は完璧だ。後は野郎が現れるのを待つだけだ)

垣根は腕時計で時間を確認する。現在の時間、午後11時58分。

約束の時間まで後2分だ。

そろそろかと垣根が思つたのとほぼ同時に地面の砂利を踏む音が聞こえた。

音は垣根の後ろから聞こえどんどん近づいて来ている。垣根は一気に警戒心を高める。やがて音は止み、暗闇から誰かの足だけが見えた。

「つむ、約束の時間まで後1分か・・・。少し早く来てしまったかな」

「早くなんかねえよ。5分前行動を心掛けまして学校で習わなかつたのか？」

「残念ながら私は君と違つて学校には通つていらないものでね」

「そおかよ。わざわざ顔見せたらどうだ？正直かなり気持ち悪いぜ。声だけ聞こえるのつて」

「そうだな、時間も来た事だ」

足しか確認出来なかつた身体がどんどんと月明りに照らされ確認出来るようになつてくる。

真つ黒なスーツに真つ黒なサングラスとの暗闇に同化してしまいそうな服装の男が現れた。

「はじめまして垣根帝督。顔を会わせるのはお互い初めてかな

「まさか『電話の男』がこんなに若いやつとは思わなかつたぜ。もつとジジイみてぇなやつかと思つたが」

『電話の男』は垣根の予想を遙かに上回る程若かつた。年齢はおそらく一十歳前後だろうか。それよりも垣根が驚いたのは『電話の男』自らここに来た事だ。てっきり誰か代理に送るものだと思っていたが。

「それで神鬼大和の何が知りたい？」

「てめえの知つてる事全て教える。返事はイエスしか認めねえ」

「法外な注文だな。私には見返りはなししかな？」

やはりそつくるか・・・。駄目もとで言つてみたがやはりタダでは動くつもりはないようだ。

「・・・何が望みだ？」

「そうだな、残念ながら今ところは何もないよ。来るべき時がければ私の命令に従う、これでどうかね？」

「いいだろ？」「

垣根としても断るつもりなど毛頭なかつたので直ぐに返事をした。

『電話の男』はよしよしと言つて口元を歪ませている。

「さて、本題に戻らうか。君の質問に私が答えるといつた形でいいかな？」

垣根もそちらの方がよかつたので直ぐに承諾した。

「じゃあ最初の質問だ。神鬼大和、あいつは一体何だ?」

「彼は学園都市最強の能力者、この街の闇の頂点に君臨するアレイスターの右腕、と言えばいいのかな」

「何だと・・・!?

垣根は信じられなかつた。あの大和が学園都市最強の能力者?この街の闇の頂点に君臨している?

最初の質問で垣根は早くも混乱しそうになる。

「驚くのも無理はないさ。なにせ彼の存在は統括理事会ですら一部の者しか知り得ない最高機密だからね」

「最強って事はレベル5か!? だけどあいつはいつも能力診断はレベル0だつたぞ!」

「それぐらいの事統括理事会ならば幾らでも改ざん出来るさ。彼は学園都市が総出で隠そうとしている能力者だ。システムスキャン能力診断はもちろん、バック書庫を含め彼の情報は全て改ざん、隠蔽されていると言つても過言ではない」

確かに今思えばそうだ。大和に関してはレベル0な筈なのに圧倒的に情報が少ない。レベル5というのも薄々勘付いてはいたがやはり面と向つて言わると信じられない。

「じゃあ何故そこまでして大和の事を伏せるー最強のレベル5なら公表しても問題ないだろ!」

レベル5という存在は言わば学園都市の看板の様な役割も担つてい

る。本人はそんな気がなくともレベル5というネームバリューは至るところで利用出来るのだ。最強の能力者ならばなおのこと公表する筈なのだが。

「彼はただの能力者ではないからだ。彼はこの世界のバランス、科学と魔術のバランスを根底から覆しかねない力を持つ者だからだよ。君も魔術に関しては少しながら触れている筈だが？」

（あのチビシスターの事か？まさか魔術なんてもん本当にあるとでも言つのか？）

垣根は魔術の事など信じていらない。あのチビシスターにしても頭の狂ったガキとしか認識していなかつた。この話を聞くまでは。あの時の大和の対応、垣根や当麻がポカーンとしてる中大和だけは冷静だつた。それに魔術の存在を匂わせる発言もしていた。ならば大和は魔術師とでも言つのか。

「君は今神鬼大和が魔術師ではないかと思つてていると思うがそれに関しては不明だ。本来能力者には魔術は使用できない筈なのだが彼の場合は例外なのかもしれない。はつきりしているのは彼が現時点で既に何かしらの魔術的力を保有している可能性が高いという事だ」

垣根は訳がわからなかつた。親友がまさかそんなところにいるなんて予想にもしていなかつたからだ。

「大和は闇の頂点に君臨してゐるって言つたな・・・。あいつはどこに所属している？」

「彼はどこにも所属などていないよ。彼はどんな大きな仕事も全て一人でこなす。どうやら仲間などただのお荷物と考えているよう

だ

「・・・・・」

垣根は言葉が出なかつた。聞きたい事はまだまだある、だが口を開く事が出来なかつた。これ以上聞けば親友が大和がどこか遠いところに行つてしまつ、そう思つたからだ。

「その様子ではどうやら聞きたくなかった事まで聞いてしまつたようだね。これ以上は時間の無駄みたいだな」

未だ無言の垣根に背を向けると『電話の男』は暗闇に向かつて歩き始めた。垣根はただその背中を見ている事しか出来なかつた。

垣根が『電話の男』と対談する少し前、大和は『窓のないビル』でアレイスターと会っていた。アレイスターから大和に突然の呼び出しがはいったのだ。アレイスターからの突然の呼び出しは何時もの事なのでたいして気にする事なく来たのだが……。

「おいテメエ、今何て言つた?」

「どうやら統括理事会の一人が第一位に君の正体をばらすよつだ」

「なんだと……！」

大和の正体は学園都市のトップシークレットに匹敵する事だ。仮にそれを他人に漏らせば確実に始末される。いや、まだ漏らすだけならまだいい、大和にとって問題なのはその相手が垣根帝督である事だ。

「テメエ！…何でソイツ止めなかつたんだよ！…」

「止める必要がなかつたから止めなかつただけだが……？」

「必要がねエだア！？大アリだろオガ！…テメエまさかオレに帝督の野郎殺せとか言つんじやねエだろオな！…」

基本的に学園都市の闇に触れた者はそのまま引きずり込まれるか殺されるかのどちらかだ。アレイスターのお眼鏡にかかる限り大概は後者になる。

だが例外はある。大和の正体だ。大和の正体を知つた者はどんなに

有能な者であつても必ず殺す、これはアレイスターと大和の絶対の  
対立なのだ。例えそれがレベル5であろうとも例外ではない。  
だがアレイスターは大和の予想に反した言葉を放つ。

「始末する必要はない。垣根帝督にはこのまま君の正体を知つても  
らう」

「……は？」

大和は唖然とした表情で思わず言葉を零す。例外なき絶対の対立なの  
にアレイスターは垣根を殺す必要がないと言つたのだ。

「いや意味わかんねエよ……。始末しなくていいのか？」

「君は垣根帝督を始末したいのかね？」

「したい訳ねエだろ。アイツはオレの親友だぞ」

「ならばこの話は終了だ。もう帰つてくれて構わない

随分あつさりと終わつたなど大和は若干不信に思つたが何にせよ垣  
根を殺さずに済んだので黙つて自宅へと帰つて行つた。

「理事長にしては随分と寛大な処分ですね」

大和とアレイスターのやり取りを傍から見ていた『案内人』がアレ  
イスターに言つ。

「貴方なら今直ぐに殺せと言つと思つたのですが」

「フフ、寛大？それは勘違いだよ。寛大どころか彼にとつては始末するのより厳しい事を言つたつもりだよ」

「どういう事です・・・？」

「彼の正体を知つた事で垣根帝督を更に深い闇に引きずり込む口実が出来た。今まで彼の存在がそれを邪魔してきたが今回ばかりは彼も手出し出来まい」

「じゃあまさか・・・」

「君の想像の通りだ。統括理事会の人間が垣根帝督に彼の正体をばらしたのは私の指示だ。そして垣根帝督に警告したのも私の指示、より神鬼大和の正体を知りたくなるように扇動したのだよ」

「・・・何故そのような事を？」

「前にも言つた通りだ。使える駒はいくらあつても困る事はない、と」

『窓のないビル』から自宅に帰る大和は気分が良かつた。てっきり今直ぐ垣根を殺せと言われるものだと思っていたがあのアレイスターには珍しいお咎めなしという超寛大な処分にしてくれたのだ。今日は何となくついてる気がする、少しぐらい当麻にも分けてやつてエゼ、などと思っていると何かが大和にぶつかつた。

何だ？と思いつかたものを見ると見覚えにある銀髪に安全ピンだらけの修道服のインデックスが倒れていた。

「テメエ・・・何でこんなとこにいんだ？確かに小萌先生の家にいる筈じや・・・」

大和が最後まで言い終わる前にインデックスが彼の服を掴み大声で叫んだ。

「お願い、とーまを助けて！……！」

インデックスはあの時その場にいた大和と垣根の顔を覚えていた。そして当麻はこの二人に全幅の信頼を寄せており、何かあつたらあの一人に助けを求めると言つていた。

いきなり現れて何言つてんだア？と思ったがインデックスの真剣な表情、なにより親友の名が出た事にタダ事ではないと思った。

（これ以上あつちには関わりたくないなかつたが・・・）

大和は自分より少し背が低いインデックスの頭に手を置いた。

（親友がピンチなら話は別だな！）

大和はインデックスの来た道を戻つて行き、少し歩いたところで後ろを振り返る。

「一人で大丈夫なんだろオナ？テメエまでは面倒見きれねエぞ」

その言葉を聞きインデックスは笑みを浮かべた。

「私は一人でも大丈夫！――だからトーキーをお願い――！」

それを聞いた大和はニヤリと笑うとインデックスに宣言する。

「安心しな、オレに勝てるヤツなんざ未来永劫現れやしねエよ」

インデックスが大和に助けを求める少し前、インデックスは当麻と絹旗の三人で銭湯に向かっていた。

傷を治療した後インデックスは熱を出したのだが彼女の看病の手伝いとして当麻が呼んだ絹旗が持ってきた『どんな高熱も一発でスッキリ！スーパークールドリンク』という名のなんとも名前の長いドリンクを飲むと三日程は寝込むだろう熱が一瞬で下がったのだ。今思えばかなり怪しい飲み物だったがあの時は混乱してそこまで頭が回らなかつた。

「トーキー、さいあい」

「何だよ？」

「超どうしたんですか？インデックス」

絹旗とインデックスは何となく気が合つかずかに仲良くなつた。

「ジャパニーズ・セントーにはコーヒーニューヨークがあるって、こもえが言つてた。コーヒー牛乳って何？カプチーノみたいなもの？」

「コーヒー牛乳を超知らないんですか？インテックス」

「つーかそんな豪勢なモンは銭湯にはねえ。お前の国の風呂はカプチーノ完備なのか？」

「んー・・・その辺は良くわからないかも。私、気付いた時から日本にいたからね」

「産まれて超直ぐに日本に来たんですか？通りで日本語が超ペラペラな訳です」

だがインテックスは首を横に振り、そうじゃないと言つて否定する。

「私、一年前ぐらいから記憶がなくなっちゃつてるの。だから向こうの事はよくわからないんだよね」

インテックスは笑いながら言つた。だがその笑顔の下には恐怖や焦り、そして辛さが滲み出でていた。当麻も絹旗も記憶のない理由を聞き出したかったがこれ以上聞いてはいけない感じがしたのでふーんとだけ言つた。

「それよりも早く行くんだよ！」

よほど銭湯が楽しみなのかインテックスは一人で走り出してしまつた。

超待つてください！と言つて絹旗もそれに続く。当麻はやれやれと思ひながらも一人を微笑ましく見つめる。

その時、当麻はある違和感に気付く。

人が一人もいないのだ。時間はまだ8時で就寝に着くような時間で

はない。にもかかわらずまるでひどい田舎の農場の様な感じだった。

「スタイルが人払いの刻印ルーンを刻んでるだけですよ」

当麻から10メートルぐらい先に立っていたのは片足だけ大胆に切ったジーンズに2メートル近い刀をぶら下げる魔術師、神裂火織が立っていた。

## 『完全聖人』

大和は当麻の元へ走っていた。聖人の力は使っていない。誰かに見られると色々面倒な事になるからだ。

(探すつていつても学園都市は広エからなア。チツ、インデックスのヤツに当麻の場所聞いとけばよかつたぜ)

だがそこで大和は魔術の気配を探知する。スタイルの人払いの刻印ルーンだ。

(コイツは人払いの魔術か?なら好都合だぜ!)

魔術を展開している場所の近くに当麻がいると考えた大和は一気にそこへと向かった。

「なぜ貴方がここに。人払いの刻印ルーンを刻んでいた筈です」

「無駄な努力ゴ苦労様。だけどあの程度じゃアオレには通じねエよ」

大和はうつ伏せに倒れている当麻に近付くとその横に立つ。

「よオ当麻、随分と派手にやられてんじやねエか」

「大和・・・ビ、ビうしてここに？」

「インデックスのヤツによオ頼まれたんだよ。オレとしちゃア魔術とはもう関わりたくないなかつたんだが親友がピンチとなれば話は別だな」

「インデックスと絹旗は無事なのか！！」

大和は当麻の口から絹旗という名前が出た事に驚き、絹旗がいた理由を尋ねようとした。だがそれは出来なかつた。突然大和の頭上スレスレを何かがもの凄いスピードで通過したかと思うと後ろの風力発電のプロペラがバターの様に真っ二つに切られたからだ。

「・・・せつかちな野郎だな。少しぐれエ待てねエのか？」

大和は神裂を睨み付ける。その間に神裂は七天七天を構えながら答える。

「貴方たちの会話を待つ必要も時間も私にはありませんので」

大和はそオかよと言いつと横田で当麻を見下ろす。

「当麻ア、絹旗の事は後でじっくり効かせてもらひやぜ」

大和は屈み込むと当麻の首に手刀をし気絶させた。その光景を驚きの表情で見る神裂に大和は言つ。

「オレの力はコイツには秘密なんですね。それにテメエも無様にやられていく様、見られたくないねエだろ」

「その言い様ですと私が貴方に負けると聞こえるのですが」

神裂は大和を睨み付けながら言つ。大和は少し笑みを浮かべると神裂に答えた。

「その通りだよクソ野郎。テメエはオレに負ける。何も出来ずゴミ虫みてエに捻り潰されるんだよ」

「私相手に喧嘩を売るとは・・・身の程知らずにも程がありますね」

「そりやアオレのセリフだよボケ。それにこれはケンカじやねエ、圧倒的な暴力だ」

一人の間に凄まじい殺気が流れる。大和はポケットに手を入れたまま、神裂は七天七刀を構えたままお互いを睨み付ける。しばらく沈黙が続き大和がようやく口を開いた。

「一つ聞かせてくれや」

「なんでしょう?」

「どうしてオレの親友に手を出した。魔術師つてのは無差別に人を攻撃する外道なのか」

「まさか、私はその少年に一つお願いをしただけですよ。インデックスをこちらに引き渡すようにと」

やつぱりアイツ絡みかよと大和は呆れた表情をする。

「で、当麻はそれを拒否った訳か。だから力付くで承諾させようと

したのか？」

大和は自分で怒りが湧き上るのがわかつた。若干声を震わせながら神裂に言った。

「そんなどいろです。貴方からも少年に説得してくれませんか？彼女をおとなしくじゅうじゅうに渡すよつてこと」

その瞬間、怒りが大和の沸点を越えた。

凄まじいスピードで大和は神裂に突進する。余りにも速さに神裂もまともに反応出来ず何とか七天七刀の鞘でガードするのが精一杯だった。だが完全には威力を殺す事が出来ず、そのまま10m程後ろに吹き飛んでしまった。

「今更説得してくれだア！！バカ言つてんじやねエぞコラアー！」

ようやく着地した神裂に大和は叫ぶ。

「オレの親友に手<sup>ヒ</sup>出した瞬間にテメ<sup>ヒ</sup>の運命は決まつてんだよオ  
せんたく

! !

再び大和は神裂に突進する。先程よりも更に速いスピードで。だが  
神裂も一流の魔術師であり聖人だ、一度同じ手は通用しない。

七  
閃

一瞬神裂の右手が何かのバグの様にブレたかと思うと轟！という風の唸りと共に凄まじいスピードで何かが大和に襲いかかる。

「そんなガラクタでなア！！勝てる訳ねエだろオ！！」

大和はその場で急ブレー キをかけると凄まじい速さの蹴りから鎌風を放つ。

大和から放たれた鎌風は襲いかける何かを叩き斬つた。それは鋼のワイヤーだつた。ワイヤーを斬つた鎌風はそのまま神裂目掛けて飛んで行く。

一撃で七閃を看破された事に驚きを隠せなかつたが神裂は鎌風をかわすと次の攻撃の手を考える。だが神裂が鎌風をかわすと予想していた大和は既に神裂の目の前に接近していた。

「！？！」

「終わりだよオ！！クソ野郎がア！！『千鳥』（ちどり）！！」

バチバチ！と美琴顔負けの電気を帯びた大和の右手の突きが神裂に放たれた。

勝負あつた。

普通なら誰でもそう思うだろう。だが大和も普通でなければ神裂もまた普通ではない。

神裂は常人を超えた反射神経で大和の千鳥を七天七刀の鞘で一瞬だけ上に払うとそのスキに横つ飛びでかわしたのだ。

大和の顔は驚きの表情に変わる。確實に勝負有りと思つたのだがあらう事がかわされるとは。

だが大和以上に驚いていたのは神裂の方だつた。正直言つて大和の千鳥にはほとんど反応出来なかつた。かわせたのも恐らく単なる幸運だろう。それ以上に聖人の自分が反応できない程のスピードで移

動する事が信じられなかつた。

「テメエ・・・まさか聖人か」

神裂は今日何度目かわからない驚きの表情に染まる。本来科学サイドの人間が知る筈のない名前、『聖人』と言つ名前を大和の口から聞いたからだ。

「な、なぜ貴方が聖人の事を・・・」

「コイツは驚いた！まさか学園都市でオレの粗悪品とやりあつ事になるなんてなア！」

粗悪品？一体この少年は何を言つてゐるんだ？

神裂は訳がわからなかつた。

「何驚いてんだよ。あアそつか、確か聖人はテメエ等魔術サイドの所有物だつたな。だが世の中には例外だつてあるんだぜ」

大和は口元を歪ませながら神裂に言つ。

「ま、まさか貴方も・・・」

「『名答、オレも聖人だ。でもテメエと同じじやねエ。オレはテメエみてエな粗悪品の聖人なんかじやねエんだよ！』

『窓のないビル』でアレイスターと『案内人』は大和と神裂の戦闘を『滞空回線』（アンダーライン）を使って見ていた。

「やはり彼の力は素晴らしい。聖人を相手にここまで圧倒するとは」

その表情からはわからないがアレイスターは満足気味に賞賛する。

「よろしいのですか？聖人相手に戦闘などしても」

「何も問題ない。むしろ好都合だ。聖人同士の衝突など滅多に見れるものではないからね」

「そういう意味ではありませんよ」

「・・・ではどういう意味かな？」

アレイスターは『案内人』に尋ねる。

「大和君と鬭つてるあの魔術師・・・確実に死にますよ」

『案内人』はハッキリと答えた。

「随分と彼を信用しているのだな」

アレイスターはからかう様に言つ。

「信用も何も』ただの聖人』如きじゃ大和君に勝てる筈ないでしょ  
う」

「確かにそうだな。彼は聖人超えた聖人だからね・・・」

「『完全聖人』？」

「そうだ。オレは『完全聖人』。聖人の頂点に君臨する存在なんだよ」

『完全聖人』など聞いた事もない。神裂は初耳だった。

「知らねエのも無理ねエよ。何せ『完全聖人』は極秘の存在、テメエみてエな教会の人間が最も恐れる存在なんだからなア」

「・・・どういう事ですか?」

大和はニヤリと口元を歪ませると神裂に説明し始める。

「本来『聖人』、つてのはどんな存在だ」

「『聖人』は産まれながらにして神に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ者」

神裂はスラスラと答える。自分も聖人なのだから当たり前の事だ。

「正解だ。じゃア『聖人』つてのは具体的に普通のヤツとはどう違う?」

「『聖人』は偶像の理論により『神の力の一端』をその身に宿す事が出来ます。結果五感をはじめとする身体機能が大幅に強化されます」

「素晴らしい解答だな。じゃア最後だ、仮に『神に似てる』じゃなく『神と同じ』聖人が現れたらどうなる」

「そんなもの現れる筈がありません！そもそも『神と同じ』など…」

そこまで言つて神裂は理解した。『完全聖人』とは何なのかを。

「気付いたみてエだな。『完全聖人』とは神と同じ特徴を持つ者的事だ。普通の聖人の倍以上の力を持つ究極の存在なんだよ」

一旦言葉を切ると大和は続ける。

「『完全聖人』はまさしく神そのものだ。だから『天使の力』（テレズマ）を完全に掌握しているから100%發揮する事だって可能だ」

「ですが貴方の身体は『人間』です！仮に全力を出す事が出来ても耐えれる筈が…！」

神裂の言つ通り神と同じ特徴を持つとはいベースとなる身体は『人間』のモノだ。全力を出せば当然膨大な負担がかかる筈だ。

「確かに死ぬリスクは普通の聖人に比べりやアちっせエとはい全くいつて訳じやねエ。それに全力ばつか出してたら身体にどんどん

ん負担が蓄積されちまう。そこで登場するのがオレの能力『事象選択』（オールセレクト）だ

「オールセレクト？」

「オレの能力でなア『発生した事象に対し選択肢を持つ』事が出来るモンだ。これを使って身体にかかった負担をなかつた事にすりやアいいだけの事だ」

神裂は呆然とした。ただでさえ扱うのが困難な力を完璧に使いこなせ、尚且つそれに伴うリスクもほぼゼロに等しい。

大和の言つ通り神そのものだ。いや神すらも超えた存在なのかもしれない。

「教会が『完全聖人』を恐れる理由・・・テメエならもうわかつただろ」

もちろんわかっている。教会は神を崇める存在だ。神は絶対であり人間とは違う絶対の存在、それが教会の神に対する考え方だ。だがもし『完全聖人』なんてモノが世界に知れ渡ればその考えを根底から覆す事になる。宗教革命どころの騒ぎではない。教会の存在意義を破壊する事になるのだ。

「と、言つ訳だ。だからサクッと終わらせてやるよ」

その瞬間、シユウと何か音が鳴ったかと思うと神裂の前にいた筈の大和の姿が消えた。

「なつーど、どここー！」

キヨロキヨロと周りを見回すが大和の姿はない。

「ど！」見てんだア！－！」

神裂が顔を上に向けると15m程上空に大和がいた。

「ボケつとしてると潰されんぞオ！－！」

そのまま大和は口ケツトの様に神裂に接近する。神裂はそれを横にかわす。

ドガーン！－！」

凄まじい威力と音共に大和は地面に激突する。大量の砂煙の中大和は一人悠然と立つ。大和の立っている場所にはまるで隕石でも落ちたかの様にクレーターが出来ていた。

「なんという威力なのですか・・・」

だが神裂はもう驚いてはいなかつた。完全聖人の大和ならこれぐらいの事なんの造作もないのだろう。

神裂は一つわからない事があつた。それは先程の電気を帶びた突きの事だ。最初は魔術かと思つたが直ぐにその可能性を捨てる。魔力は感じなかつたし何より能力者に魔術は使用出来ない筈だ。

次に神裂は能力ではないかと疑つた。しかしその可能性も直ぐに捨てた。学園都市に来る前に神裂達はこの街の事を少し調べたのだ。そこでわかつたのは一人の能力者が二つ以上の能力は使えないという事だ。詳しくはわからないがなんでも脳が耐え切れないらしい。神裂は次の可能性を考えようとしたが直ぐに思考を止める。別のことを考えながら闘える相手ではないからだ。神裂は大和に集中する。神裂もただやられっぱなしでは終わらない。

鞘から刀身を抜く。

「おいおい、まだやるのかよ。諦め悪過ぎんだろテメエ」

大和はやれやれといった表情で言ひ。

「私としてもここで負ける訳にはいかないんですよー。」

神裂は一気に距離を詰め大和に斬りかかる。傍から見れば凄まじいスピードだが大和からすればまだまだ遅い。

「そんなスピードじゃアオレには届かねェよー。」

大和はよけるのではなく逆に神裂の懷に入り込んだ。2mに及ぶ長さを誇る七天七刀はよけるよりも神裂の身体に使いといふの方が安全だと考えたのだ。

よけると思っていた神裂は完全に不意を突かれた。大和は手に力を込めるといふと神裂の腹部に正拳を入れる。

「ゴフッ・・・！」

腹部に強烈な一撃を受けた神裂はそのまま倒れそうになる。だが何とか踏ん張り後ろに下がり再び大和から距離を取る。  
息が出来ない、それが原因か頭がフラフラする。その上目が眩む。  
・・目が眩む？

「その様子じやア目でも眩んでるみてエだなア」

「・・・何をしたのですか！」

大和はニヤリと口元を歪ませる。

「さつきの正拳でな、テメエの身体機能を少し狂わせたんだよ。どうやらい田に異常が来たみてエだな」

完全に見えない訳ではないが大和の姿を捉えられない。まるで太陽を直接見ている様だ。

「さア ここでオレから提案だア」

余程余裕があるのか大和は欠伸をしながら言つて、

「提案・・・?」

「やうだ。降参です、許して下さい、っていつなら見逃してやるよ。どうだ？ 悪くねエだろ」

大和は提案と言つているがこれは提案などではない。事実上の警告だ。これ以上やるなら容赦しないといつ脅しを籠めた。

神裂は目を閉じると下を向き黙り込む。

ここで彼の提案を受けければ自分は恐らく助かるだろう。目前に迫る死の恐怖からも圧倒的な力の差による絶望からも、全てから解放されるだろう。

答えは決まった。

神裂は目を開くと顔を上げ大和を見つめる。

「答えは決ましたかア？」

大和はゆっくりと神裂に近付く。

「決まりました。答えは・・・」れです――」

「ツー！」

神裂は七天七刀を一気に抜刀して大和に斬りかかった。正真正銘神裂の最後の剣撃、神しんをも両断するとすら言われている彼女の最強にして最終奥義——唯ゆいせん閃めんが大和を捉えた。いくら『完全聖人』であっても直撃すればただでは済まない筈はず、事象選択ルセレクトを使われる前に勝負を着ける必要があると神裂は考えたのだ。だがその目論見は一瞬にして破壊された。

「惜しかつたなア～。でもそれじゃアまだオレには届かねエよ」

唯閃が直撃した筈の大和が何事もなかつたかの様に神裂の後ろに立っていたのだ。後ろを振り向いた神裂は今日一番の驚きの表情を見せる。

「ど、どうして。唯閃は確実に貴方に直撃した筈です……」

手応えはあつた。それに斬つた感触もあつた。だが大和には傷一つない。神裂は訳がわからなかつた。

「残念ながらテメエが斬つたのは幻影だ。オレの作った質量の持つ幻影。まあ普通はそんなモン作れねエけどな」

勝敗は喫した。唯閃を破られた以上、神裂にはもう打つ手がなかつた。仮にあつたとしても彼に届く事はないだろう。神裂は唯閃による負担からかへナへナとその場に尻餅をついてしまつた。大和はトドメを刺すために神裂にゆっくりと近付く。

「よく頑張ったよテメエは。久しぶりにオレもいい汗かいたぜ」

大和は神裂の目の前に立つとゆうくりと右手を擧げる。

「だから安らかに眠れ」

大和は一気に右手を振り下ろす。神裂はもうよけようとはしなかつた。目をギュッと閉じた。

・・・だがいつまで経つても大和の右手が神裂を捉える事はなかつた。恐る恐る目を開くと大和の右手は神裂の頭上ストレスで止まつて、いや止められていた。先程まで氣絶していた筈の上条当麻の右手によつて。

「ツーーー当麻何時の間に・・・」

「もう辞めろ大和！！勝負は着いた！これ以上やる必要はないだろーーー！」

大和は当麻を振り払おうとするが出来ない。当麻の右手——『幻想殺し』（イマジンブレイカー）に触れられている大和は今はただの13歳の少年だ。自分よりも腕つ節の強い当麻を振り払える筈もない。

「なんでコイツを庇つーーーコイツはテメエも殺そうとしたんだぞ！

！」

「だからつてお前がこいつを殺していい理由にはなんねえだらうが！ーーー！」

大和は心の中で笑つた。どこまでコイツはバカなんだろうか。見ず知らずの人はおろか敵にすら情をかけるとは・・・。

「あんたもあんただ！！なんでそこまでしてインデックスを追い詰めるんだよ！！そんだけの力があれば誰だって、何だって守れるのに」

当麻は未だ大和の前で固まっている神裂に叫ぶ。

「私だつて・・・私だつて、好きでこんな事している訳ではありませんよ。だけど・・・こうしないと彼女は生きてはいけない、死んでしまうんですよ。彼女は私と同じ必要悪の教会の同僚にして、親友なのですよ・・・」

当麻は思わず掴んでいた大和の手を離してしまった。神裂の言つている事の意味がわからなかつた。大和はただ目を閉じて神裂の言葉を聞いている。

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはありますか？」

神裂の問いに大和が答える。

「確かに・・・見たモノ聞いたモノ全てを記憶し、忘れられねえ能力だつて？オレも実物は見たことねエけどな」

その答えに神裂は頷く。

「彼女はその能力のおかげで10万3000冊の禁書を記憶する事が出来ました。けどその能力が彼女を苦しめるているのです」

「どういう事だよ？」

当麻は神裂に尋ねる。

「彼女の脳の85%は禁書によつて埋め尽くされています。ですか  
ら彼女は今残り15%でしか日常生活を送れないんです」

「それが何だつてんだよ。インデックスはお前と同じ必要悪の教会ネセナツクス  
なんだろ！－だつたら何でインデックスはお前等から逃げるんだよ  
！－何でお前等を悪い魔術師だつて呼ぶんだよ！－」

神裂の代わりに大和がその問い合わせた。

「んなモン簡単だよ当麻。アイツはコイツ等が味方だつて知らねエ  
からだよ。考えてみる、例えは当麻がそれだけで世界を潰してしま  
う力を持つてたとする。そこに誰かも知らねエヤツがイキナリ狙つ  
てきた。だがソイツは自分が知らないだけでかつて親友、でも自分  
はソイツが誰なのかわからない。テメエならどう考える？『自分の  
力を狙う悪いヤツ』って考えねエか？」

当麻はそこで思い出した。先程インデックスが言った言葉、『一年  
程前からの記憶がない』という言葉を。

「だけど、あいつには完全記憶能力の力があるんだろ！－だつたら  
何でお前等の事を知らないんだよ」

「それは・・・『コイツ等が記憶を消した。だから知らねえんだよ

』

神裂の上から大和が答えた。

「な、何で・・・何でそんな事したんだよ！－インデックスはお前

の親友じゃなかつたのかよーー!」

当麻は思わず神裂に叫ぶ。

「そうしないと、彼女は死んでしまうからですよ」

神裂の答えに当麻は言葉を失つた。神裂は今にも泣きそうな顔で続ける。

「先程も言った通り彼女は今常人の15%の脳で日常生活を送っています。普通の人様に「記憶」していけば脳がパンクしてしまいます」

のです

神裂が言わんとしている事はこうだ。

人間という生き物は本来「忘れる」生き物だ。そうする事で寿命を伸ばし続けている。だがインデックスは完全記憶能力によつて「忘れる」という事が出来ない。ただでさえ常人の脳よりも遥かに少ない容量しかないので「忘れる」事が出来ないインデックスが普通の生活を送るには記憶を消去する必要がある、という事だ。

「記憶の消去はきっかり一年周期で行ないます。コミットまで後三日です。早過ぎても遅過ぎても意味がありません」

当麻も大和も何も言わない。ただ黙つて神裂の言葉を聞くだけだった。

「これで私達が彼女を追う理由がわかつた筈です。お願ひですから彼女を黙つてこちらに渡してください。彼女を救えるの私達だけなんです」

その言葉に当麻の怒りが爆発した。

「ふざけるなよ！－私達だけ救えるだと－－記憶を消す事が本当に  
あいつを救う事だと思つてんのかよ！－何勝手に諦めてるんだよ！  
！－どうして他の道を探さ・・・」

「つむつせえんだよ、ど素人が！－！」

「「－？」」

感情を剥き出しにした神裂はそのまま当麻に突っ込んで行く。当麻  
を守るために大和は直ぐに神裂を止めようとしたが神裂は急に大和の  
方を向き。

「七閃！－！」

既に切られた筈のワイヤーが大和に襲いかかる。まさかまだワイヤー  
があるとは思つてもいなかつた大和は完全に不意を突かれた。

（チッ！これはかわしきれねエぞ・・・）

直撃を受けた大和はその凄まじい威力で後ろに吹き飛び、ビルに激  
突する。

「大和！－！」

砂煙で大和の安否が確認出来ない。神裂は視線を外した当麻の脇腹  
に容赦なく蹴りを入れる。聖人の蹴りをまともに受けた当麻はその  
まま2、3m程吹き飛んでしまった。

「グツ・・・・・・」

神裂は脚力だけで3m程飛び上ると七天七刀の鞘で倒れている当麻の腕を潰す。

「何も、何も知らねえくせにほざいてんじゃねえぞー！私だつて、私だつて頑張つたんですよー！」

叫びながら神裂は七天七刀の鞘を当麻に何度も何度も振り下ろす。

「どんなに彼女と親友にならうとも・・・結局は全て忘れてしまう。私達は・・・もう耐えられません。これ以上・・・彼女の笑顔を見る事は出来ません・・・」

「ふ、ざけんな・・・」

ボロボロになつた当麻は七天七刀を掴みながら必死に言った。

その時、神裂に向かつて凄まじいスピードで衝撃波が向かつてくる。その余りに速いスピードに神裂は反応出来ず胸に直撃した。

「ガアー！！！」

そのまま神裂は後ろに吹き飛ぶ。肋骨が何本か折れただろうか。気を失いそうな痛みが神裂を襲うが何とか踏ん張る。

衝撃波が放たれた所を見ると砂煙の中何かが一つ光っている。赤と青の光。

それは大和の瞳の色だった。

「テメエ・・・覚悟は出来てんだろオナア？」

砂煙の中から大和が神裂を睨みながら歩いて来た。  
それに続くように神裂も後ろに離れて行く。

「せっかく見逃してやるオと思つたのによオ 流石にもオ限界だわ」

大和はバキバキッつと鳴らしながらさらに近付く。

「親友だつたんだつてなア。仕事のためなら昔の親友にも刃を向けるのかよ？カツコイー、プロの鑑だな」

「だまれ・・・！」

「救えるのは私達だけ、つてテメエ等どんだけ世界觀狭工んだよ。  
それともなにか、自分の力に酔つてんのかア？」

「なんにもわからねエよ」

神裂の悲痛な叫びに大和はあつさりと答える。

「つーかわかりたくもねエしな。大体よオ 親友親友、つてそこだけ強調してんじやねエよ。正直耳障りなんだよ。だが一番気に食わねエのはテメエ等の態度だ。一番辛いのはテメエ等じゃなくインデックスの方だ。それなのに悲劇のヒロインみてエな安い演技してんじやねエよ」

神裂はもう一度大和に唯閃で斬りかかる。

大和は右手だけで神裂の両手ごと七天七刀を上に払うと両手で握り拳を作り、それを神裂向かい構える。

「これで終わりだ。あばよ、哀れなカス」

そして大和は呟いた。

「六王銃ろくおうぐ」

その瞬間、神裂に凄まじい衝撃が走る。余りの衝撃に神裂は声すらも出せなかつた。

ドサツ、と神裂はその場に倒れ込んでしまう。口から血が零れる。痛みで立ち上がる事が出来ない。意識が飛びそうになるが執念だけで何とか意識を繋ぎとめる。

大和は神裂から興味をなくしたのか既に当麻の所へ歩いていた。

「ま、待つて下さい……」

今にも消えそうな声で大和を呼び止める。だが聞こえていないのか、それともワザとなのか大和は無視する。

「待つて下さい……」

「なんだよ？」

大和は当麻を肩に担ぎながら面倒くさそうに神裂の方を振り向く。

「助けて下さい……。私にはもうどうすればいいのか……」

大和は助けるつもりなど毛頭ない、適当にあしゃうつもりだったの

だが神裂の必死な表情を見て足を止める。

「・・・明日夜9時ここに来て。ヒントぐれエはくれてやるよ」

大和はそう言い残すと当麻を抱き歩き始めた。

## 思わぬ再会（前書き）

大和の能力の全容については後々明かす予定です。

お願いがあります。『禁書田録戦』で原作通り当麻の記憶を消すか否か悩んでいます。読者の皆様の意見や希望が聞きたいで感想にて返答をお願いします。

返答がなかつたり少なかつた場合は筆者が独断で決定します。

## 思わぬ再会

当麻を肩に担ぎながら大和は小萌先生の家を目指す。先生の家は以前大和が学校の届け物をした際、一度訪れた事があるので道順は知つていてる。

別に自分の家で当麻を治療してもよかつたのだが小萌先生の家ならインデックスと絹旗がいるかもしれないし自分がするよりも先生がした方がいいと思ったのだ。

大和はチラリと肩に担いでいる当麻を見る。

コイツはどこまでもお人好しでバカだ。突然現れた訳のわからない少女一人のためにここまでボロボロになるまで闘おうとするのだから。とても自分には真似出来ない事だ。なぜここまでして闘うのか。昔からコイツはそうだった。誰かのためにいつも闘う、自分や帝督のように何か大きな力がある訳ではない。あるといえば右手の幻想殺し（イマジンブレイカー）ぐらいだ。異能の力には絶大な効果を持つそれも一人に比べれば微々たるモノだ。

そんな事を考えている間に小萌先生の家に到着した。超の付くぐらいボロい二階建ての木造アパートで外に洗濯機が出ている。どうやら風呂はないようだ。前来た時もそうだったが本当にこんな所に住んでいるのかと思う。

（さて、先生の部屋は二階だつたな）

階段を登るのが面倒だったので大和は脚力だけで二階に飛び上がる。大和は小萌先生の部屋の前に辿り着くとインターホンを鳴らす。

「はいはーい、今開けますよー」

中から小萌先生の声がしてガチャ、っとドアが開く。

「あれ、大和ちゃんこんな時間にどうしたのですか？」

大和が小萌先生の質問に答えようとしたら中からドタドタ誰かが走つて来る。

「やまと……とーせー……」

「大和さん……上条さん……」

大和の予想通り、やはりインデックスと絹旗は先生の家にいた。

「上条ちゃん? って、上条ちゃんどうしたのですか! ……その怪我! ! !」

大和の肩に担がれた当麻に気付いた小萌先生が叫んだ。何かと喧嘩つ早い当麻が怪我をしているのはよくある事だが流石にここまでの怪我は小萌先生も初めて見る。

「いろいろあつてな。先生に悪いが訳は聞かねエでくれ」

大和は当麻を肩から降ろすと小萌先生に頭を下げる。

「じゃ後頼むぜ小萌先生、インデックス。後絹旗、何でテメエがここにいるかは今回は不問にしてやる。代わりに当麻の世話頼むぜ」

そう言つと大和はこの場から立ち去つとする。

「大和ちゃんはどこに行くのですか?」

「帰るんだよ。オレがすんのはここまでだ」

そう言うと大和は部屋から出て行つた。  
自宅に帰りながら大和は先程の戦闘後、神裂に言つた事を思い出して  
いた。

（何で『ヒントくれてやる』とか言つたんだろうな・・・。  
あんなヤツ等なんざほつときやアよかつたのに）

事実大和は最初はそつもりだった。だが大和は神裂が求めた救いの手を差し出した。親友の当麻を傷付けた憎い相手の筈なのに。

（・・・言つたもんはしゃアねエ。何とかしてやるか）

そう自分に言い聞かせ大和は自宅に帰つて行つた。

次の日の朝、大和はいつもより少し早く目が覚めた。壁に架かつて  
いる時計を見る。現在時は午前9時ちょうど、神裂との約束までちょ  
うど12時間ある。

とりあえず朝食を摂るためにファミレスにでも行こうかと思つたそ  
の時大和の携帯が鳴つた。ディスプレイを見るとそこには『垣根帝  
督』と映つていた。

（帝督から？こんな朝から何の用だ？）

垣根が朝なら電話してくるのは珍しい。ビュしたのかと思つたがと  
りあえず電話に出る。

「帝督か?ビュしたんだよ、こんな朝っぱらから

『・・・大和、今日の夜空てるか?』

突然の垣根の誘いに少し驚いたが神裂と会う以外は特に何もなかつたので承諾する。

「そオだな・・・11時ぐれエなら大丈夫だぜ」

『・・・そつか、わかつた。じゃあ11時に第十七学区の操車場な

そつ伝えると垣根は一方的に電話を切つてしまつた。大和は違和感を感じた。いつも垣根が電話してくる時はニコニコしているのが電話越しにでもわかるぐらい明るい声で話してくる。だがさつきのはそれの真逆、沈んだ顔が電話越しにでもわかるぐらい暗い声だつた。

(帝督のヤツ何かあつたのか?やけに暗エ声だつたな・・・)

この時大和はある事を完全に忘れていた。それは垣根が自分の秘密を知つてしまつた事を。

その頃、神裂とスタイルはとあるビルの屋上から小萌先生のアパー

トを監視していた。昨日の戦闘で当麻がインデックスを連れて逃げ出さないようにするためだ。

「まさか僕ばかりか君までやられるとはね・・・。正直かなり驚いたよ」

神裂を見る事なく双眼鏡を覗きながらスタイルは言つ。

「私も驚きですよ。まさか学園都市にあれ程の猛者がいるとは・・・」

「『『完全聖人』』か・・・。天使の力を完璧に操る人間。学園都市もとんでもないモノを飼つているね」

実際にその力を目の当たりにした一人だからこそわかる。アレは最早人間の域を超えている、教会の人間がこんな事言つのはどうかと思つたがもし『神』というのが本当に存在するならアレは限りなくソレに近いモノだろう。

「ところで神裂、君は本当に今夜彼と会うのかい？」

神裂から大和との約束の事を聞いていたスタイルは神裂に尋ねる。

「もちろん会うつもりです。ようやく見つけた手掛かりです。会わない理由がありません」

「だが罷かもしないんだぞ。僕と君を一人まとめて始末するための・・・」

スタイルは今まで何度も経験している。インデックスを助ける

ためだと言つてくる輩は最後には必ず自分達を裏切る。だから今回も警戒しているのだ。もちろん神裂も同じ気持ちの筈だ。

「……確かに貴方の言つ通り罷かもしません。ですが今は、例え罷であつても少しでも彼女を救える可能性があるなら……私はそれに賭けてみたい」

そう言つた神裂の表情は強い決意と想いが秘められていた。

「スタイル、貴方は残ってくれても構いませんよ。私一人で行きますから」

神裂がそう言つとスタイルはやれやれといった表情で言つた。

「僕だけ除け者にする気かい？僕だって気持ちは君と同じだよ」

大和は今すぐ後悔していた。彼が今いるのは朝食を摂るために来店したファミレスのある一席。大和の隣と正面には前の強盗事件で知り合つた御坂美琴と初春飾利、その隣には彼女の同級生だろうか初春と同じ柵中の制服を着た少女が座つている。

なぜ彼女達がいるのかと言うとそれは少し前に遡る……。

垣根との電話が終わつた後、大和は直ぐに服を着替えファミレスに向かつた。いつもなら近道として利用している路地裏に直行するのだがなぜか今日に限つて普通の道をついていた。しばらくして大和

が交差点で信号待ちをしていると後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

振り返るな、無視しろ

直感でそう判断した大和は振り返る事なく聞こえていないフリをする。だが声の主が大和に気付いたようで大和の名前を呼んでいる。なおも大和は無視をする。声の主は聞こえていないと思ったのか更に大きな声で大和を呼ぶ。だが大和は無視し続ける。声の主もようやく自分が無視されていると気付いたのか「無視すんなやゴラアアアアーー！」と怒声を放つた。これ以上無視すれば次は怒声と共に電撃が飛んで来ると思った大和は面倒くさそうに後ろを振り返る。振り返った先にはキツとこちらを睨みながら走つて来る御坂美琴とその後ろからトコトコと着いて来る初春飾利と見知らぬ少女がいた。

「ちょっとアンタ！何で無視すんのよー！」

大和に迫り着くなり怒声を浴びせる美琴。大和はうんざりとした表情で面倒くさそうに答えた。

「あア？ だつてテメエと絡むと碌な事ねエだろオガ

「碌な事つて、まだ会うの一回目じやない！」

「前だけで十分だつての。また勝負しろとか言われたらたまんねエからな」

「なつー！ アンタは私がそんな戦闘狂にでも見えるつてのー？」

「当麻のヤツに会つたびに電撃ブチかましてんだる。立派な戦闘狂だろオガ」

ガヤガヤと口喧嘩をしている間に初春達が一人に追い付いた。

「大和さん！お久しぶりです！あの事件以来ですね！」

目をキラキラさせながら初春は大和に言つた。

「別に久しぶりって程でもねエだろ・・・ん？初春、後ろにいるヤツはテメエの同級生か？」

大和は視線だけで初春の後ろにいる少女を指す。いきなり大和に見られた（ほとんど睨んだ）少女は初春の後ろに隠れる様に縮こまる。

「佐天さん！『あの』大和さんですよ。以前私が話した・・・」

それを聞いた瞬間、佐天と呼ばれた少女は初春の背中から出て來た。

「あ、あなたが大和さんですか・・・？」

何か神様でも見たかの様な表情で少女は大和に尋ねた。一体あの花瓶はコイツに何吹き込んだんだと思ったがとりあえず少女に返事をする。

「あア そうだけど・・・。オレは大和、神鬼大和だ」

大和の返事を聞いた瞬間、少女はいきなり大和の右手を両手でガシツと握手すると初春同様に目をキラキラさせながら興奮氣味に自己紹介し始める。

「私、佐天涙子、つていいます！！初春の親友してます！！」

心底どうでもいい情報を教えられた大和はとりあえずふーんだけ言って頷いた。

「大和さんって柵中の卒業生なんですよ！すごいなあ飛び級で卒業だなんて」

「そんないいもんじゃねエよ。周りから白い目で見られるだけだぜ？」

「それですごいですよ！それにレベル〇なのに強盗捕まえたり、御坂さん倒したりしたんですね？私と同じレベル〇とは思えないですよ！」

余計な事ペラペラと喋りやがって、つという意味を込めて初春を睨みつけたが初春はどこ吹く風と言わんばかりに佐天の方を向いていた。

「随分とレベル〇ってどこを強調するな」

「いえ、私も同じレベル〇なんですよ！」なあと思つて・・・

大和が怒つたと思ったのか佐天は慌てて大和に言つた。すると先程とは打つて変わつて真剣な表情で佐天が大和に尋ねた。

「大和さんは能力に憧れとかはありますか？」

憧れもなにも大和はレベル5、それも学園都市最強の。イマイチ佐天の質問の答えがわからなかつたがもし自分に能力がなかつたらと想像して答えた。

「別にねエな。んなもん一度たりとも抱いた記憶はねエ」

「どうしてですか？学園都市に来たからには能力が欲しくないんですか？」

「別にいらねエだろ」

大和ははつきりと答えた。レベル5の自分が言つたところで全く説得力がないが・・・。そんな事は知らない佐天は驚いた顔をしている。

「別に能力だけが全てじゃねエだろ。能力なんざなくたってこの街で生きていく。能力が全てだなんて上の連中が勝手にほざいてるだけだろ」

更に大和は続ける。

「大事なのは今自分が何が出来るか、つて事だろ。自分にしか出来ねエ事を精一杯やる。それが一番大事な事だと思つけどなア」

似合わねエなアと思つたが佐天の心には深く響いたようでもまた明るい笑顔に戻ると、そうですよね！と言つた。

「ところで大和さんは何してるんですか？」

初春が大和に尋ねる。

「ファミレス行くんだよ。朝飯がまだだからな」

答えてから大和はしまつたといった表情をする。美琴はともかく、

初春と佐天なら必ず着いて行くと言つと思つたからだ。

「私達も一緒にいいですか！」

案の定、佐天が食らいついた。即効で拒否するつもりだったが佐天のキラキラした目と満更でもない美琴と初春の表情を見ると断ろうにも断れなかつた。

「・・・勝手にしろ」

「やつたーーー！」

大和の承諾を聞くと佐天は意氣揚々と交差点を渡り始めた。初春も慌ててそれに続く。大和も溜息を吐くと交差点を渡ろうとしたがちよつとアンタと美琴に呼び止められた。

「なんだよ」

「実は佐天さんの事でね・・・」

美琴はいつになく真剣な表情をする。

「アイツがどオかしたのかよ？」

「アンタ『幻想御手』（レベルアップバー）って知ってる？」

「いや、知らねエな。何だよそれ？」

美琴が言つには何でもその幻想御手とやらは音楽のようなモノで、それを聴ぐだけで能力のレベルが上がるモノらしい。  
レベルアップバー

「ふーん、でその幻想御手レベルアップが佐天と何か関係あんのか？」

「実は佐天さんレベルアップ・・・幻想御手の副作用で昨日まで昏睡状態だった。事件自体は昨日解決したんだけどね」

「おいおい・・・それ大丈夫なのかよ。昨日目工覚めたばっかりなのに外出歩いて」

「身体の方は大丈夫みたい。だけど・・・心理的に佐天さんが立ち直っているかはわからない。今日だつてリフレッシュを兼ねての外出なの」

さっきの佐天の質問の意図がようやくわかつた。恐らく佐天は能力というモノに強い憧れを持つている。だから幻想御手とかいう如何にも胡散臭いモノまで使って能力を手に入れようとしたのだろう。先程の質問は同じレベルレベルアップとして大和の意見が聞きたかったのだろう。

「何でオレにそんな事話したんだ?んな事普通は黙つとくもんどうオガ」

大和と佐天は今日が初対面だ。普通ならそんな人物に話すような内容ではない。

「私にもわからないわ。でも・・・アンタになら話してもいい気がしたの」

そう言うと美琴は佐天達の後を追う。アンタになら話してもいい気がした、か・・・。

大和は美琴の後に続きながら美琴に言われた事について考えていた。

（何勘違いしてるか知らねエけどよオ・・・オレはテメエが思つて  
るよツナヤツジヤねエよ）

自分はこの街の闇の頂点に君臨する者・・・美琴達が思つているよ  
うな人間ではない。

大和はそう自分に言い聞かせた。

そして今に至る。世間話に花を咲かせる三人とは対照的に大和はう  
んざりとした表情で外を眺めている。

帰りたい。

これが今の大和の心情だつた。すると大和はふとある事が気になつ  
た。

「おい美琴、その幻想御手事件ベベルアシバとやらはどう解決したんだ？」

まさかそれをここで聞いてくるとは思つてなかつた美琴は飲んでい  
た水を盛大に吹き溢すと大和を睨む。

「何で今聞くのよ！ 佐天さんだつて・・・」

「いいんですよ。御坂さん」

美琴の言葉に重ねるように佐天が言つ。

「私だつていつまでもそれから逃げていたらダメだから・・・。そ  
れに私も眠つてゐる間何があつたのか気になります！」

大和は正直事件の事などどうでもよかつた。後で暗部の権限を使え

ばいくらでも調べられるからだ。この場に幻想御手の事を持ち出したのは佐天が自分のした事とちゃんと向き合っているか確かめためだ。少し荒療治かとは思つたがこの方法が一番いいと判断したのだ。

「わかつたわ。話すわよ。佐天さんが眠つた後・・・」

美琴は事件について話し始めた。

佐天は真剣な表情で聞いているが大和は聞いているフリをして適当に聞き流す。だがしばらくして大和は美琴の言ったある人物の名前に反応した。

「おい、今何て言つた」

「えつ？ 幻想御手を造つたのは木山春生きやまはるみで・・・」

「木山だと・・・」

大和は驚いた表情をした。さっぱり意味のわからない三人はキヨトンとした顔で大和を見る。

「大和さん、木山先生の事知つてるんですか？」

初春が気になつて尋ねるが大和は直ぐに否定した。

「いや・・・何でもねエ」

美琴は首を傾げたがまた続きを話し始めた。

美琴の話を聞いている間にいつのまにか時間はお昼を迎えていた。大和はある事を確かめるために席を立つ。

「あれ？ 大和さんどこ行くんですか？」

佐天が大和に尋ねる。

「ちょっと用事あるんだよ。悪いけど先に帰るわ」

大和はポケットなら財布を出すと中から一万円札を取り出し伝票に挟んだ。

「四人分の支払いとテメエ等の昼飯代だ。その様子だとまだここにいるつもりだろ？釣りはいらぬエから好きなもん頼みな」

そう言うと大和は席から立ち去ろうとするが初春に呼び止められた。

「大和さん、連絡先教えてもらつてもいいですか？」

初春が携帯を構えて大和の返答を待っている。佐天も美琴も同じよう携帯を構えていた。

大和は携帯を取り出すと赤外線で初春に自分の連絡先を送る。後の一二人には初春から送るように頼むと今度こそ大和はファミレスから出て行つた。

大和が今いるのは警備員アンチスキルの留置場の前だ。ここは学園都市の中でも重犯罪を犯した者はがりが収監されている第四留置場で呼ばれてい

る所だ。大和はここである人物と面会する予定となつてゐる。中に入ると大和は『面会希望者受付』と書かれている看板を見つけ受付に話しかける。

「予約した神鬼大和だ」

「お待ちしておりました、神鬼大和さん。直ぐに案内します」

受付は立ち上がりと大和に着いて来るよつ言つ。大和は受付の後に続いた。

「それにしても驚きました。まさか学生でしたとは」

しばらく歩くと受付が大和に話しかける。

「バカにしてんのか」

「いえとんでもない。統括理事会の調査団の代表と聞いていたものですからもつとご年配の方が来るものだと思っていました」

大和は今回、統括理事会の調査団の代表という偽名を使つてゐる。それでもしなければ面会希望など出来ないからだ。

「今回はやはり『あの事件』の事で……？」

「あア『アレ』に関しては上層部もかなり問題視してゐる。見方を変えりやアかなり大規模なサイバー テロだからな」

「見方を変えねばそうですね。」ちらです

大和が案内されたのは第六面会室、中にはポツリと小さな椅子が置かれている。いかにもドラマとかに出てきそうな面会室だなと大和は思った。

「それでは少しお待ち下さい。直ぐに係りの者が収監者をお連れします」

そう言い残して受付は部屋から出て行った。受付が部屋から出たのを確認すると大和はキヨロキヨロと中を確認する。

（確認出来る監視カメラは全部で四つか。だが……）

大和は一度目を閉じるとゆっくり開く。大和は千里眼を発動する。なぜ大和が千里眼が使えるのかはここでは伏せておくが。

千里眼で再び部屋を見回すと大和の予想通り見えないよう配置された五つの隠しカメラに一つのキャパシティーダウンが確認出来た。

（流石に第四留置場ともなると監視レベルが段違いだな。まさかキャパシティーダウンまで用意してやがるとは）

大和は千里眼を解くと部屋全体にある力を行使する。

（これで準備は完了だ。後はヤツが来るのを待つだけだな）

何かの準備が完了した大和はドツッと椅子に座った。しばらくして大和のお待ちかねの人物が部屋の長机に設置されて透明の壁の向こうに現れた。

「面会希望者がいるとは聞いていたが・・・まさか子供だったとは

「・・・久しぶりだなア先生」

「久しぶり?はて・・・私と君はどこかで会った事があるのか?」

壁の向こうの人物はうーんと唸つた。

「先生H・・・オレの事覚えていねエのか?」

「覚えていないも何も私と君は会うのは初めてだと思うが・・・」

「それはこの眼を見ても言えるかア?」

大和は壁に自分の顔を少し近付けた。昼間だと言うのに部屋は少し暗い。そのせいか大和の左右色の違う瞳はかなり目立つた。大和の顔、いや正確にら彼の眼を見て収監者は椅子から転げ落ちた。

「思い出してくれたみてエだなア・・・」

「な、なぜ君が・・・なぜ君がここにいるんだ・・・?」

椅子から転げ落ちた収監者はまるで化け物でも見たかのような目で大和を見る。

「オレがくれてやった命は無駄にはしてねエみてエだなア。木山春生先生H」

大和は一ヤリと垂れだ笑みを浮べながら木山を見下ろした。

『シーズン』（前書き）

今回はアポリオンさんのオリキャラ、若見祥吾が登場します！

## 『シーズン』

大和は椅子に踏ん反りながら床に転げ落ちている木山を見下ろす。

「相変わらずアンタは無茶するヤツだな。統括理事会の連中に直接抗議したかと思えば次は幻想御手レベルアップか・・・。ただのバカなんだか命知らずなんだかわかんねエよ」

「どうして私がここにいるとわかつた・・・？」

「美琴のヤツによオテメエアンチスキルが警備員に捕まつたって聞いたんでな、あれだけの事やらかせば当然ここにブチ込まれてると思ったんだよ」

美琴といつ名前が大和の口から出た事に木山は表情を更に険悪なものにする。

「そう怖エ面すんなよ。美琴にオレの事は知られちゃいねエよ」

「当たり前だ・・・。君の正体を知った時の彼女の反応が見ものだな」

大和ははーと溜息を点いた。

「そんなにオレの事が気に食わねエか?まだあん時の事怒つてんのか?」

「当たり前だ!あれだけの事をしておいて何も感じないのか!」

木山は声を荒上げる。

「落ち着けっての。いい大人が怒鳴るなつて。みつともねエゼ」

一回り年下の大和に指摘されたのが悔しいのか木山は顔をしかめた。

「しゃアねエだろ。オレだつて好き好んでやつた訳じやねエ。仕事だつたんだよ」

「仕事だと！君は仕事の為なら子供でも手に掛けるのか！」

木山はまた声を荒上げた。今度は大和は溜息を吐くのではなく鋭い目で木山を睨み付ける。

「何バカみてエに吠えてんだア？テメエもオレと同じだろオが」

「私が君と同じだと・・・？」

「同じだろオが。目的を果たす為なら手段を選ばない、テメエもうやつて関係のねエヤツ等を巻き込んだんじゃねエのかア？」

その言葉に木山はたじろぐ。だが大和は更に追い討ちを掛ける様に続ける。

「それとも何かア？殺しさえしなけりや何でも許されんのか？随分と都合の良い話もあつたもんだな」

木山は何も言い返せなかつた。大和の言つ通り目的の為に関係のない人を巻き込んだのは紛れもない事実だ。

「だからテメエにオレを弾教する資格なんざねエんだよ。所詮オレ

もテメエも同じ人間、目的の為なら手段を選ばない最悪のクソ野郎なんだよ」

木山はただ黙つて大和の言葉を聞いていた。その表情は完全に沈みきっている。

「私には・・・あの子達を助ける資格もないという事なのか・・・」

「・・・いや、そりやアまた別の話だ。逆にアイツ等はテメエにしか助ける資格はねエ」

木山はえつ？と黙つて顔を上げる。大和は椅子から立ち上がる。

「幻想御手レベルアップを作った目的は美琴のヤツから聞いた。今日こじに来るのはその為だ」

「ど、どういう事だ？」

「つまりこういう事だ」

大和は自分と木山を遮る透明の壁に手を触ると静かに言った。

その瞬間、透明の壁はまるでテレビポートでもした様にパツと消えてしまった。

驚きの表情を見せる木山の手を大和は掴む。

「流石に正面突破はキツいからな。テレビポートで外に出んぞ」

演算を始める大和に木山は声を掛けた。

「さ、君はいつたい・・・何者なんだ?」

「ただの普通の高校生だ」

全ての物事には必ず『表』と『裏』が存在する。学園都市も例外ではなく決して表沙汰には出来ない『裏』の部分というものが存在する。そういうた『裏』の部分を一手に引き受け『表』の世界を守る為に活動している小組織、俗に『暗部』と呼ばれている組織だ。

現在学園都市には五つの暗部組織が確認されている。

垣根がリーダーを務める『スクール』、麦野や浜面が所属する『アイテム』、そして『グループ』『ブロック』『メンバー』の計五つだ。組織としての活動方針は各自で異なるが結果としては『表』の世界を守る事に直結している。

だが学園都市にはもう一つ、統括理事会の一部の人間しかその存在を知らないと言われている暗部組織が存在する。学園都市の闇の最深部に君臨するその組織の名は『シーズン』、またの名を『最暗部』。

『シーズン』の活動方針は大きく分けて三つある。一つ目は学園都市の『憂い』を払う事、二つ目は機密情報の管理、隠蔽など、そして三つ目は他の暗部組織の監視、暴走した際の鎮圧。

『シーズン』は『ブロック』と同様にアレイスターの直属だが信頼度の高さは『ブロック』を遥かに上回る。

話は変わり、ここは第三学区にある高級ホテル最上階のプライベートルーム。一泊数十万円する超高級な一室に四人の男女がいた。彼ら等はみな『シーズン』の構成員でこの一室は彼等が隠れ家として貸

し切つて いるのだ。

「大和のヤツ・・・また面倒な事しやがつて」

ダボダボの黒いシャツにジーパンとこの一室に余りにも不釣り合いな格好している少年がこの場にはいない五人の構成員の大和の愚痴を漏らす。

「今度は何をしでかしたんですか？」

全身を高そうな衣服に身を包んだ少女が少年に尋ねる。

「第四留置場から女を一人脱獄させたらしいぜ。しかもそいつはあの木山春生[うらじい]」

少年の代わりに科学者だろうか、白衣を着た青年が答える。

「・・・大和さんって結構無茶なさる方なんですね」

「甘えぜ慈雨。脱獄なんざアイツからみりやあまだまだマシな方だ」

ジー・パンの少年、柊夜野透[しおやのとおる]はうんざりとした表情をしながら言つ。

「そりなんですか？」

「柊夜野の言つ通りだ。大和のやる事は大概俺達の予想の斜め上をブチ抜く。脱獄程度何の造作もないだろつ」

白衣の青年、岩見祥吾[いわみじょうご]は言つ。

「まあ新入りのオマエはまだ大和の事よく知らねえだろうからな。そのうちわかつてくるぜ」

柊夜野の言葉に神野慈雨は頷いた。

「そろそろ『元締め』から仕事の話がくるわよ。大和の事はまた後よ」

胸元が大きく開いた妖艶な格好をしている女性、『シーズン』のリーダー小野寺朱雀は手をパンパンと叩きながら言つ。

「仕事かあ～、つか今回は何の仕事だよ？珍しくオレに下調べの注文がなかつたからな」

柊夜野の『シーズン』における役割は主に情報収集だ。『裏社会』とも言われる幅広いパイプを持つ柊夜野の情報収集力は仕事の完遂率トップを誇る『シーズン』になくてはならない要素だ。

「私も知らないわ。招集が掛かったのも突然だしね」

「今回のような緊急招集はよく事なんですか？」

「いや、そうある事じゃないぜ。緊急招集が掛かる時は大概何かヤバい仕事の時だからな」

慈雨の問いに祥吾は答える。

とその時、プライベートルームの巨大な液晶モニターの電源が一人でに起動した。画面には大きく『バツ』が映し出されている。

『は～い！みんなあ～！集まつてるかなあ～？』

高級感漂つ雰囲気をブチ壊す甘つたるい声がプライベートルームに響く。

この甘つたるい声の主は『シーズン』の事実上の上司である通称『元締め』だ。事実上と言つたのは彼等は他の暗部とは違ひ明確な直轄を持たない為だ。条件どギャラ次第で殺しから護衛、破壊活動とほぼ何でも引き受けん『シーズン』への依頼は全てこの『元締め』を通じて構成員に伝えられる。もちろん内容が学園都市への反逆らしき仕事なら依頼人」と抹殺するのだが。ギャラを貰つてから・・・。

「大和は来てないわよ」

朱雀は大和の不在を知らせる。

『また大和ちゃんは来てないのー?あの子は一番のお氣に入りなのに・・・』

本氣で残念がつてゐる沈んだ声で『元締め』は言つ。

「オマエに氣に入られたら来たくもなくなる訳だ」

『ちょっと透ちゃん!それ、どうこいつ意味かしらー?』

薄い笑みを浮かべながら暴言を吐く柊夜野に『元締め』は若干本氣で怒鳴り付ける。

「茶番はいいからさつと仕事の内容を話せ。お前と違つて暇じゃないんだよ」

『茶番、って……相変わらず毒舌なのね祥吾ちゃんは……じやあお仕事の話するわよ』

『元締め』の言葉にプライベートルームの空氣が一気に引き締まる。

『今回のお仕事は大和ちゃんに関係する内容なのよ』

大和の名が出た事に全員に若干の驚きが走る。

「まさか大和のヤツを殺せと言つんじゃねえだろ? な?」

『そんな事ある訳ないでしょ! 大和ちゃんを殺すなんてあり得ないわー!』

「じゃあ何なんだ?」

『言ひ方が不味かつたわね……。関係するじゃなくて正しくは関係しちゃつた、かしら?』

「意味わかんねえよ」

祥吾がイライラしながら言つ。

『みんなは木山春生つて女知つてる?』

『先日の幻想御手事件の犯人でしたよね? 確か大和さんが脱獄させた』  
レベルアップ

『あら? みんなその事知ってるの? なら話が早いわね。実はその木山春生つて女、前々から結構統括理事会とかにちょっとかい出してい

たらしくてね。今回の事件で堪忍袋の緒が切れたみたい』

「つもり木山春生の始末を俺達がやれと。別に緊急招集掛けるまでもないじゃねえか」

祥吾は画面を睨みながら呟く。すると『元締め』は言つ。

『違うわ。あなた達にやつてもいいのはその逆、木山春生の保護よ』

『どうして事かしら?』

朱雀は『元締め』に尋ねる。

『統括理事会の中には彼女の事を高く評価する者もいてね、殺すには惜しい人材みたい。十中八九彼女を闇に引きずり込むと思うけど。あなた達の仕事は彼女を狙うヤツ等から彼女を守る事』

『木山を狙つてるのはどこのヤツ等かしら?』

『アイテムよ』

『『アイテム』って確か第四位がいるとか?』

柊夜野が念のため確認を取る。

『ええ、学園都市の第四位、「原子崩し」（メルトダウナー）のこと麦野沈理がリーダーしてる組織よ』

『いいのか?オレ達が相手となるとレベル5が一人消える事になんぜ?』

『殺したらダメよ』

「えつ？殺さないんですか？」

慈雨は思はず聞き返す。

通常暗部の仕事において生かして帰すという事はほとんどない。特に『シーズン』ともなればまずあり得ない事だ。

『依頼人からそう指示されたのよ。やっぱりレベル5は大事みたい』

慈雨達はどうも納得いかない表情を浮かべていたがこれ以上言っても仕方ないので無理矢理納得する。

『お仕事の話はこれでおしまい！大和ちゃんにもちゃんと伝えてね！じゃ成功祈ってるわ！』

『元締め』がそう言いつと液晶モニターの電源が落ちる。それを確認すると朱雀はゆっくりと立ち上がる。

「各自意見があるでしょうけどキャラもかなり良いし黙つてやるつもりよ。それに・・・レベル5がいる暗部相手とやり合えるなんて滅多にない機会よ」

それを聞いて残りの構成員もゆっくりと立ち上がる。

「さて、どうしますこれから。とりあえず大和さんに知らせますか？」

「いや、知らせる必要はねえ。『アイテム』如きアイツの手を借り

るまでもねえよ」

「柊夜野の言つ通りだ。俺達だけでも十分お釣りが来る程度の相手だからな」

「どうやら一人には大和を頼る気は全くない様だ。慈雨は朱雀をチラツと見るがどうやら彼女もその気である様だ。まあ慈雨も大和を頼る気は全くないが。

「どうするよ朱雀。相手から出向いてくれるのを待つのか?..」

祥吾は朱雀に今後の方針を確認する。

「いや、待つのは面倒よ。こっちから出向いた方が早いし『アイテム』にも脅威になる筈よ。それにアイツ等はあー見えて仕事が早いからね」

そう言つて朱雀はクルリと柊夜野の方を向き視線だけで指示を送る。それを受け取つた柊夜野はコクンと頷くとゆつくりと目を閉じる。

「検索対象は『原子崩し』でいいんだな?..」

「一応『アイテム』全員で頼むわ。もしかしたらバラバラに行動してるかもしれないしね」

柊夜野は了解と言つて目をゆつくりと開く。目を開いた柊夜野の瞳は血で染められたかの様に赤く変色していた。

「見つけたぜ、『原子崩し』(メルトダウナー)はここから15km程離れた所にいる。ラッキーな事にメンバー全員と一緒にだ」

それを聞くと朱雀はニヤリと口元を歪ませた。

『アイテム』の四人はワゴン車の中にいた。上司である『電話の女』から突然の招集が掛かつたからだ。

「ターゲットが逃げ出した?」

麦野は思わず聞き返す。

「結局、それってどういつ訳よ?..」

麦野に続いてフレンダが『電話の女』に尋ねる。

『私だって知らないわよー。むつき依頼人から知らされてビックリしたわよー!』

逆ギレの様に怒鳴り『電話の女』に麦野は若干イラつとする。

『どうやって逃げ出したんだよ?あの女がブチ込まれてたのは第四留置場だろ』

乱暴な口調で麦野は『電話の女』に尋ねる。

『だから知らない、っての!知つてたらどうして言つてるわよー!』

麦野が何か言おうとした時、突然運転席から悲鳴が聞こえた。何事かと思い浜面が引き戸を開け確認する。

「おいおい……何だよ、これ……」

運転席に座っていた下部組織の一人の首はキレイに切断されていた。首を切断された胴体から留まる事なく血が噴き出しており運転席は血で真っ赤に染まっていた。

「はまづら、ビラしたの……？」

後ろからヒョウ口と顔を出した滝壺は運転席の惨劇を見て凍り付いた。あまりに残酷な光景に顔から冷汗が流れている。

浜面が滝壺の顔を覆おうとした時、ふとワゴン車の前方に誰かがこちらを見て立っているのが見えた。

黒ビジネススーツを身に纏い左目に白い眼帯をしているその男はまっすぐとこちらを見ている。問題だったのはその男が引き裂く様な笑みを浮かべている事、そして右手に血で染まつた西洋刀を握っていた事だ。

アレは、やばい

直感でそう思った浜面は後ろにいる麦野とフレンダに叫んだ。

「お前等、早くクルマから降りろ！…！」

浜面が叫んだのと同時にビジネススーツの男は西洋刀を上に擧げると勢い良く振り下ろした。

信じられない事に振り下ろされた西洋刀は刀身がワゴン車まで伸びていきそのまま縦半分に叩き斬った。

半分に切断されたワゴン車はバチバチと火花を散らすと爆発する。

麦野とフレンダは何とか無傷で脱出したが滝壺を底つた浜面は無傷とはいからず爆発で飛び散ったワゴン車の破片が背中に直撃する。

「へえー、味を呈して女の子守るなんてかつこーー男の鏡だな」  
ビジネススーツの男、『シーズン』の構成員の一人若見祥吾は軽く拍手をしながら言つ。

「はまづらーーしつかりしてーーはまづらーー」

滝壺が必死に叫びながら浜面の身体を搖するが返事はない。

「安心しろ、死んじやいねえよ。殺したらダメって言われてるからな」

それを聞いて少し安心したのか安堵の表情を浮かべる滝壺。そして祥吾の顔を見上げるとキッと睨み付ける。

「どうしてはまづらを傷付けた?..どうしてこんな事するの?..」

「おいおい、そりゃあお前の言えるセリフじゃねえだろ。『アイテム』の滝壺理后よ」

自分の所属する組織の名が出た事に滝壺は警戒心を強める。とその時滝壺の後方から青白いビームの様な物が祥吾に襲いかかる。かなりのスピードだったが祥吾は難なくそれを躱す。

「不意討ちかあ 麦野沈理。第四位つてのも案外セコいんだな」

余裕の笑みを浮かべながら祥吾は言つ。視線の先には鬼の形相で睨

んでいる麦野と手に爆弾を持つフレンチがいた。

「私を第四位（レベル5）と知つて襲うつたア 隨分と命知らずクソ野郎みてエだなア」

麦野の手が淡く発光し始める。

「命知らずはてめえの方だクソ女。たかが第四位の分際で調子に乗つてんじやねえぞ」

祥吾は西洋刀を構える。だがその構えにはまだどこか余裕を感じる。

「ふざけやがつて・・・！テメエは！」でブチコロシ確定だコラ」

「遊んでやるよ雑魚。せいぜいくたばんねえよつに頑張るんだなあ」

その瞬間、麦野の手から原子崩し（メルトダウナー）が放たれる。祥吾は横に躰し反撃に移ろうとするがそこにフレンダが爆弾を投げ付ける。

だが爆弾は祥吾に当たることなく空中で爆散した。突然横から飛んで来た白いドームの様な物に貫かれたからだ。

「残念ですけどあなたの相手はこの私ですよ」

フレンダと麦野は声のした方を振り向く。そこには身体の周りに八面の立方体を一つ展開している神野慈雨が薄い笑みを浮かべていた。

「何でお前がいんだ？慈雨。確かにいつ等の相手は俺だけだった筈だぞ」

「朱雀さんに言われたんですよ。レベル5相手にやつ合戦の機会なんてそうないから、って」

（あの野郎・・・余計な事しやがって）

祥吾は心中で朱雀に愚痴を溢す。

「仕方ねえな・・・第四位はお前にやるよ。俺は代わりに金髪をブツた斬る」

麦野は祥吾に向かって原子崩し（メルトダウナー）を放つが慈雨がそれを防ぐ。

「邪魔してんじゃねエぞ小娘が！ テメエからオブジエに変えてやろオカア！」

「あなたの相手は私ですよ。せめて三分钟は保つて下さいね」

「死神にお祈りは終わつたか？ 金髪」

「・・・これつて結構ヤバい感じ？」

『アイテム』と『シーズン』 学園都市の暗部組織同士の闘いが始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7279x/>

---

とある都市の事象選択《オールセレクト》

2011年11月24日16時50分発行